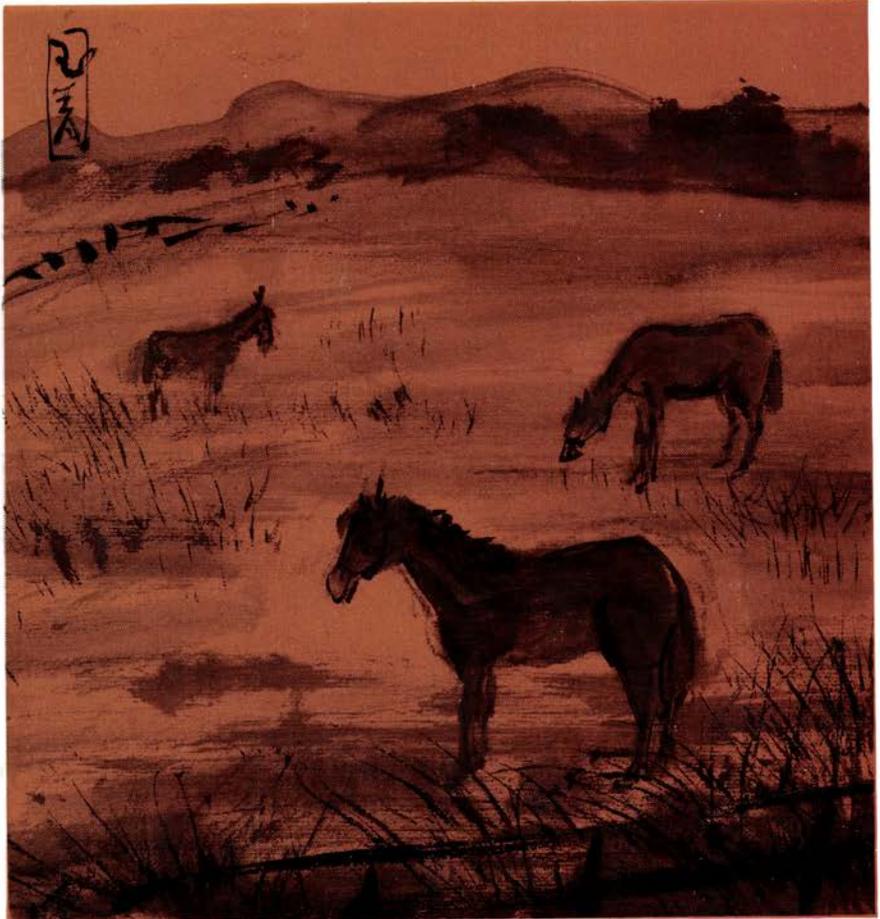


川柳塔

昭和六年十一月二十五日創刊
昭和六十三年十月二日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七二五号



日川協
加盟

No. 7 2 5

62年度二賞発表

十月号

62年度 同人総会と

一二賞表彰10月旬会

日時 昭和62年10月4日(日) 午後一時開場
会場 大阪市立労働会館

JR環状線又は地下鉄中央線「森ノ宮」
下車すぐ(日生球場東側)
電話 〇六(九四一)六三三一(代表)

▽同人総会 午後2時〜3時30分

〔議事〕①会計報告―高杉鬼遊

辻白溪子 ③役員改選 ④質疑応答

▽二賞表彰旬会 (詳細は最終頁をご覧ください)



兼題 「摩擦」 「沈黙」
「滝」 「占う」

各題3句・締切6時30分

川柳塔社

尼緑之助出雲市文化奨励賞受賞 祝賀川柳大会のご案内

日時 十月十八日(日) 十二時三十分

会場 大平食堂(三F) 出雲市駅正面

お話 川柳塔副主幹 橘 高 薫 風

兼題 「徳」 尼崎市 黒川 紫 香選

「歩く」 大阪市 塩 満 敏選

「ふるさと」 米子市 林 瑞 枝選

「同志」 米子市 小 西 雄々選

「楽しい」 松江市 本 庄 快 哉選

「簡単」 松江市 恒 松 町 紅選

「腹」 浜田市 中 川 幸 一選

特別課題 「縁(えにし)」 尼 緑 之 助 選

特別課題は出欠にかかわらず十月十日までに投句先まで
事前投句下さい。(各題二句吐)

会 費 二、五〇〇円(祝宴費共)

投句料 (欠席投句) 五〇〇円

投句締切り 十月十日厳守

投句先 〒683 出雲市松寄下町二八四

吉岡きみえ宛

主催 いずも川柳会

若 人

西 尾 栞

東奥日報社主催、第四十一回青森県川柳大会の特別選者として招聘を受けた。

七月五日、六日、七日の三日間は大変な歓待であった。

大会は六日(日)十時開場で、社の四階ホールで開かれた。既に県内外の川柳愛好家で会場は埋めつくされていた。兼題七題で、席題三題は選者一名の共選であった。だから選者十三名が登壇するといふペテラン揃いの大会で、発表句もまたレベルの高い名句揃いであった。私は眼

を閉じて聴き入った。

最後に総合得点で授賞式が行われた。

一位知事賞、二位県会議長賞、三位市長賞と十位まで表彰されたが、前に出て受賞される方は、不思議にも、どの方も皆若い人達許りで愕いた。青森柳壇の前途の洋々たるを約束されていて頼もしく思うと同時に羨ましく思った。

県川柳大会は、本年度で第四十一回を数えられるのだから、終戦の翌年から大会を開催されたのである。昭和二十一年、二年という時期は、国民は飢えに右往左往していた時代で、川柳という文化に眼をやるには程遠い頃であったのに、日報社は既に第一回の大会を昭和二十一年に

持たれ、そして一回の休みもなく、続けてこられたことは、洵に頭の下がる思いであった。

我が師路郎も何十年か前に招待されて芭蕉の曾良のように、薫風、メ女がお供されたことは有名な話であるが、その当時、東奥日報社は木造社屋であったのが、今度参上して鉄筋五層の立派な社屋になっていた。薫風さんはいたく驚いていた。

来年は、日報社の百周年の記念年を迎えられる欣びの年と聞いている。東奥日報社の益々の隆昌発展と、川柳大会の末長く続けられんことをお祈りして、大会出席の御札のペンを擱く。

座右の句

呑んで欲しやめても欲しい酒を酌ぎ (葎乃)

私の句

甘え癖つけて見送る蟬時雨

山田 高夫

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

若人……………	西尾 栞……………(1)
大阪川柳人クラブへの認識とお誘い……………	西田柳宏子……………(2)
川柳塔(同人吟)……………	西尾 栞選……………(4)
自選集……………	東野 大八……………(32)
■川柳太平記(113) 川柳の群像 R・H・ブライス……………	黒川紫香選……………(40)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十二丁)……………	辻 白溪子選……………(31)
62年度路郎賞・川柳塔賞決る……………	久家代仕男選……………(63)
水煙抄……………	阿達 義雄……………(57)
秀句鑑賞「同人吟」……………	
川柳点の先蹤となつた上方句……………	

大阪川柳人クラブ

への認識とお誘い

西田柳宏子

残暑去りやらぬ八月三十日、八尾のラドン温泉、割烹日本海に於て、大阪川柳人クラブ総会が開かれました。参加者僅かに廿二名、名前に較べて淋しい限りの総会である。登録されている川柳人の六十余名という数も、現在の大阪府下在住川柳人の数からみても少ないと言わざるを得ない。

このことは寧ろ大阪川柳人クラブなるもの自体PR不足で知られていないことに起因するものと思われまますので、皆さん方のご認識を頂く意味も含めて、ペンを執ります。

現在大阪に芸術関係団体を網羅した「大阪文化団体連合会」(会長は朝日放送会長長原清氏)なるものがあり、演劇、演芸、絵画、書道、音楽、舞踊、茶華道、文芸等々の関係団体相集い形成されており、短詩型文学の分野では早くより大阪歌人クラブ(短歌)大阪俳人クラブ(俳句)が参加活動しているが、独り川柳部門は取り残されておりましたが、三年前漸く川柳文学永田帆船氏の尽力で大阪川柳人クラブが発足し、初代会長には番傘川柳本社故金泉萬樂氏が就任され大阪文化団体連合会の中に川柳部門の存在が認められるに

名人の汗	阿部 柳太	(59)
愛染帖	橘高薫風選	(60)
〈女性コーナー〉 茴香の花	小出智子選	(64)
第2回川柳塔勉強会	遠山可住	(66)
宇治の橋姫	布施幸子	(68)
悼本田溪花坊先生	児島与呂志	(76)
初歩教室	阿萬萬的	(70)
「賭ける」	小西雄々選	(72)
一路集「手紙」	西口いわゑ選	(72)
「壺」	小林妻子選	(73)
柳界展望		(74)
本社九月句会		(77)
各地柳壇(佳句地10選/神平狂虎)		(81)
■ 10月各地句会案内		95
	■ 編集後記	97



至りました。萬樂氏ご病気のため二代目会長に川柳塔社西尾栗主幹が就任、現在に至っております。

現在川柳塔、番傘、川柳文学、瓦版、天守閣、一枚の会等々の人達六十余名の加入を得ているが、年一回の総会には二十余名の参加にすぎない。勿論その活動が川柳界自体への働きかけでなく、外部即ち文化関係団体へ川柳界のアピールが主であることが何か我々川柳人に縁遠いもののように受け取られていることも否定出来ない。これも川柳界が短詩型文学の一翼を担う立場からすれば大事なことと思えます。一社でも多くの柳社、一人でも多くの柳人のご参加を頂き大阪川柳クラブの存在意義を昂揚出来るようご支援を頂きたいと思えます。

因みに会費は一ヶ月三百円(年三千六百元)ですが、現在六十余名の加入者中総会出席者及びその他の数名の方々の会費徴収で賄われている実情である。

次に現役員をご紹介しておきます。

- 会長 川柳塔社 西尾 栗
- 副会長 番傘本社 磯野いさむ
- 同 川柳文学 永田 帆船
- 会計 天守閣 米沢 俊雄
- 幹事 各柳社若干名
- 事務局 川柳文学 木原 笑俳

連絡先 543 大阪市天王寺区真法院町
二丁目一六番地
電話 06-1771-1663番

川柳塔

西尾葉選

大阪市 津守柳伸

奥入瀬のそぞろ歩きはプレゼント

ソーメンの愛で貴船の蟬しぐれ

据え膳が嬉しい妻のおくれ髪

経済誌はなさぬ彼と中之島

それからの話は聞かぬ夫婦仲

どん底をあの手この手のJ R

岡山県 嘉数 兆代賀

萩のみち振り向くことが多くなる

ヤジロペーお前もゼニに傾くか

忘れぐせ老母は喜劇をくり返し

泣かされた鬼が力になってくれ

本心をよまれてからの失語症

すばらしい出会いへきょうの陽が沈む

松原市 谷垣史好

不機嫌のもととはいえば丸い文字

若者のそこんとこころが分らない

今日もサラタ明日もサラタのはやり唄

腑におちん顔で寝ている棺の中

詮索はすまい死因は心不全

歯刷牙子を真つさらにして今日は秋

桜井市 岩本 雀踊子

身上げなしきいて下さい泣き羅漢

義理人情男の道は浪曲で

おとんぼの扶養家族にしてみらう

話の解る叔父も失敗した女

問題にされぬ寂しい男たり

群衆になつてゐる私に顔がない

下関市 石川 侃流洞

安楽死薄情医者と言われても

墨で消したとこを透して読んで見る

週休二日肝臓労基法叫ぶ

やがて子のシナリオになる墓洗う
ニンニクたっぷり入れて謀叛考える
猛犬に注意チワワと二号住んでいる

熊本市 有 働 芳 仙

嘘字でもいいではないからブレター
新世帯妻も畳もいい匂い
孫が来ると玩具に蹴つまずき

マンションへ浴衣の柄が馴染めない
枯枝へ月が刺さっている孤独

黙禱へ今夜の猷立考える

米子市 小 西 雄 々

喧嘩にはならず遮断機降りてくる

母の樹の下で素直に話し合う

腰痛へ部品交換してみた

白眼視されても鯛のあらを買う

逆も真晴れを信じた雨男

糸電話母に聞こえてくる秘密

八尾市 高 杉 鬼 遊

百日香ははの逝つたをまだ知らず

大臣が出てふるさとの喋りすぎ

にんげんをとがめる自動改札機

梅田ではない大阪と言えJR

にわたりの怒りたまごが安すぎる

はじき豆むかしむかしを語りだす

松原市 玉 置 重 人

談論風発コンニャクの裏表

端株が上がり板前の腕を褒め
そうめんもビールも冷えて満ち足りる
補聴器の感度を上げた花言葉

よく喋る大工の釘を確かめる
自転車に溢れて黒字国

京都市 都 倉 求 芽

お互いの赤に負けまい百日紅
稲光りそれから風鈴慌て出し

働いた下着へ真面目な洗濯機

留守番の用事は冷房機の掃除

方言のおばちゃんの方で買う土産
博識のタレント筆順違つてる

大阪市 西 出 楓 楽

うしろ指気になり背中よく流す

救急箱に詰めてあるのは薄なさけ

ああ夫婦合言葉など持たぬのに

休みたくなつたら齡をふりかざす

素うどんと茶漬にたどり着くグルメ
安っぽいヒューマニズムで靴が減る

弘前市 波 多 野 五 楽 庵

天網恢恢やつぱり妻に洩れている

人間の病名がつく猫の汗

日が落ちて赴任の酒が詛り出す

D51の音を忘れぬハーモニカ

殿りが好きで低めな妻の靴

秋には秋の花がこぼれる道が好き

奈良市 宮口 笛生

八月の話題にかなしいこと揃う
コーヒーはホットでクラーキつい店

一晚の過疎がふくれた盆おどり

穂が揃う今年も米が余りそう

草も伸び稲穂も伸びて秋の雲

飽食の限りを嫌う冷や奴

大阪市 北 勝美

適齡期結婚だけとは限らない

適齡期お寺詣りとレトロ趣味

地下鉄の階段辛い適齡期

保険屋に敬遠される適齡期

親切を無性に喜ぶ適齡期

反骨がちよっぴり残る適齡期

竹原市 小島 蘭 幸

履歴書を書いているのは僕の妻

金魚の死金魚に名前つけてある

金魚鉢の中へも雨が降っている

踊り続けているのは私だけですか

カナカナよ妻が見たいと言っている

甲子園判官鼻貞などしない

和歌山市 西山 幸

冷静に柱時計が鳴っている

鏡よ鏡尖った顔は止しましょう

私がわたしを疎む日の長さ

焦るまい柿もみかんもまだ青い

根ほり葉ほり聞く人と向き合っている
見返してやる目薬を下手に注す

西宮市 林 はつ 絵

訃報きく今朝のセロリーほろ苦く

生きた日がフィクシオンとなる霊柩車

ほんとうは不倫へすこし揺れている

距離置いてサボテンの花褒めている

O型の子もO型で愚痴言えず

味噌汁だけは金持ちと変らない

和歌山市 福本 英子

よく見える眼鏡外してからの仲

嬉しくてやがて哀しい立秋の風

言葉尻拾うまだまだ惚けてない

義姉さんにとても勝てない焼香順

起きてみつ寝てみつ孫ら夏休み

待合室同じ痛みを分かちあう

大阪市 本間 満津子

送る身も又送らるる大文字

夢で見る私は白杖持っています

笑って済ますとは淋しいではないか

花の香のような言葉が身にしてみる

オーデコロンすこし涼招ぶ熱帯夜

手仕事のよう甘栗意地になり

茨木市 井上 森生

みちのくの祭り

寝台車レールに続く旅の夢

竿灯を美事頭にのせる意地
米粒の開運こけし米どころ
余る米八郎湯の読みちがい
秋田米食って美人になれぬ人
本田様遺したさすが絵や庭や

今治市 越智一水

枕辺の灯を妻が消す旅はよし
納涼船しぶき嬉しいものうち
夏山のときめき雲わき雲が呼ぶ
ワープロの便り小馬鹿にされたよう
泣いて笑ってその子育てに虹を見る
路郎忌へ仰げば光る雲の峰

和歌山市 神平狂虎

秋は少し受け身になってしまふ詩
いきさつを話す小さな壺の中
足元に浄土があると風が言う
考える事あり島て出す手紙
灯台に小さな愛を見てもらう
秋の絵に入って行った火のおんな

岡山県 土居耕花

パチンコを終る色即是空かな
月末は諸行無常と成り終る
盂蘭盆を考えたのはソーメン屋
天国に一番近い急カーブ
ピカソなら尖らす妻の低い鼻

美禰市 安平次弘道

過去消して女は蝶になりたがる
崩したのはわが子夫婦で積み直し
母に似てやんわりと効く糖衣錠
当選をしてもダルマは笑えない
万一には互いにふれぬ保証印

平田市 久家代仕男

ロッキードのミニ版しきり地方自治
新米は値下げ古米は倉に寝る
剽軽を皆に愛されひとりの死
洗濯に出せば喪服に用が出来
責任の飛火が軽い課長補佐

倉吉市 奥谷弘朗

極め球を持った男にある気力
プランだけ練って価値観には触れず
石の父綿の母居て家丸い
北壁と名付けた石を庭にすえ
三拍子揃う嫁だが背がひくい

呉市 林野甦光

秋茄子の紫紺いよいよ自我に入る
コサージュは昔話を聞き捨てる
香水の甘さとしばしバスに揺れ
綾取りは小さな恋のうわさなど
転居先赤いポストを見て曲れ

仙台市 川村映輝

死刑囚再審無罪になる恐さ
同じ味噌食べた同士で金婚式

かぶりつく西瓜裸がよく似合う

桃太郎鬼征伐の後がない

会葬の顔ぶれ人柄よく解る

八尾市 宮 西 弥 生

結婚記念日はないサラダ記念日ならある

ゴンドラが道頓堀で唄忘れ

般若心経覚えました敗戦日

日足短かくサラダづくりを急がねば

見送りの女情の夏帽子

名古屋市 越 村 枯 梢

不倫願望文字は目尻に書いてある

七十路今さら癌になったとて

禁酒禁煙医者は非情なことを言う

雑学に長けて家計は身につかず

脇役の戸惑い花束贈られる

島根県 小 砂 白 汀

掌を返せば忽ち秋の雲

かいま見た悪夢の彩は伏せておく

雨もよしこの昂ぶりを冷すなら

もうちよっとどうかならぬかレオタード

裏方に徹して風に逆らわぬ

島根県 堀 江 正 朗

美しい話へ見えぬ眼も動き

絞っても想い出せない影法師

少年の耳にもどった祭り笛

感試す雨はいろんな音たてて

人の情け折りこむ如き鐘の音に

島根県 堀 江 芳 子

人生の心の地図は合掌に

去ぬときも雷恐い音たてて

ハイハイハイ電話へ濡れ手拭きながら

古稀近くやつと世間の波に馴れ

あるときは可愛い魔女が和を保つ

島根県 松 本 文 子

核のボタンロケットなんかには押させぬぞ

星の国わたしの席もあけといて

招かれて机のほこりは見ずにおく

優しい人と居るから大人にまだなれぬ

元他人でした亡夫に水をかけ

出雲市 園 山 多 賀 子

挨拶に愚痴を重ねる習い性

万葉の奈良

宮滝に流れも狭き相聞歌

永観堂

みかえりの仏の姿勢慈悲を酌む

親切ごっこ旅に疲れて老い夫婦

会釈だけ交す道にも百日紅

出雲市 吉 岡 き み え

度胸のない男と渡る丸木橋

遠花火過去の愛が断ちきれず

生受けた此の世苦悶の業背負い

宵越しの金腹巻ふくらませ

ライバルのもろさをついた向うずね

和歌山市 堀端三男

いまわの際まであなたの彩に染まります

八月六日あの日も燕飛んでいた

八月十五日僕の入隊前夜です

ひとつのこと聞く耳さえも遠くなり

頑固一徹いつも背中で聞いている

和歌山市 若宮武雄

欲を失くした安らぎと忙しさと

夏ばてに関わりがない髭の伸び

終着駅亡妻の迎えを信じよう

男だけ集まることはない世相

秋風が立って亡妻の一周忌

和歌山市 垂井千寿子

高野山冷気の中に師の影を

山門をくぐれば風も巖かに

法師蟬亡夫見ぬ孫とする墓参

青函連絡名残りつきない顔写す

遠火花あの日も着てたこの浴衣

和歌山市 松原寿子

胸の芯おれそう熱いまなぎしよ

にくい人へしつべ返し針を刺す

降ってくる噂へ傘を撰っておく

逢えるならせめて指切りしてほしい

齒車になろう君のためならば

和歌山市 内芝登志代

手を振ってうなずきうなずき老母帰る

手紙さえくれば母さん安堵する

パン食が大和魂消してゆく

子の転動天気が遠う遠隔地

耳よりな話素知らぬふりで聞き

和歌山市 牛尾緑良

もういいかい笑顔が底をつきそうて

傷口を偵察にくるライバルよ

弁当をきれいに食べる思いやり

ヒーローになって芸から歩がそれる

肩書きのない自画像に笑みがある

和歌山市 福井桂香

秋風が恋しくなった花暦

月見草夕子が風にうちふるえ

コスモスと戯れ風は白くなり

わたしが主役苦しみに背は向けず

原点を辿れば遠い母の膝

和歌山県 寺田裕美

鎌を研ぐ女の力あなどれぬ

日本の味へ夜干しの梅匂う

農政の不服カカシがそっぽ向く

盆ぐらい祭りがらいと遊びぐせ

蟬殻も祈る姿の原爆忌

和歌山市 後藤正子

ハマナスの花潮騒は亡母の詩

うすい緑の亡母の匂いよ体温よ

再会を果さぬ白い雲流れ
釧路のカモメ亡母の噂をしてほしい
露草の露はむらさき亡母想う

弘前市

田 中 叶

いまのとこしあわせで癌かもしれない
お役所に卵の殻がうず高し
いい上司いたらアリにもなる私
子の父はプールに来てもたよりなし
父乗せた朝すれ違う霊柩車

倉敷市

野 田 素身郎

シャッター音僕を狙っておったとは

後遺症の足が重たい油照り

負けても負けても僕は阪神タイガース

通院十年主治医も看護婦も変り

自叙伝へ今は書けないことがある

倉敷市

稲 田 豊 作

楷書の家庭に草書の子が育ち

サラリーよ僕の値打を喋るなよ

口論の纏れをユーモア軽く切る

母と妻の二つの顔で帰り待つ

よちよちの孫が主役で明け暮れる

唐津市

田 口 虹 汀

鷺草へ汗と土用の逃避行

三日月に祈る私も日本人

華やかな水着は知らぬ水の味

泰然と酷暑に挑む鬼瓦

鵜呑した英語道々反芻し

唐津市 仁 部 四 郎

献血車礼儀正しく動き出す

血縁にすがった票でかびやすい

血縁をたどって着いたけものみち

十月の蚊にも血を吸う気迫あり

月給日コンピューターに吸われた血

唐津市 久 保 正 敏

そうですかあの奥さんもそうですか

評判は悪いが現場に近い医者

日替りのメニューで母に飢えている

平和とは明るい不倫と下手な唄

企業秘の味を炭火に教え込み

唐津市 浜 本 久 仁 於

夢追うて夢追うて回り道

望郷の空の白さに泣けてくる

論語まだ棄てず葉隠れ里に老い

孤児かなし臉はいつも東向く

八千公の耳が動いた午後の駅

大阪市 江 城 修 史

原爆忌冥府の霊の無念さよ

精いつばい生きて運には遠く居る

人情と義理が風化する世相

かき氷遠い記憶の中の人
生きとし生きるものあり夜の底

大阪市 黒 田 真 砂

あじさいの頃の約束鬼笑う

ママさんのジョーク茶房の灯が温い

飼犬を他所へやるなの涙雨

言わいでもの事が胸刺すうす明り

失意の日の空の青さが胸を刺す

良い仕事したあと快い眠り

齒に衣を着せぬ男で憎まれず

引き際をあれこれ思う年齢となる

親切に言えばうるさいとしか取らず

権利主張責任隅へ押しやられ

結論を急かせるように遠花火

熱帯夜五十は五十の暑さあり

仏だんの母にまだまだ甘えてる

砂糖つぼ見つけて蟻は働かず

包丁はあつまりりしたものの切りたがり

明日に夢バックミラーものぞく年

カネが仇かなわぬ迄もくじを買う

結論が出ぬか群雀かしまし

食欲の秋胃袋はしみつたれ

連れそうて居ても不運なつまようじ

犯人は風よわたしを屑籠に

貴婦人の絹はそよ風恋の風

米子市

林

瑞

枝

大阪市

河井庸佑

大阪市

神夏磯道子

吃水線でじつくり掴む今日の倅

笑い袋が湯殿で叱られています

アメリカの怒り竜馬はどう裁く

朝の陽を私の窓へまず呼ぼう

どの雨も受ける覚悟の大杉よ

「ご主人の分も長生きして」とは酷な

確約は未だない明日のきのこ雲

ささやかな窓二階から伯耆富士

夫喜寿(四句)

辿りついて見れば苦もない喜寿の背な

まわりから喜寿だ喜寿だと祭り上げ

坦々と生きて傘寿も米寿もと

槍鏑も鏑ない喉で喜寿の夫

いい思案出るまで書齋から逃れ

目覚ましの餠は子供と限らない

酸欠の金魚で辛い話する

締め切りの迫る書齋に音がない

行く末へ減塩説は曲げられぬ

わさび抜き馬鹿なお寿司を子へ握る

サルビアが炎えて人呼ぶ無人駅

落し穴の底で青空恋しかろ

旅さなか時々帯をしめなおす

米子市

澤

田

千

春

米子市

菅

井

とも

子

米子市

野

坂

な

み

米子市

寺

沢

み

ど

里

いろいろの位置から影に守られる
さわやかな朝が蛇口を走る音

松江市 恒松 叮紅

橋渡ってから思い出す忘れもの
喪主のあいさつ訥弁がうけている
残置燈の暗さを知らぬネオン街

わたしが後へ残ってよかった初の盆
母ひとり故郷へ残した新学期

松江市 柳楽 鶴丸

女性蔑視の文字の多い女偏
無期懲役妻からの判決文

不器用な夫婦で器用に生きてます

ツルマルイングリッシュで観光して帰り
友達に尊敬出来る馬鹿になる

松江市 舟木 与根一

花火みな終り熱帯夜に戻り

減反農政草刈機鳴り響く

八月は地獄絵映す走馬灯

戦争の風化新人類を生む

切り花にされてあやしい美しさ

鳥取県 川崎 秋女

ひまわりの根元に埋めた夏の恋
夾竹桃ヨシヤノブコを憶い出す

しあわせが落ちていそうな萩の道

ヒイフウミイ向う岸までとぼうかな

美しい畏だったガラス玉だった

鳥取県 土橋 螢

天の川悲しいときは美しい
日は流れ時は過ぎゆく靴の音
汗あぶら流した米の値を叩く
日展の壺の特選気に入らぬ

お酒はやめて美しい恋しませんか
職の無い靴もやっぱり減っている
プライドを傷つけられた生返事
雑談になつてから出た雑魚の知恵
芯のないコマ横ゆれに慣れて生き
声の大きい方が必ず正論とは言えず

鳥取県 松下 つつみ

夏休みがとでも嫌いなカブト虫

ひまわりの後ろ姿は隙だらけ
白百合と比較をしたらかわいそう
新聞を毎日くばっている力
旅日記きょうも夕陽が美しい

鳥取県 新家 完司

憎まれた癌ならとうに死んでいる
恥じらいと女を見事に出す水着
地獄極楽女話している涙
恋をする娘に母に鳳仙花
企みのそれから嫌う夏帽子

京都市 山本 規不風

京都市 山本 規不風

京都市 松川 杜的

京都市 松川 杜的

京都市 松川 杜的

京都市 松川 杜的

八月の雲へ友の訃報がまた入る
鬼心仏心ああ鯛の生造り

御親切にピンボケ分も引伸ばし
暇過ぎて新聞を読むひまがない

寝屋川市 江口 度

そよ風をじつと待ってる花の恋

蟬の声夏バテらしいのもまじり

入道雲をじつと見詰めているやる気

ひまわりのうなじも耐えている残暑

じゃんけんのグー多くなる秋の森

寝屋川市 柴田 英壬子

夕食の時間にコーヒ店にいる輩

ボーイ控えさせてメニューを見る余裕

たかぶりへ一日延ばす産毛剃り

ミン汁は男が作る新人類

バイオリンの秋の旋律目を閉じる

寝屋川市 稲葉 冬葉

こざかしい知恵袋なら持っている

ストレスは隣の花が紅く咲く

長男の母子手帳を抱きしめる

ビールを前になに考えることがある

宝石へゆき帰りするゼロの数

寝屋川市 岸野 あやめ

腐っても鯛と時々本気なり

ロケットは誠首になる日を考えぬ

崩壊は母のパートと子のゲーム

建前じゃないよ仕事が好きなんだ
コラ雀などと案山子は考えぬ

寝屋川市 平松 かすみ

新聞へ僕もわたしもサラダ和歌

ちよつとだけ泳いで来ますパスポート

初恋も知らず竹槍かつがされ

道路まではみ出ていますお花好き

目ざわりへ虹をかけましょ半生記

堺市 中川 滋雀

大悲無倦 照し出されて石を積み

かたつむり天を仰いでまた歩く

文鎮の重さに過去が伏せてある

らしくなる夫婦の似たものとはなれり

欲得を離れてみても金が要り

堺市 高橋 千万子

夏の陽に女の隙が二つ三つ

ふんわりと浮きそう風船やの屋台

裕ちゃんの種も仕掛もない魅力

家中の空気が動く探しもの

詳しくは聞くまい友のやつれよう

神戸市 仲 どんたく

甘栗は敬遠しとくマニキュア

笑う過去泣く過去を繰る写真帖

こてんぱんに言われながらも総理の座

人生の暖簾を下ろす喜寿の坂
口下手を逆手にとったプロポーズ

神戸市 山口美穂

盆踊りかなしみは秘め夜が更ける

老母のことお地藏さまへも頼みます

ひまわりの夢は大きく陽に対す

九十度百八十度視点が変り気も変り

遠慮なく餃子を食べる土曜の夜

富田林市 藤田泰子

鯛は鯛鱈は鯛群れ泳ぐ

家庭では良妻賢母という仲間

これからは黒は黒だと言つてやろ

忘れ得ぬ母逝きし日の原爆忌

八月六日母は八十六で逝く

富田林市 田形美緒

マンボウが泳ぐ人生マイペース

花火師の自信黙々闇にあり

燃えきらぬ思いで落ちる手火花よ

剪定のめがね明日の花を愛で

片足を引つ張っているのは仲間

羽曳野市 榎本吐来

脇役に徹する自負をひそと抱く

灯を消してただそれだけの夫婦なり

台所に立って男の籠ゆるむ

蟬しぐれ僕に残った曆繰る

コップ酒自嘲を更に深くする

羽曳野市 中村優

営業用の笑顔で玉の汗を拭く

ささやかな嘘聞き流す金びょうぶ

中流の匂い吐き出す換気扇

年金の暮しにノルマの万歩計

風変わり首の重たい風見鶏

尼崎市 春城 武庫坊

吊り橋が揺れて故郷の風生れ

正直に話して事がもつれ出し

発病の原因年のせいばかり

コスモスが揺れると思案まとまらず

賞罰も無く中流の底に生き

尼崎市 春城 年代

あるだけの情け傾け生きている

頑固さも少しかわいくなつて老い

墓の径竹林の径夏涼し

同居離婚を強いられる弟に

弟を泣かす家族を憎めかし

草いきれ墓には父と母がいる

岸和田市 福浦勝晴

八月の砂から奇蹟生まれそう

秋風へさらつと縁起のよい話

寝たきりの夢に出てきたチンドン屋

手話おかしマンザイのようイキが合い

秋寒しテイシユで不況の洩をかむ

西宮市 西口 いわゑ

夏の空羅漢に似たる雲に逢う

ブランコに揺れていたのは小さな恋

孫台風苦心の植木折つていぬ

野仏も蟬もけだるい昼下り

可笑しくておかしくて仁王の顔になる

町田市 竹内紫 靖

江戸から続く角交換の指

上司のミスを言わず忘れず

一芸に長け運動不足

酌ぐまねさせる健康管理

盃もたせ長い前置き

姫路市 丁坪サワ子

八月の玉音遠い耳の奥

サラリーもポーナスも無い吹き溜り

改造論国富み心貧しなり

良し悪しも親そのままの娘の育ち

夏期講習送り迎えも自家用で

松原市 佐藤藤子

いい音で敵はせんべい食べている

夕刊が届く炎天下の三時

バイブルを売りに来た娘の長い髪

踏切は夕焼け小焼け手をつなぐ

ブロック塀の中で育った麒麟草

竹原市 森居菁居

ステテコになって小さな策を練る

闇夜なら独り芝居をするも良し

ヒロシマ・ナガサキ夾竹桃は忘れない

毎日が大安セールスのカレンダー

二女高三・長男中三

進学をかかえ静かな夏休み

大田市 藤田軒太楼

老人会自慢話もかびが生え

呆けてない証し白石持たされる

話題にも乏しい老いに夜が更ける

味噌汁の匂い我が家に朝が来る

控目に体験語るも年の功

東大阪市 森下愛論

やんわりとキツイ言葉で皮肉られ

長電話終りに無心チョット入れ

退屈な昼寝へアミダくじが来る

美人には頼まれもせぬ世話もやき

コップ酒気短らしい呑みつぶり

玉野市 小谷仙山

一番小さい夢を神様からもらう

今朝の指切忘れて父の胃が疼く

蟬しぐれたまに帰ってうらやまれ

帰りたい帰りたい故郷よ

ふる里は遠くになった曼珠沙華

守口市 羽原静歩

臨教審生涯学習知っただけ

銀行の名刺この頃恐く恐くなり

腰痛が来て腰痛と裏話

運動会(二句)

どの子にも一等賞にしたい顔

かたづけて帰る夕日が美しい

大和高田市 岸本豊平次

八月をタカ派は鎧虫干しか

取り引きのない銀行が腰低く

五百羅漢刻んだ人はどの顔か

水子地藏今日も一日濡れている

善人の嘘を気の毒そうに聞き

浜田市 佐々木裕

待ちわびて独り相撲で終る夜

一線を越えたら女の勝ち相撲

どんくさい男が美人を手に入れる

恋人を連れた故郷が美しい

何も言わぬ嫁は自分で連れて来い

今治市 矢野佳雲

鬼の面いつか絆が深くなる

威張ったら妻の持ち出す過去がある

出鱈目な奴も居ように蟻の列

人相が変わりお遍路から戻り

私もゆったりしよう葱坊主

西条市 片上明水

かたつむり上り下りのない速さ

化ける術覚え化かされやすくなる

猫の脚屋根までくると遅くなり

ボケるから背中の中の荷物降されぬ

合掌の文句が長くなって酔

綾瀬市 大山と金

夾竹桃寛の竹がボンと刎ね

押し鮭の上手な亡母唄ぶかな

岩松も浜も動かず日のさかり

支那服の錦繡に映ゆ夾竹桃

日盛や水ひたひたと乱杭に

大阪市 坂口公子

迷いあぐねて貧乏くじをひいてくる

旅好きの仲間に従ってゆくばかり

結局はみんな乗れない宝舟

ちよつびりの美田がおかしくなってくる

みどりごに遊んでもらう小半日

高槻市 辻白溪子

エレベーター貴方は肥満と言うブザー

負けた方も思い出できた甲子園

勤ちがいで仲人が座をはずし

物頼む時は親しい友にされ

自販機は付添いが買う車椅子

柳井市 弘津柳慶

モデル今日自分の衣装で地味に居る

花時計蝶ヒラヒラと舞い上り

テレビのいい処で御来客

建前で本音隠した御答弁

ヘッドホンつけたまんまの生返事

奈良市 天正千梢

失意を忘れたのか踊り子は

金出せばとづくに役目すんで居り

あと味はどうであろうと勝っておく
風致地区三階建は駄目という
日本のマホロバの地に根をおろし

鳥取市 広本文子

父母の忌もある八月の誕生日
座っても立っても寝ても腰の骨
うれしいこと三回続き身構える
納豆のカラシとネギを見習おう
無重力な世界がつづくサラダ記念日

大阪市 西森花村

貸し借りは人間の事御本尊
ありがとをおまけしておく八百屋さん
御利益も平和もわたし嫌いな
後手後手と鏡のしわを数えてる

大阪市 吐田公一

カナ文字の母の手紙に芯がある
骨壺を抱いて女のひとり旅
滝壺を覗けば哲理解けてくる
同居誘う嫁の言葉に賭けてみる

大阪市 大塚節子

新盆に今年は名代の多いこと
コーヒー古い今日も吉としておこ
年々にえろおまんなど供奉の人
ハンカチを膝に涙を折りたたむ

大阪市 板東倫子

古いこと知っているからうとまれる

坊さんの法話に株の話出る
お互いに先に逝きたい老夫婦
白々と一病息災という見舞

大阪市 渡部さと美

発想を変えたらアハハで済んだこと
澄み切って嘘をまだ見ぬ朝の空
頂上の水筒名水よりうまい
夏おわる戦いすんだ蟬の腹

大阪市 古川美津枝

回転椅子試行錯誤する鼻毛
停電やタルマにされた都市砂漠
名産がとどき達者をわかちあい
濃紫すすめ上手に帯ものせ

島根県 西村早苗

逃げる気の耳は片方だけで聞く
待つ事に馴れてピカソの絵の前で
セールの自信じつくり腰をすえ
愛称で呼ぶホステスが一人居る

島根県 榊原秀子

わがものと思えば小さな庭たのし
口外をせぬ約束できくニュース
縁台へうちわ女が絵ともなり
さやさやと竹の葉すれへ昇る月

島根県 石田清泉

洗心の一ときうめるぼてぼて茶
不昧公の心促えたぼてぼて茶

車座のしびれ切らしたぼてぼて茶
行末はいかにあろうと出た稲穂

島根県 松本 はるみ

折鶴は人の裏側まで覗き

ぶらんこが揺れる地軸に逆ろうて

農薬をこわす薬も作らねば

幼稚園ピカソに勝る絵が並び

島根県 北川 民子

鴛鴦でないがどこかで波長合

名水を一気に飲んで昼寝する

くちなしのただ一輪にくすぐられ

運命とあきらめきれぬ不眠症

米子市 石垣 花子

指紋など残しておゆき花泥棒

たかが恋死ぬの生きるの男言う

北海道の旅

末っ子と会えて弾んだ夫の愁

雲海の切れ目にくいの海が見え

米子市 林 荒介

風車祈りつづけてばかり居る

絵日傘のなかに埋もれる古い疵

旅人の歩幅きづかう峰の月

夕焼けの海に葉書をしたためる

米子市 青戸 田鶴

有名無名仏に变りないけれど

すれ違ふ笑顔が今日を明るくし

もの忘れ帯をといたり結んだり
コンサート虫の乱舞でしめくくる

米子市 田中 亜弥

秋篠寺いい道の中の内にあり

山男山の火種を大事がり

おしゃべりが波紋となつて行く恐さ

夕焼を迎えるたびに母を恋う

米子市 政岡 日枝子

月光や父の記憶は光らない

秋まつり老父を何とか笑わせよう

彼岸会やあなたおほぎを食べますか

コーヒーぐらい貴方と一緒にのみたいな

米子市 光井 玲子

明日の風にまだ甘えてもいいですか

太陽の笑顔を嫌うサングラス

恍惚の風まだよせつけぬ老母の詩

終の日もひとりぼっちの指紋です

出雲市 板垣 夢酔

うどんそば寿司も喰いたい秋の腹

小雀の巢立ち怖さをまだ知らず

父逝つて農の手順が狂い出し

おんなには甘い亭主で苦情来る

出雲市 小白金 房子

六地藏の頬ゆつくりと雨伝う

旅二日なすも胡瓜も太りすぎ

コスモスが揺れてとんぼのひと休み

トンネルを抜けて絵になる夏の海

高知県 赤川菊野

淋しくて悪女ぶってはみたけれど

北風には見せぬ一人旅

気に入った小紋の一枚柩用

梅も漬け味噌も手作り一人の灯

高知県 中内朱坊

定年が又現役となる帰農

真実が届かぬ世代嘆くまい

贅沢な悩み瘦せたい口を捨て

僧兵の一揆か古都税消えてゆく

堺市 藤井一二三

故 藤井輝雄氏一周忌

友の忌のまた巡りきて蟬しぐれ

石にさえ声故里はありがたし

弥勒菩薩の微笑にすぎる寧楽の坂

蟬しぐれ妻の叱言を寄せつけず

堺市 柿花紀美女

サングラス掛けて真夏を変えて見る

同じ種に真直な胡瓜とへゴ胡瓜

風の吹くままに立ってる秋ざくら

胃の検査異常がなくて花を買う

八尾市 宮崎シマ子

遊園地の駅に喪服の人まじる

際立って夫が哭いて葬終る

傘さして上げたし羅漢野に御座す(雨の播州路)

指保そうめんのどかな里と同じ味

八尾市 山下みつる

東芝をだしにアメリカまたゆする

鼻かんでゴミ箱に捨て恋終る

じいちゃんが虫籠さげる夏休み

パパママと呼んで平凡兎小屋

岸和田市 古野ひで

ポランテアの積りで役を引き受ける

ふと我れにかえると私古稀でした

揉み手する男の卑屈買えませぬ

鬼瓦見守る家に寡婦ひとり

岸和田市 原さよ子

広島へ旅して

原爆の悲惨しみじみ資料館

留守番へ虫も優しく鳴いてくれ

寝苦しい暑さえ立秋告げる虫

病室を出るまで堪えていた涙

岸和田市 芳地狸村

政宗の気骨にほれる日曜日

書き残すつらいいくさの体験記

気が付けば妻とくらしした四十年

捨て猫を拾って妻にしかられる

鳥取市 両川洋々

涙乾いて身を引く愛と知りました

相討ちも覚悟だ心売りはせぬ

別れいくたび女強気の眉を引く

涼しい目している無実信じよう

鳥取県

清水一保

世の中に通人というへそ曲り

岡山県

山本玉恵

清貧に甘んじ寝息の安らげく

俺の気性論して筆のままならぬ

毎日が本場所土俵のない土俵

すすくと伸びて雑草除名さる

鳥取県

林露杖

笑うこと焦だつこともテレビジョン

情報も過ぎて疎ましテレビジョン

飢餓の国飽食日本のテレビジョン

裁判の長さ人情風化する

鳥取県

森山盛桜

帽子みな目深都会の失語症

電車で寝てるのはボクの父じゃない

言い訳は夕陽が落ちてからにする

ここからは都会目かくししなれば

岡山県

小林妻子

年金証書揚げ夫婦の苦笑い

豆曰く今年は稲の身がわりだ

田の草も取らずに百姓らしい顔

稲の出来今年も米があまりそう

岡山県

荻野 鮫虎狼

機関士の肩丸うなるJR

タレントの親がきれいなイヤリング

再就職よほど家には居れない身

世の中に通人というへそ曲り

岡山県

山本玉恵

意地捨てた女になって風と住む

句碑になる石の果報をふと思う

憶病で瞳ばかりつむって生きてます

遠ざかる尾灯に燃えて来る余情

寝屋川市

宮尾 あいき

蟬が鳴くせかしてくれるな気が重い

高らかに笑いたいから入歯する

亡夫との逢瀬を想う沙羅の花

肩書一パイ名刺も肩がこり

寝屋川市

堀江光子

エリートが社から姿を消した謎

星月夜ひとりの人を待つ浴衣

日本が好きと青い目の浴衣

人生をまだ投げ出さぬ車椅子

藤井寺市

吉岡美房

外科病棟金魚のような見舞い来る

阪神が勝つまで生きて居れるかな

暑中見舞一杯もろてバテてます

血しぶきの中で人間祈るのみ

藤井寺市

中原 比呂志

車嫌いで地球愛する山男

少々は大目にお願ひお神酒です

日曜日白黒ネクタイ使い分け

人生は三原色で綴る色

羽曳野市 佐野白水

追悼川柳大会にて

雨上りの高野の靈氣肌に滲む

高野山宗派を超えた墓列ぶ

子の結婚老いの慕情が燃え始め

いくら這うてもミミズに暑いアスファルト

羽曳野市 田中隆二

少し先の読める男についていく

火に油そそぐ言葉をおんな持つ

伏字ある本にも父の蔵書印

学割に優先席を乗取られ

和泉市 西岡洛醉

休日の雨結論は明日にする

一病息災還暦迄たどりつき

昼ドラマ叶わぬ青春追う茶の間

五階目の踊り場溜め息待っている

宇部市 平田実男

実益を考え趣味に翳りが出

ワイ談も出来て才女に増す魅力

金とひま出来て休調狂い出し

詐欺まがい商事へ五右衛門腹を立て

岡山市 川端柳子

身長の伸びほど敷居高くない

酒なしでとつてもほんとは言えません

横道にそれてお話面白い

除草剤何の因果か緑の死

宝塚市 丸山よし津

億ションの竣工急ぐ炎天下

ペンションが出来て都会がなだれ込む

言訳はしないで生きる水中花

長袖のレース品良く冷房車

枚方市 宮川珠笑

マル優論議わたしに職がない

おとなりの中元あずかり慣れ届け慣れ

立飲みでおたくも盆休おまへんか

カラオケがわたしの歌にあわさない

倉吉市 渡辺菩句

夕涼みいつもの翁いつもステテコ

雑草が花咲かしてる抜かずおく

蟻一匹謀反の列に入らない

この頃は傘を持ってでもゴルフの稽古

豊中市 田中正坊

年金に合った小さな夢を抱き

喜んでいいのか老人優待券

群遊の魚にもいるへそまがり

十億円集めて光るシャンデリア

富田林市 松本今日子

おなじみの月が出ている盆おどり

寄付をしたお寺の鐘はよい音色

はなやかでないが万年青の実にひかれ
スタミナの塊りホールインワン

七尾市 松 高 秀 峰

農業へ値下げ減反向い風

ライバルの出世の記事へ妻の私語

岩影に愛を育てた夏の海

ふる里の噂を運ぶ風の私語

出雲市 園 山 よし子

聞いて欲し尋ねてほしい思春の娘

苦い水明治の父のほたる籠

えくぼ又人を許して姑の今日

孫に継ぐ八月の話たんとある

西宮市 奥 田 みつ子

煩惱の滝のしぶきに磨崖仏

半跏思惟まねて迷いがとけるなら

鼻の形似ているけれど別の人

熱帯夜亡母の写真も暑そうに

笠岡市 松 本 忠 三

袱紗からほんの挨拶がわりです

抜殻を残した蟬はどれだろう

合格点甘い甘いは何故だろうか

別懇の見て見ぬふりの辛いこと

浜田市 中 川 幸 一

Gパンのヒップおんなを主張する

金借りに来たソファ―は浅く掛け

うかうかと深みに嵌る只の酒
することがないので爪を切っている

松山市 谷 信 夫

声かけてもらいたくない試歩の杖

老人病院ここが極楽かも知れぬ

豹変のわけは他人に言えぬこと

腹立ちをこらえていたが腹が減り

芦屋市 竹 中 綾 珠

修繕がきくと入院させられる

なせもつと早くしなかつたと医師の声

寝た切りになるかならぬか賭のよう(内科医)

リハビリの努力次第を外科医言う

和歌山市 桜 井 千 秀

思い切り笑って体軽くなる

理に適うふくさ捌きがまどろこし

そば殻の枕で素朴な夢を追い

目を伏せて上目使いの下ごころ

静岡市 永 倉 僕 川

仕事着を着ると落ちつく日曜日

すみません旦那多くを語らない

敬老会限りある身を励まされ

悪いこと聞える祖父の耳不思議

箕面市 坪 田 紅 葉

母の手と同じところにあるほくろ

思い出に生きてるゆとり一人住む

梅雨晴間お墓まいりは妻の顔
うちの犬両隣も番しする

榎原市 岩井本蔭棒

親孝行なんときれいな言葉でしよ

五つ玉闇値はじいた日が恋し

世界中斯くはあるべし万国旗

実力を出せるチームでまた来ます

唐津市 浜本義美

いたずらな風に風鈴擲揃われ

真つ黒に灼けて宿題そっちのけ

手枕がしびれ良い夢見損ない

肉体美などと昔は羨まれ

唐津市 浜本ちよ

義理の為不安は不安保証印

イヤリング何時もささやく恋の詩

相槌を上手に打って喋らされ

打ってつけの役で本人気に召さず

岡山県 直原七面山

社長で世話好き

平凡が好きと妻

去る人は追わず生き

岡山県 岩道博友

点滴を比べあつて回復期

旅に出て地方の人へ聞き上手

盆踊り定まれば花火も議論され

岡山県 二宗吟平

にいちやんと言うて一ぱい注ぎに来る
犬連れる名目川原で詩のけいこ
形代を供え一家の無事祈り

岡山県 矢内寿恵子

生かされて生きて仏の顔つくる

夏帽子仏たずねる納め札

移り香を偲べば亡母の博多帯

大阪市 大野武太

愚痴いれる袋に穴をあけておく

受難期か深夜スパー朝の記事

手作りの文化こつこつ子に伝え

大阪市 塩田新一郎

強請^{かた}つてる女爪先動いてる

苦勞しろ苦勞するなど人の親

母故に抱き父故につき離し

大阪市 寺井東雲

愛の手は途中で谷に落すかも

甲子園腕を磨いてプロで出る

警笛も恋する二人聞えない

鳥取県 金川満春

御祈禱を受けて手術の友祈る

逢う逢わぬ女の魔性が目を覚ます

傘借りた事から続くお付き合い

鳥取県 羽津川公乃

風鈴の失語クローはしやぎ過ぎ
地球儀に富める日本が小さく載り
エリートよ腕相撲なら負けないぞ

鳥取県

江原とみお

補聴器をつけて地獄の沙汰をきく
六法を枕にどしゃぶり聞いている
スナックで傘を借りてはいけません

姫路市

大原葉香

不治の病神に届かぬ日の焦り
霸氣失せて時計の針に身を任せ
四捨五入五入にすぎる落ちこぼれ

姫路市

中塚遊峰

齒に衣を着せてまんまとにげられる
此の頃は亡母の仕草を知らずする
女房の機転で上司に認められ

姫路市

釣遊光

使わずに捨てずに母の形見分け
口なしよお前も梅雨に咲く花か
退屈な男でいいの好きやもん

和歌山市

山川克子

どうしようもない男だから母性愛
さのさでも一遍吞んで唄たろか
へいへいと女社長の顎の下

和歌山市

木本文子

木槿忌と名づけ亡父を懐しむ

人工浜浜辺の歌は聞えない
柔らこう毒を効かせる大阪弁

和歌山市

青枝鉄治

優勝の裏に寄付金攻めてくる
秋なすび嫁と一緒に食う美味さ
聴き耳を立てて呼名を待つ職安

和歌山市

山田高夫

炎天下向日葵だけが上を向き
幻聴の耳鳴りやまず蟬時雨
立泳ぎしてる深さに騙される

豊中市

一瀬福一

つながれて宿題になる甲虫
野暮用と言いつつ母の夏羽織
カーテンとスリッパ換えて夏がくる

豊中市

上田登志美

毒舌はまだ惚けていぬ証拠だね
背伸びすることもないねと陰の声
先人も聞くか古墳に蟬しぐれ

富田林市

片岡智恵子

炎天下忘れた言葉出ないまま
夏がゆく体重減らぬ愚痴のこし
張り出したご厚志ここにもボスがいる

富田林市

新開千代女

雨の中何故かピンクがよく似合う
身を削る思いで待った人なのに

鏗節けずって居る間も株を聞き

兵庫県

脇田米朝

唐津市 筒井朴竜

粗大ゴミ気にして青竹踏んでいる

的を射た忠告だから憎らしい

どん臭い初恋もある古日記

兵庫県

中田白李

吹田市 茂見よ志子

子報のとおり所によつて雨が降る

温泉の穴場は時刻表にない

マスクミに見せる握手は止しなはれ

岡山市

井上柳五郎

松原市 小池しげお

大都会人人人に酔うた旅

頼りない夫と責めて頼ってる

祈ること多い八月暑に耐えつ

岡山市

花田たけ志

新築へ妻五ツ六ツ若うなる 西宮市 瀬尾六郎太

幼稚園を泣かして逃げたかぶと虫

孝行はローンでします墓を建て

左きき左手しゃぶる祖父ゆずり

乳呑児をあやす娘に母惚び

なんとなく中曽根統投させたくて

出雲市 石倉美佐子

かたくなに汚れを嫌う冷たい手

満ち足りた飢に手こずる処方箋

改善へ昔の未練がひとくさり

高知県

小澤幸泉

焦点が合わず金魚を見て生きる

木枯しはやがて私に吹き初める

白ばんば咲いて娘も満二十

暴落へ何の手立てもない軍手

マンネリを打破する靴に履きかえる

使い過ぎ右手有給休暇とる

和歌山県 天満三千代

ひまわりの首を回して咲き疲れ

甲子園イヤな故郷つれてくる

夏草を刈らずにおくと虫が鳴き

京扇子クーラー入れて売る老舗

友達に医者と坊主が居てくれる

また一人島から若さ消える朝

箕面市

椎江清芳

静岡市 渥美弧秀

胃カメラへ医者と言葉がテープめく
詩と楽の暮しの中に道開く
団欒の輪の中和む夫婦箸

羽咋市 三宅ろ亭

親馬鹿は子の増長を自慢する

仏具磨き好きでもない嫌いだでもない
車座になって村の幹部会

倉吉市 淡路ゆり子

彼に逢うための口実うまくなり

針持てば亡母の笑顔がよみがえり

雑草というにはおいしい花咲かす

弘前市 斉藤 荔

裏庭に一本ゆとりの樹を植える

指切りの指が疲れる夏休み

均等法女に無駄な花がない

五所川原市 加藤 彩人

帰省子の化粧が村を派手にする

若駒の脚はまきばの風となる

初恋を砂丘に埋めて女発ち

岸和田市 清野 こう

もの言えはすぐ泣虫になる夫

責任を一つもたされ夏休み

蜘蛛嫌い嫌いな蜘蛛によく出合い

貝塚市 行天 千代

有名人や若い命を襲う癌

夏休みかかる電話は孫ばかり
お向いのひまわり朝はこちら向き

竹原市 古田 太虚

炎天の行進核の恐怖がまだ続く

鶏小屋へ仲良くしようとする雀の子

朝顔が段だん小さくなる残暑

藤井寺市 福元 みのる

サングラスとってごらんよ澄んだ空

同窓会次第に老病死の話題

スポーツ欄逆さに読んでいるトラファン

茨木市 堀 良江

金魚すくい眉のきれいなひとが居る

長男の嫁はおっとり輪の中に

わが家に男の子ありおしめ干す

枚方市 二宮 山久

我人生脇役でよしおごらない

夜の蝶母と女を演じきる

どたんばの妻のパワーを信じきる

高槻市 川島 諷云児

聞かぬふり見ぬふりをする六十路坂

いくばくの命わがまま許し合う

裏腹なことがこの世に多過ぎる

島根県 藤原 鈴江

好きですと言えない花のまま萎み

一度でもいいから甘えてみたい胸

朝顔のすだれの内の暮らしむき

大阪市

町田 達子

米子市 茂理 高代

感心の振りもして見る年の功

淀下る舟のリズムにあるくらし

大阪市

北山 悟郎

訳あつて行かねばならずこの暑さ
貧しいが水たつぷりとある暮し

東大阪市

崎山 美子

今日を無事終えて安らぐ車椅子
寶石の光に自分見失う

大阪市

松尾 柳右子

交野市

山本 テルミ

思う様にいかぬを生涯追いつけ
がむしゃらに走って一息つけば古稀

大阪市

宮下 とし

唐津市

山口 高明

マンシヨンの連立猫も住みづらく
帯だけをバラリと切っている見せ場

大阪市

井上 白峰

高槻市

竹内 花代子

二階借り浮世離れをした心地
耳のそば蚊のささやきが眠らせぬ

大阪市

横山 為子

出雲市

小玉 満江

わかれ道手の鳴る方に落し穴
古傷を思い出させる遠花火

大阪市

奥田 満女

高知市

北川 竹萌

落ちそうなスリルが見せ場皿廻し
逆夢を信じて今朝の顔洗う

豊中市

辻川 慶子

海南市

三宅 保

台風の外れますように仏さま
ねむられぬ夜はお化けがそこにいる

豊中市

愛想良い中に隠した針がある
七人の敵に気の合う奴が居る

豊中市

友が来て西瓜も丁度冷えた頃
いやな事みんな忘れる大ジョッキ

豊中市

白選集

藤井明朗

はまゆうのゆれに前髪合うている

高橋操子

川柳の秋へ意欲だけは持ち
稲実る値下げ対策なきままに
政界の秋一波乱貯めている
核廃絶語り尽きない原爆忌
審議拒否では野党内閣よう取れず

水粉千翁

アトリエのみかんころんだものでない
ウニも刺身もまだ生きている北の味
あゆの香をたべる七輪出してくる
若人の祭典平和な日本です
ぜいたくな涙世間を知らず生き

八木千代

独酌の味に身の置き所あり
お見それをした盃を高う受け
清流の無心に悟り沈められ
夏草の背伸び八月十五日
海鳴りの心許して千鳥啼く

米澤暁明

約束をつなぎ合わせて帯に巻く
逃げたがる螢を帯に棲まわせる
帯芯のあたりに川の音を秘す
祭り帯十日吊してたたまれる
まっしろな帯に椿の絵を画こう

小出智子

蟬の声一期一会と悟ってか
盆帰省迎える港浜言葉

夜店から買って来たかとひやかされ
いい策が欲しい林の中を行く

手術を終えて

この世とは牛乳の味みそ汁の味
病むにしても中途半端な年のころ

しばらくは病人らしく目を瞑る
秋が来て夫婦は夫婦らしくなる
退院の出来ない人もいるこの世

月原宵明

火のようなウインク カンナから貰う
絵のような島で男に職が無い
かつら橋渡った女帰らない
扶養家族避けて釣竿垂れている
身の上がよく似た人と飲む屋台

金井文秋

亡妻が居たなら金婚のはずだった
亡妻のこと思い仏花の水を替え
宿命は独りにされて生きている
たかが人生されど人生八十年
銀行振込みで触れ合いをまた減らし

藤村 女

故郷のお城に寝かす子守唄
軽い罪美人を待たす花時計
絵に画いた美人で炎が消えている
人の非を口にした夜の寒い雨
曼陀羅の向うに眠い顔を見る

正本水客

明日あるを信じてゴミを焼いている

痛々しいほどに原色のいろが冴え
酔眼で手抜かりのない口を出す
大事の前の小事と禅問答に徹しきる

隠岐

島の月 帝をうつし奉る

黒川紫香

抜歯した顔でも遅刻せずに来る
店開き女ばかりで姦しい
でかんしよの踊りを抜けて逢う女
おしゃべりな風だよ露天風呂ひとり
まだ若い遍路と出会う奥秩父

市川鈴魚

一切空無欲の父に敵がない
福祉増額建て増す母の南窓
遍路飄々谷汲山に子をせかせす
愛に溺れて首まで水が来て困る
ふる里の此処らは山のない話

児島与呂志

おばはんの病気に馴れてくる恐さ
問診で愚痴も聞いている診療所
もう少し素直になりたいなと思っ
とに角も日々がほんまに幸せで
仲の良い夫婦が知ってる廻り道

工藤 甲吉

旅立ちのお茶を一気に喉仏

長野 文庫

国会も歌を忘れりや捨てましょか
債鬼さま冥土へお出で願います
私は元氣病んでるのは財布
仏さんと水を一緒に二日酔
蟹の泡うふうふうと笑つてる

本田 恵二郎

ためになる言葉と知らず腹を立て
塩加減凡そのようでそうでなし
稼がずに儲けた金を甲斐性とも
金儲けすれば諸悪も帳消しか
農は国の本と言つたは過去のこと

山内 静水

責任感を笑顔で包む頼もしさ
男はまたぎ女はくぐる鉄の柵
毒舌家ほんとは腹の白い奴
目言葉へ応える妻の指言葉
交友録わが人生の宝物

大矢 十郎

路郎師のみもとに続いている自選欄
鉛筆は握ったものの句にならぬ
生きている証し自選欄よこす
少しずつ私は疲れを見せぬ妻

橘 高薫風

不足して育てた順に親思い
たかが検札に起され寝つかれず
集金へ書く小切手は犬を抱き
ふる里をゴミ箱にしてUターン
拗ねる児へ屋台の怖い顔が笑み

野村 太茂津

秋田・青森の旅
北限の鈴虫を聞くひとり旅
寒風山男鹿の芒は背が低し
四十二年太平山は若返り
太宰真似て頼杖をつく斜陽館
昼の月十三の砂山海晦し

熱い番茶ですこし風向き変えてみる
打ち明ける憐れな旅の茶が渋い
襟足がとても気になる茶を点てる
うまい茶だもう一泊を決めている

一人吟

秀句鑑賞

前月号から

辻 白溪子

止り木で日雇い族の政治論

原 独仙

労働者が立ち寄る止り木の酒、そこは男の忌憚のない意見が聞かれる。手きびしい政策批判も止り木の悲しき、国会には届かない。遊んどらねば失業保険に叱られる

遠山 可住

働いたら貰えない失業保険、チエックも厳しく収入があれば即支給停止である。失業保険に叱られる。面白い表現です。

クーラーの外で風鈴サボってる

都倉 求芽

すだれ越しの風鈴は、涼しいものであるが昨今の暑さはとてもクーラーでなければ凌げない。風鈴が外でサボっているとは素晴らしい着想です。

カレンダーが一人の朝を指図する

林 はつ絵

一人暮しても結構忙しいのか、カレンダー

にきつちり予定が入っている。単身赴任か職業婦人か、朝の風景がよく出ている。

盛り籠の梨もりんごも化粧好き

片岡 智恵子

お見舞いとお供え用か、艶々した光沢はなかなか豪華である。外出前の女性にたとえて化粧好きと表現したところが素晴らしい。

普茶料理庵主の話も味のうち

松川 杜的

塔の会では、吟行でよく普茶料理を食べさせてもらうが、庵主さんの一言の挨拶に心が和むものである。そして味にも満足する。

目も口も耳も達者で嫌われる

川島 颯云児

三猿の戒めに対し、その反対でどれが達者でも嫌われそうだが、寝たきりになられて世話をさせられることを思えば我慢が必要。

散歩時間を犬が守っている憎さ

稲葉 冬葉

私も犬を飼っているが、朝は早くから散歩の催促をされる。この句は憎いと表現しているが大剛から見れば、当然の権利である。

軍用金あるので味方がたんといる

岩本 雀踊子

とかく金が支配する世の中、金の力で築いてる権力はくずれ易い。落目になると寝返られる。軍用金が物言う味方には用心が大切。

雑魚だから何も言うなと言いつ聞かし

嘉数 兆代賀

諦めさせる言葉はいろいろあるが、どうしても敵わぬ相手には、はっきり言っておけた

方がよい。上五雑魚だからの軽味が良い。熟慮断行わずかな知恵でたちむかう

西山 幸

考え抜いたすえの結論、たとえそれが僅かな知恵でも、自信をもって立ち向う。その意気は感動を呼ぶ。心強い句です。

親の名も出さずに借れるようになり

堀端 三男

親の威光が無くては、金策がむつかしい世の中で、手腕と実力を買われた羨ましい存在である。ますます社の業績が伸びるだろう。入院のおかげでメロンの味を知り

普通なら高くて中々口に入りにくいメロン見舞にはよく使われるが、病人の状態によっては味が変わる。この句は退院近い人と思う。

癌検で白といわれた拍子抜け

玉置 重人

人知れず悩みがあった検査結果が異常無しと解った嬉しき、拍子が抜けたとは人間勝手なものである。

他人だから言える励ましようもある

越村 枯梢

身内には言えない言葉でも、他人だから忌憚ない気持ちで伝えられる。そんな言葉は案外効果があるようだ。友情が溢れている。

胎内で元気に遊泳しています

中川 滋雀

若い夫婦の嬉しい茶の間の会話が聞えて来そうな句です。遊泳とは面白い字句を選んだものです。楽しい句として成功。

柳 楽 鶴丸

柳 楽 鶴丸

川柳太平記 (113)

川柳の群像

R・H・ブライス

東野 大八

―戦争に負けて外国の兵隊が進駐してきたが、われわれ日本人にとっては、まだ何となくす気味悪く感じられた頃のある日、私は突然一人の外国人の訪問を受けた。

私には碧い眼のお方には近づきがないし、訪ねられる心当りもない。多少不安に思いながら玄関に出たら流暢な日本語で、突然訪ねた失礼をわびて、実は川柳について御高見を承りたく参上したという御挨拶。近所の子供たちは物珍しそうにのぞき込んでゐる。

座敷に相對して坐つたら「貴方は川柳は欧米人に判らないと思いませんか」との質問。

「私はそう思つとります」と答へたら「ちがう、それは全然ちがいます。そういう考え方は間違ひです」その外人は、グツと私をにら

むと大きな声でこうきめつけた。

「なぜ、日本の方は先祖や、自分たちの持つてゐるものの良さを、自分自身で認めることができないのでしょうか。日本人が、俳句や川柳に見られる理想主義、つまり建設的な面や、破壊的な面を本当に価値あるものと見なさなかつたら、どうして他の国の人々がそれらを尊敬することを期待できましよう。川柳は日本独自の人生詩で、日本民族が生んだ世界に大いに誇ることの出来る傑れた諷刺詩です。そして詩の精神というものは、すべての人間に共通なもので、詩の心には国境がありません。だから、川柳は、ヨーロッパ人にもアメリカの人々にもよくわかるのですし、また、つとめてわからせるようにしなければな

らないのです」

そしてこの外国人は、古川柳を一々あげて西欧文芸の名作と比較して、川柳の文芸論をのべるのであるが、その研究の深さと熱心さには驚嘆せざるを得なかつた。

この外国人は、禪の研究に來朝、次いで俳句に転じ、戦争中の四年間の神戸抑留生活から川柳の研究に身を投じている在日二十六年沢庵や味噌汁を食べ、浅草海苔が好物というイギリス人、R・H・ブライス教授であつた。(以上は「世界の諷刺詩川柳・R・H・ブライス、吉田機司著・昭和25年日本出版局における序文吉田機司の要約である)ブライスはレジナルド・ホールズ。一八九八年(明治31年)12月3日ロンドン生れ、ロンドン大学に学びバチエラー・オブ・アーツの学位を得、大正三年日本に招へいされ学習院大、日大、東大、実践女子大、早大に講義、昭和24年英文の「SENRYU」(北星堂刊)出版。同29年東大にて文博を得。「世界の諷刺詩川柳」(共著昭25)「日本のユーモア」(昭32)

「オリエンタル・ヒューマール」(昭34)「川柳雑俳に現れたる日本人の生活と性格」(昭36)「江戸川柳」(昭36)の著書のほか、禪・俳句の著書もある。学習院時代は週一回皇太子の家庭

教師を二十年間勤め、昭和35年、勲四等瑞宝章を贈与されている。

「川柳と翻訳」の著者阿部佐保蘭は、「川柳塔」(昭41刊)に「ブライス先生の憶い出」

―富子未亡人と語る―で次の様に記している。

「一九六六年一月七日大磯の今は亡きブライス先生のお宅を始めて訪問する。先生のお好みそっくりの十畳の御部屋に可愛い仏壇が東向に安置してある。初対面の挨拶後、御線香をあげさせて頂く。御遺影と並んで御位牌に「不來子古道照心居士―昭34・10・28没」とある。(註―墓は鎌倉市松ヶ丘の「駆込み寺」東慶寺に在る)

奥様のお話によると不來子というのは、先生の師であられた禪の鈴木大拙先生がつけたもので、遊びに來い來いと云うのに來ない子という意味の由。これをきかれた円覚寺の朝比奈宗源師が、何々院というより不來子の方が先生らしいというので、それに俳句、川柳、禪のような古い道に専念されたというので右の戒名が生れたという。

奥様とは京城帝大で英文学を講じた頃の一、九二四年に京城で同僚の藤井教授の仲人で結婚、名は富子。春海、なな子の二女がある。

ブライスの最初の著書「川柳」は、北星堂

社主と談合して、谷脇素文の漫画川柳に関心をもち、これを英訳したことにはじまった。

先生は学習院時代毎週木曜日に、美智子妃殿下とともに皇太子殿下に、和歌、俳句よりも川柳の英訳の進講に熱心であった。

これは次の世代を背負って立たれる皇太子殿下に、仁徳天皇の民のかまどの貧しき煙によって知られし如く、所謂庶民の詩―川柳を英訳することに依り、昭和の風俗習慣を知ってもらい、人情の機微に通じた立派な天皇になられることを祈念しての事と察せられた。

ブライス先生の御作は生涯二句しかない。木の裏に青き夢見る蝸牛　ブライス

そして晩年の句のもう一句は

山茶花に心残して旅路かな　不來子

これはどうやら辞世の句に通じている。

佐保蘭の富子夫人訪問記の要約は前記の通りだが、彼はその文中で、雀郎先生の自選三十五句を気持よく引き受けられた川柳雑誌四百号の名英訳にふれ、この掲載の陰の協力者として、英文に明るい麻生霞乃女史に対し、ここから謝意を表すと記している。

最後にブライスの「世界の諷刺詩川柳」におけるその著書の抄録を掲げておこう。

「川柳は多くの点において詩であるという

事ができる。第一にそれは逆に詩的でないものをはっきりと示す事に於いて詩である。すっぱりと癒りましたと鼻が落ち　古句

第二に取材が粗野で、異つてはいるが、俳句と同じ意味で詩である。それは我々に事物や、人間性の本質、特色、象徴的な要点、及び「生命」を見せてくれる。

盗人猫　穴のあく程見て逃げる　悔心寺
川柳には季語こそないが、俳句と同じ味のものである。それを区別するものは、言葉遣いと世俗的な親しみ易さのみである。

実るものみんな実つて高い空　雨之介
空の高さは結実の姿とみられている。自然は限りなく物惜みしない。他の例に
散る物の一つ一つに風　山門

この句は稍々散文的であるが、思想即ち体験は純粹詩であり、人間の俗っぽさとか、矛盾性を含んでいない。しばしばなんでもなような天然現象が人間にとっては滑稽に感じられることがある。そこでこんな詩を見よ。
考えたように雨垂れ一つ落ち　古句

★次回は「大井正夫」

誹風柳多留廿六篇研究 (三十二丁〜三十三丁)

大屋六郎・八木敬一・鈴木 黄
 石田晋一・南 得二・小野真孝
 本多正範・石田成佳・多田 光

故岡田 甫

552 居統の髪べつ甲で撫て付ける

大屋 〓 「居統」は「流連」ともかく。昨夜も
 てればつい「流連」もしたくなる。雨や雪で
 帰れない場合もあるが、それを口実に「ぶん
 流す」こともある。本句は、居統をきめこん
 だ朝、女郎が挿しているべつ甲の櫛を借りて
 髪をなでつけている図

雪なればよしとずつふり引かぶり 二一四
 南 〓 贊。(1)遊女自身が撫でつけてくれる。(2)
 或いは遊女のを借りる。

私は、(1)の方で居統の朝の、絵にあるよう
 な光景を想像していましたが、どちらでもよ

いと思います。

小野 〓 南氏説(1)は、語法上無理ではないでし
 ようか。「撫でつけられる」を「撫で付ける」
 とは言えないように思います。

多田 〓 礎贊。岡田 〓 同。

553 燈籠を売て息子ハ損をする

大屋 〓 「燈籠」は、吉原の玉菊燈籠。「売て」
 は、「かこつけにして悪用する」の意。

息子が「水無月晦日の夜から仲の町の茶屋
 ごとに作り燈籠を出し、美麗を尽して星の如
 く輝き白昼を犯すに似た」(『柳花通誌』)玉
 菊燈籠を見物にゆく事を口実にして、登楼に

及ぶ。ところでその夜遊女にうまいとこ口説
 かれて、

燈籠の施主に息子ハ三分付 六二三三

のきのとうろう二度の月に金がいり

一八二五

燈籠を見に行き風をしよってくる

四六一八

で、大散財ばかりか、八朔の約束までさせら
 れてしまふ。

石田晋 〓 贊。「売るのに損」というおかしみ。

多田 〓 石田晋説贊。岡田 〓 同。

554 大男二人土俵で貰ハれる

大屋 相撲の勝負がなかなか決まらず、結局引き分け、勝負預りとなったことを言っている。勝負預りを「もらう」という。「大男が二人もらわれた」といういい方がおもしろく、川柳独特の表現である。

上下ではだかの中へかけていり 二〇二四
上下ではだかへ今の木村入り 三三二一

多田 贊。

ぐんばいでいやくをしてもめるなり

安七智一

岡田 同。

555 桜田のやしきから出るつくし売

大屋 本句の状況はよくわからないが、句面どおり、つくし売りの少年が桜田の屋敷からひよつくり出て来た。場所が場所だけにオヤツと思わせる状況を詠んだものであろう。

立派なお邸から、みすばらしい少年がケロツとした顔で出てきたところに、不均りあいな滑稽と可愛らしさをみた句だと思ふ。

石田成 礎賛。土筆売りと場所柄との不調和な状況をよんだものでしょうか。

桜田の窓から苗の直をつける 明七桜一

多田 石田成さんの引用句のように、お屋敷の道路に面した長屋などの窓から、外の物売

りと呼ぶことがあるが、このつくし売りもそのように窓からよばれていったん屋敷内に入ったのか。

岡田 贊右。

三十三丁

556 雛の乗物跡棒ハ乳母がかき

八木 よくわからないが、主題句は、雛や雛の道具を駕籠のようなものに乗せた「雛の使い」、その後の方の棒は乳母がかつぐ、というものか。

南 〓ここは「雛の使」でなく、本句の「雛の乗物」は「雛の駕籠」で、先棒は雛の主人公の娘で跡棒は乳母という畳の上、或いは廊下等に演ぜられる、白酒機嫌での光景ではなからうか。

多田 〓私としては南さんのように思っていたが、鈴木倉之助氏の略解には礎稿と同説が述べられている。

557 借金ハぬけて外聞わるひ春

八木 例の「暮の持参嫁」の句である。
年立掃りうつとしい娘を見る 二五七

暮の嫁かけ取り斗ほめて行き 二七二五

石田晋 〓此冬来たあそこの娘は一体このものだ、箱根から向うさ、十一丹波の国だとよなど評判とりどり。

大屋 贊。

嫁の来た年が手ぎわな大三十日 七三六

多田 贊。

558 朝帰り妹か物をいふ斗り

八木 〓句意はそのまま、吉原からの朝帰り。息子であろう。ヤバイふんい気。

鈴木 〓親父は苦虫を噛みつぶしたような顔でだまっているが、内心は怒髪天をついているのか？お袋はただオロオロ。

小野 〓妹は丸きり世間知らずで平気で物を言うのか、せめてもの事に兄をとりなそうとして、口をきくのか、前者だと思ふが、家内に波風を立たせまいと精一杯思案している妹を想像をするのも悪くない。

石田成 贊。

昼掃り親にあきれてものいわず 八七六

家内だんまり親玉の朝帰り 八七九

多田 贊。



この夫に ひと

草書のかすれがちと欲しい

松川杜的 柳歴

昭和16年国鉄部内の川柳会に入会。
水客先生に師事、川柳塔社同人と
なる。

昭和47年京都塔の会を設立現在に
至る。

京都市 松川杜的

路郎賞準優秀作第一席

混浴の吃水線を心得る

岡山県 土居 耕花

路郎賞候補作品

正本 水客

ありがたいことに毎日用がある 玉置 重人
阿呆にはなれず口出ししたくなり

母出好きあの世に行つて帰らない 柿花紀美女

叱られてみたくて軽い嘘をつく

伊丹市 榎 谷 寿 馬

大西日 鑑は正座して並ぶ 北山 悟郎
満腹感まるで知らない百合の花 春城武庫坊
来年も生きるつもり電話番号 柴田英王子
貧乏神がペンペン草を蒔いて行く 高杉 鬼遊

土居 耕花

〈準推薦句〉

桃熟れて慎み深くなつてゆく 西山 幸
メス 缺 おでんのように煮えている 石川侃流洞

この夫に草書のかすれがちと欲しい
〈推薦句〉 松川 杜的

黒川 紫 香

もしもしと私を疑う目に出合い 高橋千万子
村祭りこんな居った若い衆 坂口 公子
ホクシングジムに通っている出前 松川 杜的
とっさの時も折目正しい人である 谷垣 史好

奥山美智子

先輩とおなじ帽子が似合わない 寺沢みどり
人ひとり信じ切れず春が近く 奥田みつ子
片使りリンゴの花はまだ咲かぬ 吉岡きみえ

〈準推薦句〉

朝顔も私も朝のうち元氣 宮崎シマ子
靴下を脱いで話せる友の部屋 林 荒介

〈推薦句〉

数の子のわずかばかりと春の酒 高杉 鬼遊

橘 高 薫 風

誓詞読む終身刑と書いてある 小島 蘭幸
ブルトレを殺人劇でなつかしみ 竹内 紫籍
遠会釈もみじ一枚舞い落ちる 林 はつ絵
盲人の下着きちんと替えさされ 堀江 正朗
逃げ込める部屋が温いので困る 神夏磯道子
あまだれを庇の手紙だと思つ 八木 千代
思い出を結びなおして女かな 松原 寿子
じいちゃんが好きとは可成り出来た奴 矢野 佳雲

〈推薦句〉

嫌い抜くためにも女化粧する 久保 正敏
混合の吃水線を心得る 土居 耕花

◇推薦のことば

作者は、このたび句集「やっこ風」を出されて、ユーモア作家としての声価を確実にされ、老米ユーモアの切れ味が、ますます冴えて来たことは、この推薦句以外の句にも言え

ることで、路郎賞に最もふさわしい作者と思える。久保正敏氏の作品は、内容の点では遜色はないが、私の初心時代に接した句と類似しているので、賞からは外した。

野 村 太 茂 津

低い腰一本背負いでくる気かも 有働 芳仙
芋虫に毛虫がとでも偉く見え 谷垣 史好
この夫に草書のかすがちと欲しい 松川 杜的
縫れたとこ切ったら敵が折れてくる 柴田英壬子

年金生活行書あたりで暮さんか 遠山 可住
鍍金かもうも輝きすぎている 若宮 武雄
逢うてきた鼓動のままに惹きさむ 奥田みつ子

楽屋裏さつと誰かが見ているぞ 西山 幸
香奠は親父がすぐに取りかえず 土居 耕花

〈推薦句〉

生きてゆく痛み針の針は受け入れる 牛尾 緑良

西 田 柳 宏 子

けちくさい亀にかまわず兎寝る 安藤寿美子
古傷に触れぬ友情温める 森田 熊生
いくたびか修羅場くぐつてきた無口 田中 正坊

落ちこぼれどんぐりそのまま根をおろし 小砂 白汀

この夫に草書のかすがちと欲しい 松川 杜的

明日を見るメガネを丸くまるく拭く 赤川 菊野

塗り剥けて隠しことない夫婦箸 玉置 重人

〈準推薦句〉

待つことに馴れて上手に豆を煮る 西出 楓楽

万灯をつけても闇がまだ消せぬ 林 荒介

〈推薦句〉

叱られてみたくて軽い嘘をつく 櫻谷 寿馬

この感激を忘れずに

松 川 杜 的

川柳をはじめて四十余年はからずも路郎賞をいただき唯唯感激いたしております。これもひとえに栗、水客、紫香の諸先生はじめ柳友の温かい御指導の賜と思っております。ありがとうございます。残された余生、この感激を忘れず一層精進いたしたく思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。



裁かれているのだらうか

寒すぎる

河瀬芳子 柳歴

昭和五十七年より朝日なわ柳壇

投句

同年五十九年五月高槻川柳サーク

ル卯の花へ入会

同年十月川柳塔誌友

高槻市 河瀬 芳子

川柳塔賞準優秀作第一席

昔むかしの話が好きな菓の屋根

広島市 流 奈美子

川柳塔賞候補作品

小出 智子

お祭りが済んで他人に戻る街 山田 宝保
欲一つ足すとはじける紙袋 宇野 昭代
みの虫も事情があつてぶらさがる

森安夢之助
何事もなかったように猫が居る 堀 いくの
おとつとわたしが掘った落し穴

赤木 和子
片方の靴に噛まれる癖がある 土橋はるお
逆立ちをする約束をしましょう 大西 文次
五十歳くるつと向きを変えてみる

森 茜

〈準推薦句〉

足組んでみても無力に違いなし 小林 一夫

〈推薦句〉

人の世の長し短かしどっこいしょ

藤井 高子

高杉 鬼遊

こわいのは他人頼れるのも他人 田辺 灸六
義理チョコとことわらなくてもわかつてる

井上 照子
割り切れぬ世を割り切った顔でいる

黒田 緑
何事もなかったように猫が居る 堀 いくの
饅頭屋の主人のことを憶う秋 堀口 欣一
花らつきようおんなは世話をやきたがる

笠嶋恵美子

川柳塔賞準優秀作第二席

人の世の長し短かしどっこいしょ

名古屋市 藤井 高子

ほんやりとしてたら銃を持たされる

鈴木 良征

逆立ちをする約束をしてしまふ

大西 文次

〔準推薦句〕

裁かれているのだからか寒すぎる

河瀬 芳子

〔推薦句〕

人恋えば陽の大きさと赤さかな 信本 博子

谷垣史好

ブーメランエデンの園へ行つたまま

寺中三枝子

お茶漬けは向いどうしで食べるもの

栗谷 春子

逆立ちをする約束をしてしまふ

大西 文次

二賞雑感

西尾 栗

今年の二賞は、準優秀作を含め路郎賞は男性軍、川柳塔賞は女性軍と対照的な結果となった。

路郎賞の松川杜的さんは「塔の会」を主宰され、柳歴四十年のベテラン。受賞はむしろ遅きに失したといえよう。川柳塔賞の河瀬芳子さんは「水煙抄」の上位常連組であり、感性豊かな作風は前途大いに期待される。ベテラン、新進それぞれ個性を生かした佳句を得たことを喜び心からおめでとつと申し上げる。

デジタルに過去も未来もない数字

黒田 緑

鉛筆をまとめて削る花あかり

高杉 千歩

ぼんやりとしてたら銃を持たされる

鈴木 良征

雨を降らしたテルテル坊主首を吊る

土橋はるお

人の世の長し短かしどっこいしょ

藤井 高子

〔準推薦句〕

人恋えば陽の大きさと赤さかな 信本 博子

〔推薦句〕

青天白日 猫には猫の影法師 小林 一夫

板尾 岳人

指切りの指から抜けて来た噂 河瀬 芳子

ただひとりふるさととはよしただひとり 堀口 欣一

南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏に吸いこまれ 小田川智重子

逆立ちをする約束をしてしまふ 大西 文次

鉛筆をまとめて削る花あかり 高杉 千歩

喪の家を包むは霧の思いやり 笠嶋恵美子

いたずらが過ぎはしないか赤い靴 清水 康恵

月の暈かわりやすきは女の譜 吉川 寿美

恋知つて少女に海は昏れやすし 野村 京子

〔推薦句〕

昔むかしの話が好きな薬の屋根 流 奈美子

河瀬 芳子

昨年主人をガンで亡くしました。然し神様は公平で、今日こんな途方もないブレセントを下さいました。哀しみの時、川柳をやめよう、と思つた日もありました。然し親身に力付けて下さいました諸先生がた、卯の花の先輩、同輩、きつと共に喜んで下さる事と致します。それから正念場です。焦らず、ゆつくりとそして真剣に、この道と係わり続けたいと存じます。有難うございました。

河内 天笑

歯が抜けて明るい顔になりました

土橋はるお

警察の前はよそ見をせず歩く

松川 芳子

どう見ても命が余る預金帳

大川 幸子

月の暈かわりやすきは女の譜

吉川 寿美

長生きを疎まれている秋の蠅

信本 博子

省略化かかしは目玉だけにされ

宮本かりん

おとつとわたしが掘つた落し穴

赤木 和子

実年となつて尻尾を意識する

藤井 高子

〔準推薦句〕

許すことはかりになれた座りだこ

吉川 寿美

〔推薦句〕

裁かれているのだからか寒すぎる

河瀬 芳子

水煙抄

黒川紫香選

吹田市 井上照子

高槻市 笠嶋恵美子

鉢巻が欲しかる重荷をひいた蟻
お手玉の鈴の追憶老母の唄
約束があつてうれしい茜雲
甘なつをむいて先祖の墓におく
逆境に試されている愛ひとつ

富山市 舟渡杏花

ああ平和猫またたびへ目を逸らす
言訳のおわりへ父の五寸釘
たたみ替え妻の無口の目と出合う
野ざらしが怖くて鎖切れません
楯山の途中で聞いた深い詠

熊本市 永田俊子

以下省略の中にいつもいる下積み
磨かれた石床の間で退屈し
屈託のない笑顔でそろばん手放さず
そつちがそうならと他のポケットを探す
預金と支払い窓口微妙な風が吹く

今治市 野村京子

風鈴の軒を替えても熱帯夜
月見草あなたの愛に揺れている
故郷は安全地帯羽を干す
きつとこの娘も強いおんなになるだろう
青柿の派手に落ちたりトタン屋根
亡母のいる星の行方が摺まらぬ
目玉焼きくずれた朝のある不安
無神経な電話でんぷら揚げてます
覗きたい扉があつてまだ死ぬぬ
最終便へ追つてはならぬひとを追ひ
一と彩を足せば個性が強くなり
円周の位置の他人で手は貸さぬ
くちなしの白が許さぬ罪がある
熟女の恋背なのチャックが布をかむ
花言葉憶えて少女病んでいる

富田林市 池 森 子

食卓で梅干不動の位置に居る
平凡な女でサスペンスにのめり込む
手紙を出しやっぱり電話もしてる母
炎を少し雨期にさらしているわたし
とびつきり素敵な傘に会った雨期

高槻市 河 瀬 芳 子

桑の実が熟れると亡姉の音がする
どうとでもとれる便りの和封筒
荒城の月しか吹けぬハーモニカ
本当を言うのに足が震えてる
屑籠に入りたくない自己主張

竹原市 信 本 博 子

方舟の中で野望をまだ捨てず
隙のある場所は逃がさぬ草の意地
こわいので犬に挨拶して通る
燃える日もあつた静かなデスマスク
お好み焼きジュウジュウ噂焼いている

八尾市 高 杉 千 歩

白昼夢きれいな嘘を描きました
雨冷えに絵筆滲ます女郎花
片便り小指がしかと覚えてる
足並みはちぐはぐながら共白髪
風はこぶ嘘にも馴れてこぼれ萩

長岡京市 木 本 如 洲

近道をゆくとまじめな鬼に逢う

コップ酒働いた日は酔うている
計略の一つは喜劇にしてしまふ
座布団の順位で笑顔変えて酌ぐ
働いた街夕焼が美しい

大阪市 上 田 柳 影

そのうちに分ると父は氣にしてず
パチンコで負けて帰省を止めにする
父の日を忘れた父の太い指
高い山すこし大人にして呉れる
上高地にて
梓川冷たさ妻の手が覚え

熊本県 大 川 幸 子

産み分け法方程式のよに解けず
いつ妥協しようか背中合わせの夜
火の恋を伏せてる白い日記帳
むずかしい本を隣の人が読む
威張るのが一匹はいる金魚鉢

高槻市 津 田 スミ子

夏休みお隣さんが静かすぎ
妻だけが鰻たべてる土用の日
豆腐一丁買うと半丁まけてくれ
親しげにしゃべりまちがい電話です
かげろうの中から線路のびて来た

滋賀県 久 保 和 友

この道はふるさと少女に栗のイガ
わからぬ絵が好きとロシヤ生れの女

異国の丘唄った異国へパスポート
尖塔が好きで建築屋になった
ビール色したモーリシヤス島の没日

名古屋市 藤井高子

ふり出しへ戻れと踵主張する
ジャンケンが上手で坂に陽が当る
良かれとの嘘へあや取りもつれ出し
陽を吸った蒲団に夢がよく育つ
さりながら明治大正遊び下手

熊本市 宇野昭代

釘づけになってテレビの甲子園
百円のレシートレジは律儀者
菜園の食べごろ虫に先越され
正直な鏡が或る日憎くなる
影法師までが私の前を行く

広島市 流奈美子

福の神つれてるようなよい笑顔
笑い袋をどっさり携けて孫が来る
回り道ばかり黙々土踏まず
沈黙考蚊が耳もとで嗤ってる
坂道で切株に情かけられる

久留米市 鶴久 百万両

認めめぐって妻の主張に逆らえぬ
進軍ラッパきくと自分史を書こう
花相撲に負けた河童が義理をたて
愛ひとつ秋の砂丘へ埋めにゆく

親戚にきみがいるとは奇縁なり

鳥取県 土橋はるお

駅の傘が隣の庭に干してある
突きつけられたナイフ真っ赤に錆びている
父さんの靴に手紙が入れてある
川柳を書いた宿屋の傘がゆく
剣ヶ峰で男が辞表書いている

福岡市 吉川一郎

輪の中に淋しがり屋の位置が空き
風鈴が淋しい声で風と会う
会者定離痛み知ってる風の橋
頼りない顔にうっかり騙される
豊か過ぎつとに真水が欲しくなる

熊本市 高野宵草

ひめゆりの塔目玉に汗が出て困り
看護婦となじみになって治りかけ
蚊蚊まで浮かれて廻る夏まつり
だらしな性格好なのがニールック
詫び状を書いてぐっすり眠れそう

岐阜市 渡辺杏村

ウロウロと涼を求めて猫昼寝
絵日記の材料となる里帰り
クーラーをかけてハワイのテレビ見る
猫の昼寝地熱を避ける新聞紙

岐阜市 金子匠果

終章の夢は大きい方がよい

つゝ走る若さで家紋さえ知らぬ
役職が解けて気軽な肩になる
カラフルな日傘が浜を彩にする

京都市 木村 たけし

北へ行く道から旗が冷えている
夏風邪にすこしは瘦せる顔である
大声の孫と木馬に乗ってやる
野仏の耳に浮世の風が吹く

東予市 小山 悠 泉

背かれた女の貌が胸に棲む
まとまらぬ思案を易の灯にすがる
産院で男おろおろ落ちつかず
アンコールすれば音痴が又唄い

京都市 松川 芳子

満月へ拜むでもない手を合せ
約束を男の顔でして帰り
借りて来た傘に火種がついて来る
持ち変えたグラスに噂ついて来る

守口市 森川 まさお

ラケットを持って身軽にバスに乗り
神域を離れて大きな石がある
炎天の蟻は日向も陰もない
五分五分の分れ満足して帰る

大阪市 吐田 純子

孫去んで手持無沙汰の長い夜
七夕に会おうと約束ロスの娘と

バスデー子はそれぞれのカード来る
口実をさがす妻の座ゆれている

羽曳野市 吉川 寿美

古い掟に背きはしない千羽鶴

追憶の処々にある伏せ字

中ジョッキ少し余して夏が逝く

裕ちゃん逝く

死に急ぐ風よ足跡消さないで

唐津市 相葉 あき

臆病な蟹で両手をすぐ上げる

マジシャンの壺には苦勞と夢がある

蓋取れば何か言いそな壺であり

掘っても掘っても愛の深さは分らない

熊本市 北川 一進

単身赴任生水だけはと里の母

子の寢息覗き茶の間の灯が消える

花嫁を軽々抱いたお関取

大胆に女は夏を闊歩する

藤井寺市 高田 美代子

好き好きと鸚鵡が寝言いうている

少く狂った磁石を持って迷つてる

つけの効く財布を持っている強み

方円の器の中の水の鬱

吹田市 栗谷 春子

親猫の目がらんと犬を射る
いつ見ても工事している家があり

大声で業者が朝の打合せ
握りつづけた手の骨拾いおり(兄逝く)

旭川市 朝倉大柏

雑兵の背中石がよく当り
以下同文そんな感謝で社は送り
足癖のついてる靴を捨て惜しみ
受話器の向うに謀反の気配する

米子市 大田みさと

しゃぼん玉拗ねて遠くへ逃げて消え
指紋だけ頼りにしてていいですか
終章は笑い袋が破れる日
ひとつだけ消えない泥が気にかかる

熊本市 黒田緑

差しのべた手が先生に届かない
口づくむ時ほのぼのとかくし味
雑踏の流れに吞まれまいとする
俯瞰図のあそこはいつも通る道

滋賀県 安田志津

青葉時雨ただひっそりと賢治の碑(根本中堂にて)
蟬時雨やや淋しげに秋が立つ
スピッツがじやれてる様な雲がゆく
きりつめた暮し潤す夏小菊

西宮市 松本一郎

夜店には故郷があり幼き日
雑踏に存在感を確める
口調からわが職業を当てられる

適量でとまらないから禁酒する

ロスアンゼルス市 加藤明美

禁煙も灰皿見ればつい一本

孫抱いた顔は部下には見せられぬ

惜別のロビーに無情のアナウンス(伊丹国際空港にて)

サヨウナラ恋しい故郷は雲の下

広島県 田村新造

注意報出て海峡は波高し

民宿の軒に吊るした烏賊すだれ

減量を女医に指切りさせられる

桃娘ホームに立って梅雨明ける

佐賀県 江口万亀子

七夕を飾る親子に通うもの

不精髭剃って出掛ける顔作る

筍を又煮てもどすおつきあい

七夕の笹をかついで長話し

和歌山市 丸岩晏

とまり木にママをねらった鳥ばかり

要するに別れましょうという手紙

そろそろ本心を打ち明けようか夏

添加物なしです大きなこの胸は

大阪市 島路太郎

子供達寝たか花火があがってる

爪と髪切って八月十五日

ふる里はあるが帰らずうろこ雲

かすがいの子を中にして歩道橋

西宮市 秋元 てる

値切る癖仏の花に出てしまふ
踊りの輪気取るエリート放っておく
私は天才悲しみの忘れ方
パンザイをさせて次つぎシャツ脱がす

静岡市 安本 孝平

底辺で倅せ色の絵の具溶く
小半日医者で過ごして老い達者
愚痴一つこぼし男の錆を研ぐ
忍従のボタンを嫌う妻の服

尼崎市 山田 保蔵

バス旅行下りるたんびに荷物増え
植木鉢この土だけがボクの土
好きだけ飲めと女房荒れ模様
暑さにはウチワに限るとヘソ曲り

倉敷市 田辺 灸六

人情の温みを見舞客がくれ
裏打ちの出来ぬ自分をもてあまし
落書のメツカとなつて古い堀
性格が見える団扇の使いよう

大阪市 榎本 落児

蟻と蟻内証話をしてわかれ
潮騒に目覚め散歩にまだ早い
豆腐さえ半丁ですむ老い二人
夏だなどと思う夜店の玉蜀黍

川西市 野村 静雄

五年目の工事が出来る十年目

まあ聞いて欲しいと喧嘩上がり込む
外国で見る海の青空の青
常識の基準が違う非常識

佐賀市 古川 一徳

八月の記憶武装解除の汗
あり余る愛に歪んだ非行の子
蜘蛛の糸いくさ始まる罟が揺れ
ヤジロペー真ん中に居る孤独感

尼崎市 森安 夢之助

客が来た瓶に半分酒がある
底抜けに気のいい嫁の高軒
西瓜売りポンと叩いて音を売る
朝の膳やっぱり美味い田舎味噌

呉市 蔵重 成人

歩が進むところ戦さが待っている
廃線を知って夏草よく育ち
母の読む童話で澄んだ児にさせる
昼ひとり失業保険切れかかる

大阪市 川原 章久

姑から嫁の仮免下りました
爺ちゃんの膝で覚えたうにと酒
祭壇の仏が見抜く空涙
世話好きで気楽な身分で祭り好き

貝塚市 池田 寿美子

核ボタン押しではならぬ蟬しぐれ

おつきあい控え目にして盆を過ぎ
朝顔の蔓の行方に裏切られ
ふるさとの翳りがいつもなつかしい

熊本県 岩 切 康 子

雲煙が山と湯の街分離する

自信過剰ミスは他人の故にして

一方的電話だけでも胸痛む

鳥取県 西 川 和 子

夕立に濡れて屋根葺きして

帰省の子揃い夕餉の老母の顔

くねくねと峰まで道が付きました

峰々に抱かれ平和な町に住む

守口市 結 城 君 子

兄憶い登る坂みち蟬しぐれ(長兄ゆうゆうの里にて逝く)

縁あって鴨越に骨と化す

信心を断り人として悩み

蚊一匹講演会をざわつかせ

奈良県 和 田 萬 里

バーゲンで財布は軽く荷は重し

墓参りこちらの都合ではよすませ

ふるさとは線香花火と蟬しぐれ

何もかもグツタリしてる午後三時

尼崎市 中 澤 向 西

美辞麗句並べてみたが田舎弁

団長の下駄の鼻緒は太くして

おしゃべりはポケットベルが邪魔になり
むし暑い夜は寝返りだけで明け

尼崎市 鈴 木 良 征

口下手は生れつきです無口です

撒餌ばかりしている吝嗇な太公望

路地裏の銀木犀が秋を呼ぶ

坊さんも般若湯なら許される

尼崎市 吉 永 伊 三 郎

庭付きの家は諦めました老い二人

角隠しにあの台詞があるうとは

ポケットの隅で輪ゴムが拗ねている

子備の鍵使わずにまだ生きている

鳥取県 乾 隆 風

坊さんと医者には深いおじぎする

ぬれぎぬを着ても所詮は孫の屁よ

父の背にごついお灸の痕がある

ウインドから女のモード秋にする

静岡県 蘭 田 模 杏

適当に散らかって行って行き易い

寄付金を釈迦像の前で又取られ

嫁さんよおもちゃを産んでくれ有難う

出雲市 金 村 青 湖

流れ星あれは亡父星か亡母の星か

誰からも愛され過ぎて先に逝く

風鈴へ切ないほどの孤独感

鳥取市 小 谷 美 っ 千

私のピアノ打てば必ず響きます
あときの駅を探しに旅に出る
海鳴りが入ってくるから窓開ける

久留米市 中垣米之

人生の脇役として孤に耐える

スーパースター太陽に明けそして逝く

仲人も口説いてみたい見合いの娘

尾宮弘治

義姉さんを真似て化粧のコツを知り

下駄履いた小さな母が追い越せず

同窓会少ない髪を染めてみる

尾崎市 的場十四郎

味噌汁の匂いで醒める朝の床

髭剃った顔にさわやか朝の風

スナックで演歌上手な無精髭

尾崎市 木下義嗣

邪魔になる女俺から離れない

結納をすませて帰る終電車

味自慢看板だけが太く見え

河内長野市 植村喜代

PLの花火二階へ娘が走り

夏だけの朝日にバラがよく咲いて

かき餅のように座蒲団裏を干し

堺市 桜沢あかり

バカチョンに此の目でしかと見た景色

リクエスト曲に生きてる裕次郎

又しても用のないもの掴まされ

鳥取県 津村八重子

雑魚は雑魚なりに楽しく生きている

冷房に甘え真夏の汗が出ぬ

刺のある言葉売られた日の孤独

寝屋川市 宮崎菜月

裕ちゃんが逝ったねと友から見舞状

考える振りして足先遊ばせる

長男にばかり固まる母の血よ

寝屋川市 太田藍子

あだ名しか出てこなかったクラス会

当事者は心の整理まだ出来ず

にぎやかな法事になった七回忌

鳥取県 太田幸枝

暑い夜だから亡夫と夕涼みに

峰へ降る雨よ童話を消さないで

素裸になると電話が鳴ってくる

伊丹市 小熊江美

電柱に愛犬さがしてと張ってある

お喋りのママゴミ捨てに行つたまま

鰻屋へ彼と入った寄席帰り

愛媛県 八塚三五島

単身の男を唾う針の先

玄関に定位置のある亡父の下駄

ヘッドフォン ラッシュアワーに独りいる

静岡市 柳沢たま

夏休み子を叱る声多くなり
カタカナで書いた看板孫得意
恥かしい誤字が生きてる古日記

十和田市 阿部 進

義理がたい父が煽てに乗せられる
ぬかりない嫁にすっかり疲れ果て
気晴らしに釣り糸海に垂れている

鳥取市 山之内 洋

簾さげそれから意味のない座敷
あそび飽きたから渋いお茶を出す
ドアに手を掛けて佇む秋ちかい

米子市 小村 てい子

ほんとうの力があつて道化役
腰掛けた石に知性を疑われ
灯笼流し憎まれ口が好きだった

鳥取県 黒田 くに子

炎天へけだるく刻む花時計
囲みから抜けて出たがる青リソゴ
フルムーン想い出ひらく旅の宿

和歌山市 田中 輝子

公園のハトへ餌やり失語症
セールの粘りに負けた日のリズム
外科医ですとても優しい顔をした

出雲市 久谷 まこと

請け合つて肩凝らしてゐるお人よし
爽やかに樟脳匂う衣替え

秋という淋しさを乗せ風の音

出雲市 金森 知恵子

モーニングサロンは近所の若社長
自己弁解するから汗がよけい出る
農政はどうあれ老農畦を刈る

岡山市 千原 理恵

やり切れぬ心ハエ一匹叩きのめす
金属バットカンと鳴る夏の甲子園
女ひとりビール飲んで充電す

静岡市 沢田 きん

気心の良さへ相談持ちかける
言葉程悪びれぬ子の反抗期
うら盆へお寺の義理も一つ済み

富田林市 大澤 三四子

泳ごうと水着を買つて肌をやき
済まないと言いつつ寄付は取っている
娘嫁くむなしさ残る花火かな

青森県 福士 トキ

手を上げて渡る親子のワンピース
孫の顔重なつて見え盆近し
ボランティアの心で飯場の飯を炊く

静岡市 久保 きぬ

ライバルの筈が不思議と馬が合い
待ちぼうけ独り夕餉の影法師
ネクタイの締めぬ時計が狂いだす

米子市 新正 子

義理の分ちよつと笑つてみたりして
猫と妻少したれ目のところが好き
母さんが悪者話まるくつく

高槻市 芦田静江

陽の目みる生地に自信のハイセンス
美女平青春揃うセピア色
コスモスが揺れて見ていた億の金

鳥取市 山田草人

決断は有料トイレでつけて来る
口下手で禁句はぼんぼん出してます
知恵の輪が抜けた死角の現金車

島根県 小田川智重子

往来をよちよち雀の午前五時
張りつめた糸は少うし緩めましょう
ビールでもむぎ茶でもよし流しこむ

大阪府 山田妙子

トンネルを抜けて長男家を継ぐ
ギリシャの田舎で人情生きている(ヨーロッパの旅)
かざり窓ここまで日本語かかけられ()

(前月分) 愛媛県 石手武

一服のうまさ仕事のめどがつく
あれこれと煩いわりに洗る寄付
甘い汁少し残して恩を売る

愛媛県 石手武

ぶら下がる紐もて遊ぶ猫の暇
条件の一つを呑んでする妥協

名門にひと泡ふかすバント攻め

(前月分) 広島県 森川抜智

種あかしすると何んやとあつけなし

飛火野で鹿にせんべい取られかけ(奈良)

フラワーセンターで買った球根花咲かず(伊良湖岬)

広島県 森川抜智

キャッシュカード只でもらえるように買い
釣つて来たさかなにビール添えてある

(釣り人の遭難を救助)

釣り人を釣りあげているヘリコプター

新発田市 上鈴木春枝

病状が話題待合室の声

悲しみへ少し民法強くなり

赴任地の祭りに酔っている平和

静岡市 杉山やす

新婚さんネクタイまでも結ぶ仲

古寺の時計三時で止つてる

気は若い通つております目と歯医者

竹原市 石原淑子

兄弟 スイカの種の飛ばしっこ

カタツムリマイホーム主義の元祖かも

お若いわ慰め合うてるクラス会

唐津市 浜本治幸

ばらの花散ればあとには刺ばかり

妻留守の料理は本とにらめっこ

言いにくい事をずばりと孫が言い

岡山県 福原悦子

道づれの欠伸をもらう夏の旅

女を捨てた母に私は育てられ
火の元を告げず消防車は行った

苔むした墓石に歴史聞く温み

竹原市 岩本笑子

子の未来信じ積木を高く積み

そうきつとあの日も鳴いていたセミよ
ゆっくり歩くと墓碑それぞれに語りかけ

うけ口の女が洩らす艶話

和歌山県 森三枝子

口説かれてその気になった身の破滅

転出が譲る机を拭いておく
同じ汗流しているのに負けている

夏季大の講演睡魔に泳がされ

大阪府 稲本凡子

まま母はお握りみたい子を愛し

軒かく父が一ばん早く寝る
新人類から来た丸い字が読めぬ

子が肥る分だけ親が痩せてくる

会いにゆく墓へたわしを忘れずに

サンングラス外して教師の顔になる

ひと言が女の肩にずっしりと
三人旅女の見栄をあおりたて

島根県 菅田かつ子

まっすぐに歩きたいよと蟹の泡

こんな時大声あげたら楽だろう

張る乳を流す職場の化粧室
通院に靴光らせて行く真面目

あれも癌これも癌かと不安がり

さるすべり夏の炎の如く咲く

妬心いま風化したのか気にならぬ

美食とは縁を絶たれた食養生
ドア開けて何だセールスカとは言えず

静岡市 中川みつ

迷走台風を追う予報は無駄骨か

挨拶も笑いも世辞もない自販

熊本市 鶴田謹爾

補聴器を外し雑音切り抜ける

苦労したようにも見える顔の皺

鳥取県 田村きみ子

山男空の青さに油断する

梨娘顔もまあるくなつて見え

一畳の枯野に鎌があいてある

鳥取県 乾喜与志

静岡市 青柳金吾

写経する墨の香りに心なく
何時からか妻に素直に御されてる
一週間待てばよかった五割引き

尼崎市 佐藤美代子

白を白くする子息がつまりそつ
がらになくロマンチックな雨便り

京都市 小林英子

けい古場へ急ぐ舞妓の藍ゆかた
中元を買い取るお店多忙です
風止むと瞑想に入る吊り金魚

岡山県 後安ふさえ

裏方に徹した母のよい笑顔
争いを丸く治めてうまい酒
休日も回りつづける嫁の独楽

岡山県 後安江山

今ならば屹度やさしく出来たのに
夏休み孫の喧嘩と蟬時雨
朝顔が二輪咲いてて同じ彩

兵庫県 奥野テル

地に還る日の安らぎにする写経
亡母の声しので今朝の茄子の彩
一線を越せない距離にある慕情

大阪市 富岡温子

先生の眉の動きで杞憂する

ワープロに冷たさがあり見舞文
記念日とこじつけて飲む酒の量

豊中市 三宅つえ子

みだれ咲く萩の花見て失語症
掃除する元気まだある車椅子
倅せを身近に思う趣味の会

河内長野市 大西文治

般若経上手になつて妻は老い
絵日記に内緒のことが筒抜ける
リポビタンDも勿論飲んでます

京都市 山脇正之

コマージュル時だけはすすイヤモン
下駄履きで町をうろつく湯治客
ご無沙汰の詫び本文より長くなり

大阪府 堀口欣一

ヒロシマの日は防空壕に立っていた
終戦の勅語をきいた天満駅
夏の夜にいと豊かな夢をみる

八尾市 鷺見章

中古機などと言わせぬ稼働率
女店員殊に一人がよう焼けて
ツアーバスタ焼け小焼けの町は雨(竜野)

和歌山県 田中隆積

阪神を唱う
武庫之荘リッチな家が立ち並ぶ
工場の煙の上る尼ヶ崎

元町でほろ酔いのムード満喫し

岡山県 富坂志重

畦道でボスの顔する鬼あざみ

ツケのきく店で崩れる三次会

掛け声で元氣出してゐる八十路

和歌山市 森 茜

蟬しぐれ服の中までついて来る

もめごとが好きな女のマスカラー

沈黙を救ってくれた虹が冴え

青森県 波 ただお

岩木山威容は何時も元氣づけ

今日もまた海が呼んでる晴れた朝

ヒゲだけがやたら伸びてる余生の貌

八戸市 島 田 昭 治

ステテコで気楽にビールの我が家好き

種無しのブドウなんとなくもの足りず

強い嫁弱い姑は僕の母

豊中市 小 林 一 夫

お面屋にまだオバQの面がある

蔵書印捺された古書を買ってくる

風鈴に朝昼夜の音があり

唐津市 福 島 紀 一

蔓ひけば藪から南瓜顔を出し

カルチャーセンター頭かたくても通い

どんづまり縋りつくのは神ばかり

豊中市 玉 井 房 子

六十路越え友情だろか恋だろか

村芝居ことしもお岩大明神

化粧品並べて親の真似をする

泉佐野市 真 崎 浪 速 子

巨星墜つ樞に涙するも居間

立ち喰いのうどんを急かす発車ベル

丑の日にジャンボに乗って来たうなぎ

京都市 森 川 春 子

電話かけて孫のピアノを聞いている

日本語になった英語の字引ひく

堺市 宮 本 かりん

露地植えの野菜素直な味となり

新人類の会話に謎がつきまとう

高松市 竹 川 憲 一

朝顔へお隣さんも来てしゃがみ

ふと降りる気になる古城のたたずまい

島根県 今 川 三 津 江

耳寄りの話をもって茶に招ばれ

帰省する子もなく盆の噂する

鳥取県 鈴 木 ふ み 子

厄介な話は妻にまかしとこ

病院もホテルみたいと見舞客

寝屋川市 井 上 す み れ

旅立ちの息子を包んだ川の霧

インタビュー嫌がることを聞きたがり

泉南市 坂根流水

亡き妻の十三回忌そり座す

暑き夏機銃掃射の夢を見る

富田林市 楠美子

泳いでる生簀の鯉に明日はない

電動で削ったエンピツ同じ顔

藤井寺市 楠昭子

ここほれと今日も泣かない犬散歩

ただいまと留守番猫へ住む一人

兵庫県 円増貞子

昼寝する父へ枕をさし入れる

鯖寿しの押す手かげんに母が生き

藤井寺市 菊地繁夫

肩で風ギャング映画を見た帰り

下駄履きへ手を振るビルの清掃夫

静岡市 三浦つね

シャボン玉何所まで命あるかしら

敬老会赤いネクタイ良く似合う

静岡市 片平静代

塩加減丁度よかった芋が煮え

朝顔とお早よう交す窓を明け

岸和田市 三輪通彦

首ひねる医師に動悸が高くなる

持てぬ程貰った薬効くのかな

青森県 永沢哲人

ねぶた終え津軽に秋が忍びよる

里帰り無事に戻してホッとする

岡山県 土居ひでの

大安の鯛がにらみを効かす膳

素朴さの明治の母にも芯があり

静岡市 丹羽定次

雛よりも飾っておきたい孫娘

ネクタイを外してからのうまい酒

田辺市 染道佳明

戸を開ける音にもなれて鈴虫の

子の反旗にやさしい秋の雨

島根県 児玉幸子

遠花火見ながら客と酒を汲む

山肌へいつしか秋の気配する

八尾市 椎尾公子

長すぎる挨拶妻につつかれる

墓参り隣の碑にもお線香

新潟県 高野不二

試食して土産は買わぬ女連れ

保険断る口実保険の本を読む

岡山県 杉本伊久栄

草笛の音色に幼き日を偲び

持て余すコップへビールまたつがれ

弘前市 真喜内實

蠶の疵えくぼりんごで売れつづく
分に合う仕事忙しく老いられぬ

弘前市 小寺 ギホウ

結婚記念いまだにダイヤは買えない
落ちりんごでない顔して店頭

川西市 田中 喜俊

盆休み息子のすきななすび漬け
孫の友新人類とすかぬ服

大阪市 今西 静子

ひとさまの不幸へマイク非情なり

ご無沙汰のひとから電話選挙前

唐津市 入江 喜久夫

遠くへ嫁った娘が一番の親思い

線香の煙に揺れる亡妻の顔

今治市 渡邊 伊津志

渾名だけ覚えています久しぶり

ボケ防止になるらし父のぼやき癖

岡山市 伏見 すみれ

この道を歩けば聞こえる子守唄

無表情な男ひよいひよい笑わせる

岡山市 松本 元江

かぶと虫孫のお守を頼みます

蠅叩く蠅の生命をふと思う

岡山市 池田 半仙

自転車を押ピン拾い歩かされ

鬼ヤンマ通り抜けする無人駅

出雲市 高橋 きよし

水準にもう一息だ俺の犬
残されてあるから騒ぐ遺産分け

岡山市 牧野 秀香

色あせた紫陽花見返る人もなく
納涼の花火に帰りは汗だくで

島根県 岩田 三和

石ひとつこが先祖の墓らしい
また切ったけんかしながら芋を掘る

羽曳野市 麻野 幽玄

いざという時妻居てくれるものと決め
さりげなく聞き耳をたて孤の茶房

島根県 喜島 ノブ

みんな寝て病舎の外は遠火花
シャンペンの音ほど知恵は飛んで出す

静岡県 浅子 まつゑ

夏盛り畑ますますバラエティ
教えてるつもりが孫に笑われる

広島県 藤解 静風

どんじりでいつも他人の影を追い
入れ知恵の妻のサインを読み違え

和泉市 中川 楓

名犬は自由な恋を禁じられ
スタミナを教育ママが子につける

愛媛県 西山 えつ美
町営のバスで確保の廃止線
雷に変な時間に起きされる

鳥根県 松本 聖子
貯金箱入れる端から引き出され
知らぬうち上司の癖に染められる

徳島市 宮武 まつ女
中年の過去が錆びつく花名刺
捨てるには惜しいいびつな欠け茶碗

唐津市 野田 旭恒
肩のこりほぐして呉れる嫁のいて
相傘に一人はみ出るニューリーター

静岡市 大石 たき
世の中は不思議な事が流行り出し
太陽を拜んで心晴れた朝

鳥取県 山根 八重
耳もとへ小さな息が背伸びする
ご近所で腕白ざかりうわさです

吹田市 西岡 豊
古里の屋敷を貸せと老人会
あの人もこの人も好き空の青

鳥取県 西浦 小鹿
頂で峰を流れる雲一つ
向こう岸愛した女が住んでいた

岡山県 平田 たけよ

笹船にこぼれるばかりの童歌
元気だよ声はりあげて電話口

泉佐野市 大工 静子
風車の刺繍しありし旅唄ぶ
真先に秋の気配にのる楓

静岡市 西村 千代
紫陽花も雨を待ち待ち色を変え
父頑固母は優しく子は無口

益田市 里本 たかし
働きの妻が居て車庫が出来
CMの水着を孫と正視する

岡山県 江口 有一朗
一言の朝のお世辞を言うゆとり
赤面のできる若さがまだ少し

静岡市 滝花 喜平
下手将棋外野の雀寄って来る
ペラントを布団が占める梅雨晴れ間

大阪市 平井 露芳
鉾船を写すに目立つラブホテル
追い抜いた記録も欲しい万歩計

岡山県 清水 悠貴女
我が世とや静かにありぬ夏水仙
華やける花火のあとの深い闇

鳥取県 木下 芙葉
子の愚痴を話せば妻も敵となり

牽牛も織女も踊る幼稚園

榎原市 西本保夫

深入りせぬ友情ここで線を引く

カルガモのまねして移る猫の親子
とんで出た受話器元気な息子の声

呉市 岡田寿美礼

買う買わぬ妻に決断せまられる

島根県 坂本雪路

席を立ち残る吸殻山程に
灰皿に旅の想い出大理石

奈良県 渡部トキワ

実年を意識かけ声派手になる

祝福を受けて出発点に立つ

静岡市 谷紀代志

家計簿に嘘は書けない苦なの
に 発会の喉はずませて競う吟

和歌山県 北山凡太

得手に帆と富士の砂走り足が舞い

風鈴に下駄の足音聞かせてる

東大阪府 大平太郎

篝火が川面に映えて鶴は哀し
モナリザの微笑は永遠に謎を秘め

奈良市 米田恭昌

どちらへにハワイとニコリ新婚さん

住む人の個性も滲むニュータウン

奈良市 井上大

奥嵯峨は螢が迎えの鮎の宿
風鈴に涼をゆだねる午さがり

大阪府 朝田晃世

カラ梅雨で船の着けない山の湖

長寿国女スリすら七十五

唐津市 原野常善

年齢は問わずとあるパート欄
アルプス銀座は尾根づたい数珠つなぎ

豊中市 額田明吉

船虫の足の速さは親ゆずり

滅多には見せぬ裸の弾の痕

大阪府 喜多佐津乃

卓の花患者と堪える熱帯夜
爺さまの付添婆さま咳こみて

新宮市 船越正

城と漂う流れを知らぬ堀の水

こりていて尚も世話やく足運ぶ

鳥取県 久野野草

宿題がドッサリたまって山になる
たん生日やっぱりケーキを食べるだろう

◆ジュニアの部

枚方市 二宮正彦

おどりの輪旅の浴衣を弾ませる
ウインドの季節先行く服のぞく

川柳点の先蹤となつた上方句

阿 達 義 雄

川柳点の範となつた上方句

柄井川柳立機の宝暦七年よりも約十年前の延享・寛延期は、泉州堺の会所本の全盛期であつた。会所本とは、上方の万句合の勝句集のことである。

延享・寛延・宝暦初年の堺・大阪圏の上方句が、当時の江戸万句合に先んじて川柳的な句を多く出現させ、それ等の中の秀逸句を江戸万句合の点者が勝句として採り、これを範句として江戸万句合の沈滞を打開し、刷新を図つていたのであつた。

先ず、私が江戸の収月評万句合の延享四年四月二十三日開の句の

聳えらむ間に雑兵の手に掛り

右の句を見て、川柳点以前の句でありながら川柳的な句だと感心していたら、実は、この句はそれより早い寛保三年、滝又岬点の『泉州岸和田岬地藏尊奉納句集』に既に見えているものであつた。また、

我尻を言はず盥たぶひを小さがり

右の句は川柳評万句合(宝暦一〇年)や『柳多留拾遺』九篇にあつて、有名な「川柳」ということになつてゐるが、これも既に寛保三年の堺の李坡点『天満宮一万五千句集』の中にあ

元禄・享保の上方の前句附

元禄期は前句附の発生の時であり、享保期がその最盛期と考えられるが、これは上方においてのことであり、この時代の前句附が後の川柳点に直接影響を与えたとは考えられないことである。

しかし、元禄十四年刊の『替独楽』(大阪刊)、『俳諧寄太鼓』(京都刊)に見られる――

団扇では思ふやうにはたたかかれず

(前句)「ぬらりくらりと」

右の句が、川柳評万句合や『柳多留』に其の俛、又は多少形を変えて屢々採られているのを見ると、この様な句が川柳点の好見本として考えられていたことが知られる。

また、次の宝永二年『俳諧万人講』(大阪刊)の句は、後の京の点者よつて秀逸とされて享保十九年刊の『へらず口』(京都刊)に収め

られていたものが、更に宝暦年間に至り、少し手を加えて川柳評万句合へ投じられ、勝句として採られたものに考えられる。その推移は次の(1)(2)(3)の順である。

(1)ぬれ畳家主の門へほしておく
(宝永二年、俳諧万人講)

(前句)「出来たりく〜これは出来たり」
(享保十九年、へらず口)

(2)濡畳家主の前に干て置く

(前句)「あたり眼まなこに〜」
(宝暦十年・宮二、川柳点)

(3)濡れ畳大屋の前へ出して置

(前句)「きのどくな事〜」
(宝暦十年・宮二、川柳点)

川柳点の中には、上方句から発し、幾度か佳句として採られ、彫琢された結果、今も「川柳」として評価されている句が、なお外に多いと思うが、永い間に再三改作されたりして原形の面影が不明になつてしまつたものもある。

つたものである。

又、次の句なども川柳評万句合又は『柳多留』や『柳多留拾遺』などに見られるので、川柳点だとばかり信じられていた句であるが、

- (1) 客のあるたびく叱る九人前拾遺(二〇・26)
(2) 吉日がここにもいるとこそぐられ

(柳多留一・20)

- (3) よい小紋着て紺屋迄引づられ

(柳多留一・17)

- (4) 又折もあらうと腹を立残し

(拾遺九・18)

右の(1)の原句は延享元年、李坡点、奉納家原文殊堂五千句集に、(2)(3)(4)は、延享四年、李坡点『明石人丸大明神三万句集』に纏って存在していたものであって、決して偶然の符合などではない。

川柳点において俳諧的な名句として知られている「長ばなし蜻蛉のとまる檜の先(川柳評・宝十一・仁五)なども、延享元年、旅硯の中の泉流点では、「鳥のとまる」とあったものが、「蜻蛉のとまる」に改められたものである。

また、江戸の湖月点の、

心中と身請けの座敷二間明き

右の句は、宝暦初年、兵庫の泉流点『有馬薬師奉納一万句集』の中に原句が発見される。

宝暦初年の上方句は川柳評万句合の時代に接近してくるので、その粉本とされる句が多

くなってくる。即ち、

身の伊達に下女が髪迄結つてやり

手紙には狸台には鯉をのせ

名物を食うが無筆の道中記

なども、その俣、又は少し語を変えて、『柳多留』又は『柳多留拾遺』に採られているが、これ

等の句も、みな、宝暦初年、大阪の一草舎晚

鈴点の『柿本大明神五千句集』の中に、その原

句が存在していたものである。

大阪刊『折句式大成』の潜勢力

特に面白いのは、宝暦三年に至席の序を附して出された大阪刊の折句集たる『俳諧折句式大成』であって、これは折句集とは銘打つてはいるが、実は当時の前句附から前句を取り去って、附句を一句立として、当時の前句附のハメ句や焼直し句の参考書として用いられたらしいことである。

この『折句式大成』は、江戸の『柳多留』初篇に先立って、五七五の独立体の句集として、上方に出現していたという点に、川柳史上に於て重大な意味があり、句風としても『柳多留』初篇を凌ぐものであった。

それで、『折句式大成』の中から上方句又は江戸万句合と関係ある句を示してみると次のようである。

- (1) 敷入が親の異見を小さがり (折句式・24)

右は初代収月評の句その俣であり、この原句は「口よせ草」(元文元年刊)の41丁(枚目)にある。

- (2) 又折も有らうと腹を立て残し

(折句式・25)

この句は、延享三年、堺の李坡点『明石人丸大明神三万句集』の中にある。

- (3) 我伊達に下女の髪迄結てやり (折句式・11)

右の句は『柿本人丸大明神五千句集』に「下女が髪」とあったのを「子女の髪」と改めて採っており、後に『柳多留』(初・3)に「我伊達」を「身の伊達」と改めた。

- (4) 足音に二つに成りし影法師 (折句式・31)

右の句は川柳評の(宝七・十一・五)に、「足音で二ツに割れるかげぼうし」と改められている。

- (5) 掛乞がくれば和讃を長う引き (折句式・12)

右の句は宝暦十三年の露丸評に「和讃を長く引き」と改めて採っている。

- (6) 石塔の赤い信女がまた孕み (折句式・40)

右の句は文化四年刊『柳多留』(四〇・26)にこの俣取られている。即ち、「折句式」の方が原句である。

- (7) 近付きにばかり子供は膳すへる

(折句式・7)

この句は『柳多留』(五・42)に「知る人に斗り子供がすへるせん」と改められている。

(8)落城の堀に張形浮いて有 (折句式・19)
右の句は「落城の濠に浮いてる吾妻形」として江戸に伝えられ、大曲氏の『川柳辞彙』、草

名人の汗

阿部 柳太

阪神戦や高校野球で、植草節の名調子で知られている朝日放送の植草貞夫にアウンサーとしての苦心談を聞きました。

①いくら名文句でも2回使用をしてはならない。

②過ちに対して、いつまでもよくよくしない。忘れることも、技術のひとつである。

③なにことも自分の手で事前調査と研究を十分にやれ。

これら三つであります、どれをみても、むつかしいものばかりであります。

私の知人で日本画壇の大家でありまし

薙氏の『川柳辞典』に収められている。

要するに以上の八句は当初上方句として、『折句式大成』にあった句が、後に江戸に伝わって川柳点のように思われるようになったもの。

た堂本印象氏(六六―一九五五)の弟子であったひとが、つぎのような話をされました。

「私の修業中のときでした。『狐』という題を出されたのですが、どうしても尾っぽが思うように筆にまとめることができないので、A画伯の作風を真似て出品をしたのです。

すると一目みるなり先生は『お前はなぜA画伯に手伝わってもらったのだ、自分の絵を失ってしまつとは情けない奴だ、下手でもいい自分の絵を画け』と一喝をされたと言りました。

植草・堂本の両先生の時代や職場の隔りはあっても共通した立派なものを持っています。川柳を通して人生道場をめざす私たちは、名人・上手といかなくても、せめてそれに近づく努力を尽くしたいものです。

腕の汗に妥協を許さない 柳太

特に(2)は川柳点として伝わっただけでなく江戸の奉月評に取られ、(5)は江戸の露月評にも取られている。

なお、宝暦十二年の川柳点として伝えられてきた「その手代その下女昼は物言はず」の句は、享保十四年、大阪の千鹿点「玉みがき」に既に見えており、『柳多留』三五篇の――

相性は知りたし年は隠したし

なども、宝暦元年の上方の折句集『和国車』にその類句が発見されるなど、川柳点の句として伝えられて来た句には、上方句から取り込んだものが多い。

要するに、延享・寛延・宝暦初期の江戸万句合や京都系の会所本において、殆んど見るべき佳句がなかったのに反し、堺・大阪の文化圏における李坡・晚鈴・泉流等の選句や折句の中には、後に江戸の万句合に採られ、「川柳」として伝えられるようになった句が多いということである。

蘭田博司氏(静岡市)より

金一封ご寄贈いただきました

川柳塔社

愛染帖

橋高薫風選

豊中市 奥田満女
忠魂碑前におどりの輪がまわる
この人の生きてはるのを忘れてた
青森市 工藤甲吉
七夕や我が織姫は音が無し
源氏蛍光る静も義経も
岡山県 土居耕花
百姓が分かる四角なモーニング
ホテルふと恥ずかしいとも考える
笠岡市 木山遠二
ねたつきり五年を待ってたのが卒寿
二百十日二百二十日の名は消えず
米子市 八木千代
咲かすまで花の名前は告げられぬ
いつだって笑い遅れている父よ
姫路市 大原葉香
吃水線豪華な船を支えている
伊豆タビュール息まで映る勝力士
和歌山市 後藤正子
聞きわけのない激しさに葉鶏頭
ひまわりの下で泣いてはなりません

米子市 沢田千春
ゆきづまり形見の帯をしめなおす
甘い曲の流れる落し穴でした

鳥根県 松本文子
夢のない人だコーヒー飲み終る
花の茎から死後の世界覗けるか
兄逝きて
吹田市 栗谷春子
蟬しげき夏なり兄は召されたり
立秋の文字から通りぬける風

米子市 川上より子
うかつにも大きいつづらまた選ぶ
ご迷惑でしょうが必死のバタフライ
浜田市 佐々木裕
ブラジャーのホック男女のラブゲーム
秋の雷女が放つ平手打ち

田辺市 染道佳明
青切りのみかんが出たよ亡父母よ
せめて遺書ぐらいは誤字のないように
高知県 赤川菊野
桜桃忌太宰治と夜を明かす
ひたすらに生きて居ります毛糸くず

米子市 林瑞枝
流木も私も月の砂に寝る
勘違いしないでお呉れ蟹の泡
和歌山市 木本文子
ねぎぼうず伊達に伸びてるわけでなし
三日坊主の趣味が並んでいる書齋

西宮市 瀬尾六郎太
どれとても宰相の器と受けとれず
アメンボーゲンゴロウ無きタンボかな
高槻市 河瀬芳子

鳩尾に石がたまって笑えない
音たててコーヒーを飲む敗者たり

寝屋川市 江口度
威張るなよ鼻の先から日焼けする
鳥取県 江原とみお
逆流を試みた川涸れている

唐津市 久保正敏
ロボットと違う微熱を持っている
富田林市 藤田泰子
揚花火夢の供養をするように

名古屋市 藤井高子
ロッキングチェア栄枯の夢の果て
豊中市 田中正坊
一本のすすきが折れて蛇笏の忌

岡山県 清水悠貴女
淀かな柿は静かに彩を持つ
岡山県 灰原泰子
娘は二十男結びはまだ解けず

米子市 政岡日枝子
卵から孵ると風は真上から
鳥取県 新家完司
恥多き街をくぐってピアノ澄む

今治市 月原宵明
街路樹の陰から陰へ車椅子
大阪市 今西静子
ほとぼりがさめて愚かな顔を出す

大阪市 山田妙子
雑念をキャベツと一緒に切りきざむ
佐賀市 古川一徳
標準語で話すと嘘がつき易い

和歌山市 桜井千秀

しなやかにしたたかに生きエッセー集

広島市 流 奈美子

母の絵を一枚飾り満ち足りる

高槻市 辻 白浜子

矢面に立つ鉢巻が弛んでる

西宮市 奥田 みつ子

亡母と姑かけの重なる盆の朝

和歌山市 松原 寿子

ひにくにも刺が生きづく通り雨

和歌山市 田中 みね

終着へお多福面を付けたまま

大阪市 渡部 さと美

夕焼けの影反省をして長い

唐津市 浜本 ちよ

うっちゃられた方が見事な花をつけ

尼崎市 春城 武庫坊

世紀末メリーウイードー氾濫か

川西市 野村 静雄

隠された肌美しい夕涼み

和歌山市 山川 克子

見習いのナース労る松葉杖

島根県 榑原 秀子

人恋いを鳴くひぐらしがかき立てる

唐津市 仁部 四郎

昇給の辞令にてれる五十坂

大阪市 古川 美津枝

一分の無風は平和への祈り

五所川原市 加藤 彩人

ひまわりは夏の王者の貌でいる

和泉市 岡井 やすお

また年を聞かれるだろう敬老日

庄内の旅情を包むジャンボ路
奈良市 米田 芳子

母逝きて五十路の春のたよりなく

堺市 桜沢 あかり

依怙鼻真ないか首振り扇風機

弘前市 斉藤 劔

風鈴は静か家蟻忙しい

和歌山市 山口 三千子

真中へ出たら思わぬ風に会う

和歌山市 山野 あやめ

母さんを醒めた眼で見るお年頃

奈良市 岸野 明

但し書酸素吸入してやろう

米子市 林 荒介

縄を握ったままの妻である

和歌山市 神平 狂虎

割り箸を支え切れない刻がある

和歌山市 福本 英子

羽搏きを忘れ卵を産みつけ

和歌山市 千原 理恵

事なかれ主義も時には吠えるもの

奈良市 堀江 光子

再生の水の滝にも夏光る

今治市 矢野 佳雲

怒ったら朱が濃くなるバラの花

岡山県 小林 妻子

百姓へ切腹せよと言う施策

島根県 堀江 正朗

手さぐりの自由誰かに見守られ

島根県 堀江 芳子

お茶注げば身の上語る野菜売り
奈良市 米田 芳子

生も死も八月だった亡父のこと

豊中市 上田 登志実

結局は辞典枕に昼寝かな

河内長野市 植村 喜代

一振りて伸びる小槌が娘にほしい

西宮市 松本 一郎

わが恋の終りを告げたのは二番

岡山県 江口 有一朗

鳥飛ぶに任せ明るく広い空

滋賀県 久保 和友

葬列の長さも遠野の旅のよさ

笠岡市 松本 忠三

一人でもいいから味方になってやろ

兵庫県 北川 とみ子

七人の敵が消壺かき廻す

奈良県 米田 恭昌

納骨という名の家族旅行です

名古屋市 越村 枯梢

孟蘭盆会あちらの話でも聞こう

大阪市 神夏磯 道子

巡礼の群が暴徒と化する

八戸市 島田 昭治

前世をいぶかるほどの欲の無さ

徳島市 宮武 まつ女

白足袋の底へ余韻がまだ残り

尼崎市 春城 年代

しじみ蝶ポストの赤とたわむれる

倉吉市 田中 八太郎

手をついて階段のぼる猫と僕

高石市 浅野 房子
友の訃と野球放送聞く耳と
静岡市 渥美 弧秀

一抜け二抜け寡黙に慣れて共白髪
川西市 松本 ただし

夜景だけ百万ドルの崖つ縁
大阪市 町田 達子

孟蘭盆会せわしい経に揺れる過去
和歌山市 青枝 鉄治

野次だけの議員地元でよく喋り
守口市 結城 君子

兄音楽葬にて送られる
和歌山市 山田 高夫

三度目の偽証へ妻が向き直る
鳴門市 八木 芳水

リベートへ紹介状も軽く出る
米子市 小村 てい子

正座して御飯を待つて力抜く
芦屋市 竹中 綾珠

内科では賭けだと言われ外科保証
岸和田市 芳地 狸村

おしゃべりの女が囲む特売場
宝塚市 丸山 よし津

取りそこねた蟬にあげびの笑が揺れる
米子市 茂理 高代

出不精で風鈴だけと遊んでる
広島県 田村 新造

黒鯛がたもとを跳ね出た生作り
大阪市 川原 章久

この世相老いに深まる猜疑心

茅ヶ崎市 山上 元孝
蘆溝橋向うは忘れず五十年
大阪市 松尾 柳右子

本棚を占領してるウラビデオ
羽曳野市 吉川 寿美

白足袋を洗う小さな囃ひとつ
福岡市 矢内 寿恵子

空想の果なき二十一世紀
今治市 山田 宝保

終電車淋しがり屋の酒の息
美面市 椎江 清芳

即身仏三十二相を乗り越えて
竹原市 信本 博子

育つ子に父の果たさぬ夢を追う
東大阪市 中尾 しんじ

病床へ命燃やせと爽竹桃
岸和田市 古野 ひで

人通り絶えてまだ宵赤提灯
和歌山県 北山 凡太

夏の部屋花一輪のさわやかさ
島根県 小砂 白汀

流行の脚は韋駄天さながらに
黒石市 相馬 英三

個性派の草家一軒でんと座す
奈良市 井上 大

喉越しのビールが好きよ鞆を振る
鳥取県 西浦 小鹿

毎日が父の日だった昭和初期
羽曳野市 中村 優

菊薫る静寂の中眠ってる

ワープロの貧で始まる自分史で

富田林市 浦田 トシエ
あいう迄先は言えずに走る孫

富田林市 片岡 智恵子
脱げ殻を見て鳴く蟬の空さみし

吹田市 西岡 豊
岩坂に神の鎖が垂れ給う

真屋川市 宮尾 あいき
月見草そろそろ終る夏の恋

岡山県 山本 玉恵
七夕に変体かなで二度の恋

仙台市 川村 映輝
円高で拾ったような大黒字

枚方市 中山 おさむ
もっ少し歩こう私の城がある

豊中市中桜塚三丁目13-15
橘高薫風宛(ハガキに3句)

投稿先 千560

NHK川柳募集

課題「我慢」 選者 森中恵美子

締切 10月10日
(ハガキに三句以内)

投稿先 大阪市東区馬場町3-43

NHK大阪放送局、ふれあいラ
ジオセンター、川柳係

発表 10月25日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

久家 代仕男

溜息を乗せれば沈む笹舟の舟

信本 博子

爽快な遊びであるべき笹舟も溜息が絡むと深刻 沈むに悩みの程が伺われる。

地つづきであればあの世へゆるると

高杉 千歩

地つづきであればとは如何にもベテランらしい着想。忽然と消え去る死の旅路は誰の目にも垣間見ることすら出来ない。願望を込めての軽妙なタツツちに敬服して脱帽。

遠雷や父の呆け聞く電話口

笠鳴 恵美子

遠雷を耳に雷嫌いだつた父を思い父の様子をそつと電話。聞いたとてどうにもならぬことを承知しながら……遠雷を通して父と娘の情愛は深い。

浄化された想い出ばかり亡夫の忌

河瀬 芳子

葛藤もあつたであろう夫婦に、失つてみる

といい思い出ばかりに浄化され、今更ながら夫の重みが懐かしい。慕情が横溢している。真実を探りに戻る砂の城

児玉 歌子

脆くも崩れた砂の城、通り一遍の報告では納得致し難い。何か有るその疑念は、自ら確かめるしかない。

鈍行の夫と囁るところ汁

吉川 寿美

生来敏捷な夫ではないのだが緻密で慎重派。それを支えて婦随の妻、調和のとれた夫婦像がとろろ汁で旨く描写されている。

騒がれる前に看板塗り替わり

桜沢 あかり

噂チラホラではすでに遅し。休業一日にしてその変り身の早さ。顧客や近所に疑う余地も与えぬ商界の読みの早さと演出は流石。

妥協して心寂しい酒に酔う

金村 青湖

自分の意志には添いかねるが大勢がそうであればと妥協。拭ききれぬ遺憾の酒はこれほど寂しくほろ苦いものはない。処世の断面。

老眼鏡の婦長に無理が言い易い

森川 まさお

なりたての生きのいい婦長さんでは融通の効かぬことおびただし。老婦長ともなれば海千山千、話の判りが早い。忠告者の目は確か。

父さんの節は音声多重です

土橋 はるお

声だけが矢鱈大きいだけで節回しも何も無茶苦茶、音痴の歌の方が耳栓が要らぬだけ

も少し楽しめる。

独居老愛という字のずぶ濡れに

太田 幸枝

綺麗ごとを鮮書してみても所詮孤独の壁は破ることは不可能。佗しい自嘲しか残らぬ。浴衣着て涼しい顔の母になる。

山根 八重

働き蜂の世の寛ろぎに子供等の安らぎが懸える。

プライドがあるから距離が縮まらず

朝倉 大柏

プライドの高い人には鼻もちならぬ人が多い。それを表わさぬ人こそ慕われる。恐竜のように首振るシヨベルカー

秋元 てる

比喩の句として共感を呼ぶ秀句。さよならを言うのが怖い影法師

高田 美代子

お別れの手紙ポストへ来て迷い

高野 宵草

いずれも微妙に揺れるおんな心をそれぞれに詠いあげ、女ならではの句。

イヤリング似合いますかと横にゆれ

岩本 笑子

似合うかしらと左右の耳元を見せる。おんなの嬉しそうな姿が目につぶ。

ふるさとにストレスばつと夏祭り

池田 寿美子

蓄積のストレスも祭りの踊りの輪で一気に解消、矢張りふるさとはいい。省略も旨い。

尚香のむ 小出智子選

許せないものは許さず秋を待つ 和歌山 西山 幸

裏目裏目に出る養子を振っている

カナカナの鳴く夕暮に只黙す 島根 松本 文子

この街にもわたしの涙落ちている

ジंकスは破れぬままに雨女 和歌山 山川 克子

雨降って降って赦す気取り戻す

花をそだててまだ約束が果せない 松原 佐藤 藤子

少し休んでゆっくり明日を考える

ぐずぐずと言わせてくれぬ落し蓋 藤井寺 高田美代子

根っからのおきやんを泣かすものもらい

梔子の白思ひ過ごしはなかつたか 出雲 園山多賀子

離別した友への想い百日草

夏雲になって病窓励まそう 大阪 神夏磯道子

落ち着きがなくなる雷雨注意報

接点と思う夫の靴みがく 佐賀 寺中三枝子

幸せになり過ぎぬよう帆を降ろす

雨宿り見知らぬ人に話しかけ 堺 鈴木三千代

善意と善意いつもどこかですれ違う

悪役の居ないドラマでくたびれる 西宮 奥田みつ子

大阪 西出 楓楽

薄情な妻の小さな涙壺

月見草月の雫を真に受けて

紫陽花の雨を見ている病み上り

いつかいつかと外国地図を読んでいる

親切を無駄にされたという驕り

背を流す思いで墓のこけおとす

ライバルのやさしさ恐いなと思う

絵馬揺れて神通力をほのめかす

何回も足運ばせる還付金

ある予感神と仏が背をたたく

錯覚のはなやぎ髪なぞ染めたとて

華やいでみせて心に時雨する

回覧板噂一つをのせて行く

亡父の里どこの家でも茶が美味い

しきたりが宙に浮いている新世帯

女には惜しい度胸とささやかれ

デジタルに変えて童話が途切れがち

ウソ一つ言えぬ背中が淋しそう

好物の桃を賜る孟蘭盆会

心配をしてくれる子と夫がいる

明日咲く花を信じて居る少女

栗の花実になる手品見せましょか

捨て犬の瞳に負けて抱きしめる

晴耕雨読繩はきつめに拘つてある

コスモスは風の噂に散りいそぐ

高槻 河瀬 芳子

岡山 松本 元江

寝屋川 岸野あやめ

大阪 堀 いくの

和歌山 堀畑 靖子

和歌山 湯浅 由梨

広島 流 奈美子

鳥取 林 瑞枝

大阪 松尾柳右子

鳥取 田村喜美子

名古屋 藤井 高子

和歌山 山口三千子

大阪 上江洲勝子

尼崎 春城 年代

吹田 茂見よ志子

出雲 吉田 智子

大阪 津守 柳伸

和歌山 前田 美子

羽曳野 福田満洲子

大阪 鍛原 千里

富田林 松本今日子

泉南 坂口 公子

米子 大田みさと

堺 桜沢あかり

和歌山 寺田 裕美

毒舌は血筋と思ひ聞き流す

自己革命先ず手はじめのサンングラス

原点に白い^{キヤンバネ}画布架けておく

水草にからみつかれた美少年

ドリントク2本その勢いで突っ飛ばし

たとえばの話が光る年の功

故郷の温み慕えば敗けになる

立て替えて一人気をもむ金となり

レトロ調ガルボ粉いが闊歩する

ゴキブリにワナを仕掛けることぐらい

争いを好まぬ夫の広い背

縛れども嫁と二人で解いて生き

ドタバタが続いてどばつけ酸っぱくなる

まだ手足動けるからと一人住む

盆の月仏にきかすよい話

悔い少し残した音で鍵落ちる

逢える日の頬へ日射がやわらかい

八ッ当たりしてる可愛いふくれ面

年ごとに根性の悪い顔になり

長針に待ったをかけただけのこと

平等に育てたつもり陰と陽

遠雷や極楽よりの余り風

カビ臭い浴衣箆筒を出たがらぬ

小さい秋へアスタイル変えてみる

梅千の彩染めあげている暑さ

和泉 中川 楓

大阪 板東 倫子

和歌山 木本 文子

出雲 石倉英佐子

奈良 天正 千梢

岡山 土居ひでの

米子 政岡日枝子

堺 高橋千万里

堺 小西 小雪

大阪 渡部さと美

宝塚 吉田 笑女

米子 茂理 高代

和歌山 桜井 千秀

藤井寺 楠 昭子

鳥取 さえきやえ

和歌山 坂部紀久子

岡山 山本 玉恵

和歌山 森 茜

松原 北野 久子

吹田 栗谷 春子

和歌山 田中 みね

京都 山脇 タネ

和歌山 福本 英子

貝塚 池田寿美子

岡山 矢内寿恵子

出目金が愚痴こぼしてるブクブクと

ポタポタと白い乳娘は母となり

前のめりして信心をすすめられ

水道のしずく小人のようにはね

本当に上手やなあと汗を拭き

真心で無口がのばす棒グラフ

次の世も貴男の側に置いてほし

大物でないが亡夫に見せたい息子

御先祖のお蔭と思ふ孟蘭盆会

ポーナスがはいると財布よくしゃべり

お見合いの度に付き添う母の愚痴

岡山 富坂 志重

茨木 堀 良江

守口 結城 君子

島根 喜島 ノブ

茨木 吉川 悦子

新発田 上鈴木春枝

姫路 釣 遊光

姫路 中塚 遊峰

姫路 松浦 輝月

岡山 灰原 泰子

粟屋川 太田 藍子

ゴシックの一句目、「許せないものは許さず」と心の
葛藤のあとがみえる。許せないことは許すことではない。
秋が来れば自然に忘れられるかもしれないとも思う作者
のやさしさで秋を待っている。幸さんの正直さにここで
打たれる。二句目、「夫の靴を磨く」というのは極くあ
りふれた所作ながら、それがささやかな夫婦の愛の接点
であると言う。平凡な生活の中から、何を作品にするか
はとてむつかしい。「接点」とは作者なりの見付け
である。三句目、人生は何時も順風満帆とは限らない。時
には帆を降ろして風のうしろへ廻ってみることも大事。
「なり過ぎぬよう」とこころして生きる姿は美しい。



ハガキに雑詠3句 毎月10日締切

投句先 〒544 大阪市生野区勝山南1-18-10

小出智子

第2回 川柳塔勉強会

住 可 山 遠

8月17・18日、丹波篠山デカンショ祭に合わせた勉強会である。第一陣はJR福知山線宝塚乗車組、11時篠山到着。第二陣は大阪乗車組12時篠山到着。それぞれ小西富士子さん、米朝、可住が出迎える。町はデカンショがスピーカーに流れ、ちようちゃんが軒先に吊られて祭り一色。両組とも宿舍の向い側の宝塔寺に建てられた故小西無鬼氏の句碑を訪ねてからの宿舍入り。花を供えられた句碑がみなさんの御来篠を喜んでるようである。

第一陣13名、第二陣13名、紳士11名、淑女15名という御一行である。みんな揃ったとこ



ろで昼食。冷房の食堂で漸くびっしよりの汗が引いてゆくのがわかる。

二時から句会開始。武庫坊氏の司会で先ずは正坊氏のお話から、テキストまで用意して蘊蓄ある「句語」の解説、私は選に夢中でお聞き出来なかつたのが誠に残念だった。

兼題披露がすすむにつれ、元気な呼名、一句毎にうなずく顔、楽しい笑い声、川柳塔らしい和やかな雰囲気包まれるのにその時間はかからない。初めて参加したささやまの仲

間も緊張がほぐれて輪の渦につれ込まれる。

句会が終って館長のはからいがあって踊りの手ほどきを受ける。実は踊りの振り付けが今様の踊りに変って今年が初めての新しいデカンショ踊りの発表となった次第で、二人の女子職員さんに足の運び、手ぶりを何回も何回も教わって、漸く敏さんの審査を通ったのは五、六名？。

一と風呂あびて浴衣に着替え夕食。ビールが出、酒が入るとそこは何時もの旅ごころ、踊りの心がすっかり整ってくる。提灯の火が夕闇を誘う頃「川柳塔社」のプラカードを先頭に出発。十数年前、無鬼さんが企画された交流会の時の思い出の写真を鬼遊さんが持って来て下さった。その時のプラカードを持って同じ宿舍から同じ道を通っての再現である。ジンと胸に迫るものを憶える。

会場に到着するともう広場は人で一パイ。花火を合図に踊りが始まったところである。受付の登録は5番、一廻り踊って中央に設けられた舞台へ上る。あとは埋めつくされた踊りの輪に溶け込んで心ゆくまで踊るのみ。テレビ取材のライトに太茂津さんのあてやかな鉢巻姿が浮ぶ。かき氷をしゃぶりながら踊る淑女、プラカードを打ち振る敏さんの顔に汗が流れている。夜の涼風も人出の熱気に消さ

れてジツトリと背が汗ばむ。まだまだ踊りた
いと駄々をこねる人をなだめて、花火のクラ
イマックスを後に引揚げる。翌日の新聞に入
出8万人とあった。お祭りの好きな日本人の
血を私たちも確かにしっかりと受け継いでいる。
18日は朝から町の観光、ボランティアの細
見さんのマイクに従って古い城下町の歴史を
歩く。春日神社の能舞台では酒井ひか平さん
が元氣に出迎えて下さった。

農協経営の特産館で昼食、解散となったが
時間待ちの間に猛烈な雷雨に会って支離滅裂
の解散となってしまった。天を仰いでの嘆息
となったが、「楽しかった」「すばらしかった」
という温かい皆さんの声に満たされて、又い
つか、皆さんの御米籾をお待ちすることを乗
しみに勉強会の報告をさせていただきます。
かみなりに握手も出来ず蹴散らされ 可住

角帯を締めると変る首の位置
尻からげ出来る程度に帯をしめ
これしきに負けてはおれぬ帯の芯
角帯に老舗の誇り秘めている
緊張がとけてく帯をとくように
兵児帯でおぶってくれた母の背
でかんしよの中で見つけた紅い帯
人生の縮図がのぞく男帯
帯きりり結んで弱さ見せぬ母

武庫坊 花村 年代 今日子
みつ子 文子 君子
はつ絵 テル

女史多忙帯は静かに眠るのみ
村役場お稲荷さんの棚があり
Tシャツが役場に集う村おこし
牛連れて役場に回る村の道
開発の波にとまどう村役場
顔役のコネで入れた町役場
役場なら固いと決めて嫁がせる
役場には死んでも生きて世話になり
役場なら息子おりもまず課長です
故郷の役場に戸籍置いてある
生まじめな猿でつぎつぎ子が生れ
猿今日も南京豆で半平太
ボス猿はどれかを探す新入社
人間を真似て群から消えた猿
三本も猿より多いので困る
猿山の見物人も似た顔で
おもちゃ屋の猿が愛嬌売りつける
カメラにはポーズをとってくれる猿
満腹のボスがいるから猿平和
議事堂で芝居している猿も居る
はぐれ猿お寺の鐘が好きになり

「帯」 津守 柳伸選
博多帯女に隙が消えている 遠山 可住選
冬葉
「役場」 養子とる話役場も知っている 黒川 紫香選
「猿」 核知らぬ猿で夫婦のノミ退治 柳石子

百合子 薫風 正坊 紫香 柳伸 笑女 みる etsy 富美 鬼遊 小路 佳秋 太茂津 栄 美智子 江美 越山 米朝 可住

第21回 東大阪市文化祭参加
第15回 市民川柳大会

日時 昭和62年10月11日(日)正午開場
会場 東大阪市立社会教育センター
東大阪市長堂2の38
(近鉄布施駅北5分)

電話06(789)4100

宿題

箱 波部 白洋選
茶色 北川アキラ選
ペン 西出 楓楽選
鬼 池田 南岳選
旗 山本 翠公選
生きる 岩本雀踊子選
美人 岩井 三窓選
滝井 竹郎選

席題 (当日発表)
各題2句 締切1時半
会費 一、〇〇〇円(発表誌呈)

主催 東大阪市文化連盟
東大阪市川柳同好会

宇治の橋姫

布施 幸子

春は桜、山吹、藤などが競い咲き、夏は螢が飛びかい、秋の紅葉の錦、冬は雪景色と、南の京の宇治は四季それぞれの趣きが深い。銘茶、名水によっても知られる土地である。

地域のほぼ真中を貫いて流れるのが宇治川。宇治橋はその流れに架かる大橋で西詰め近く張り出しがあつて『三ノ間』といわれている。

昔、貴族の邸で奥女中のいた部屋を『三ノ間』とよんだそうだが、宇治橋の三ノ間には『橋姫』が住んでいた。

橋姫、とは橋の守り神を意味し、津々浦々に大勢おられるが、宇治の橋姫はとくに名高く、いわば総代である。

宇治川の激流に、はじめて橋が架かったのは、今から千三百年以上も前のこと、その安泰を祈つて三ノ間の祠には橋姫が祀られた。

豊かな宇治の川水は、瀬田唐橋の下深くある竜宮からわき出すとの伝えを持ち、古くか

ら詩歌文章のモチーフとなり、また舟便や魚漁をつかさどつて人々に恵みを与えてきた。一方で、川水は気ままに氾濫して大きな災いを及ぼすことも少なくなかつた。

洪水ばかりではない。宇治橋は戦乱に巻きこまれたことも再三で、そのたびに壊されたり流されたりした。架け替えは大変であり、十年間も橋無しで過ごした時期もあつたよつだ。

橋の造営に際しては神仏に祈り、魚釣りを禁じ、帝の行幸を仰いで万全をはかり、完成後はひたすら橋姫の守護をたのむのだが、それでもなかなか無事にはすまなかつた。常駐の橋姫さまはさぞご苦労なさつただろう。明治三年の大洪水で橋が流れたとき、この際、神さまに少し安らいで頂こうと、三ノ間から移したのが、現在の橋姫神社である。

長らく三ノ間に一人住まいした橋姫をめぐり、京雀はさまざまにかましかつた。川波が騒げば、「宇治神社の男神を呼んでほのどつせ」、橋が流失すると、「失恋して橋の守護どころやおへんのやろ」。話題に尾ひれがついて、もともとは優しく美しかった橋姫が、いつしか嫉妬の固まりにされてしまった。

嵯峨天皇の御代、都の公家の奥方でたいへ

第34回 八尾市文化祭

市民川柳大会

とき 昭和62年10月10日(祝)正午開場
ところ 八尾市商工会議所3階大ホール
近鉄大阪線八尾駅下車南三百m
八尾市役所向い側

題

席題(当日発表)

宮西 弥生選

「生活(くらし)」

山本 磯選

「鼻」

光森 良選

「明るい」

黒川 紫香選

「花」

卜部 晴美選

「川」

住田英比古選

「文化」

西尾 某選

会費

一、〇〇〇円

懇親会

三、〇〇〇円

(作品集・鉢植花呈)

主催 八尾市・八尾市教育
委員会・八尾市立公民館
後援 八尾市立公民館川柳教室

んなヤキモチヤキがいた。(実はその奥方が
橋姫の前身だった)

「女房のやくほど亭主もてませず」と、夫が
いくら言い聞かせても耳をかさず、気をまわ
してよけい嫉妬の炎を燃やす。

キツネ色程度には嫉いてほしいが、ツノを
はやした鬼のとき妻にはうんざりする。夫
はすっかり嫌になって蒸発してしまつた。

「やっぱり女がいたんだわ。わたしという妻
がありながら」奥方の怒りはすさまじく、ほ
んとうの鬼になつて夫も女も食い殺してやり
たいと思つた。

「そつだ。丑の刻詣りをしよう。そうして神
様に希望を叶えていただこつ」思い立つたが
大吉日、その夜からさつそく奥方は貴船へ丑
の刻まいにしにだすことにした。

貴船神社は、都を遠く離れた北山の、うつ
そつたる杉林の中にある。そこまで夜中の二
時ごろ、はだしてマラソンをするのは、どう
考へても楽ではない。しかも一週間つづけな
ければ効きめなしということだ。でも鬼にな
りたい一心の奥方は無我夢中、一週間はおよ
か何十日何百日もいとわぬ決意だつた。

その熱意やよし、と感心されたのか、又は
面倒だとおぼされたのかは知らないが、神さ
まはある夜、「それほど鬼になりたいのなら

なるがよい。但し、もうここへはまいるな。
ずつと南の宇治へ行つて、川水に二十一日
間つかつておれ」とおっしゃつた。

奥方は喜んで帰宅すると、長い髪を五つに
分けてツノの形に固く整え、顔も体も赤いべ
ンキで塗りたくつた。そうして宇治川まで走
りに走り、宇治橋の三ノ間からざんぶと飛び
こんだ。かくて三週間つかりっぱなしといふ
荒行が実を結んで、奥方つまり橋姫は、めで
たく鬼に変身したのであつた。

満願の日、宇治橋の上を、五本の黒いツノ
を持つ、丈夫そうな赤鬼が歩いて行つたが、
やがて都のあちこちで、仲むつまじい夫婦の
急死が相ついで。「橋姫の崇りだ」オシドリ
夫婦はふるえあがつたといふ。

今も、婚礼の車は、橋姫の嫉妬をおそれて
橋姫神社の前を避ける。だが、縁切りを望む
人は熱心に参詣するようだ。

結婚当初は見向きもしなかつたのに、ほど
なく倦怠を訴へて縁切り願ひの日参をする者
もいるらしく、橋姫は「ずいぶん勝手なこと。
オシドリ夫婦の仲をさくのは楽しみだけど、
冷めきつた縁を切るのは気が進まないわ」と
か、おっしゃつてゐるそつである。

第14回堺まつり協賛

第41回堺市民川柳の会

とき 昭和62年10月18日(日)

12時半開場

ところ 堺総合福祉会館4階大広間

堺東駅南西400m

堺中央郵便局南側

柳話

兼題

外人

板尾 岳人

踊る

久保田元紀選

机

河内 月子選

乱れる

中田たつお選

行列

高杉 鬼遊選

皿

亀山 恭太選

響く

半井 甘平選

歩く

野村太茂津選

各題2句

中尾 藻介選

各題1時30分

賞

各題秀句に呈賞

会費

一、〇〇〇円

主催 堺川柳会

初歩教室

題一 香り

阿萬 萬的

今月与えられた課題「香り」といえば誰でも街角を曲ると匂う花の香りである。まして団地住いの家々には必ずといっていいくらい香る花が植えられていますね。

- 木犀の香り夜道を案内する 秀香
- 木犀の香に誘われて回り道 二十子
- 梔子の花に呼ばれて回り道 正子
- 梔子の香りとわかる路地の風 三三三
- 沈丁の香に寄りそって車椅子 つえ子
- (沈丁花の香りに止めた車椅子)
- 花の香りにもこんなものもありました。
- 初恋に百合の香りが立ちこめる 小鹿
- 山百合の香り深山に魅せられる 知恵子
- (山百合の香りに小さき愛のうた)
- 笹百合の香をみ仏に友ひとり 路子
- (笹百合の香とみ仏と遍路みち)
- 花の香りの次は磯の香りが懐しいですね。
- 潮の香に海が見たくてバス降りる 三三三
- 磯の香がとき郷愁せきたてる 野草
- (トンネル抜けて磯の香がするくにへ着き)
- 浜一面汐の香りのいりこなし 繁男

磯の香りに民商の窓開かされ 喜与志
(磯の香が御馳走窓を開け放ち)
そして故里の母の香りと共に届けられて

磯の香が満つ古里の宅急便 輝月
ふるさと便海の香一杯詰めてある 知恵子
(古里の便り潮の香詰めてある)

また古里便には土の香りも詰めてあり 晏
郷の香が詰った便り母さんの 喜代子
故郷の香り宅急便に乗って来た 洋子
土の香り部屋一杯に故里便

(土の香り一杯くから宅急便) 洋子
夏から秋へととなる 勝美
夏の粥記憶の中のはつたい粉 三津江
山菜に山の香りも込めて炊き すみれ
秋が来て秋の香煮つめる母の鍋

(母の鍋秋の香たっぷり煮てくれる) 鉄治
柚子味噌に母の香りが生きている 美恵子
手作ったジャムの香部屋中うめつくし

(料理教室手作りジャムの匂う部屋) 美恵子
がらりと趣きを変えて… かず子
乳の香の嬰兒子を育て思い出し 保夫
赤ちゃんの香りお乳の味がする サワ子
初孫の香りミルクの味がする

(初孫を抱けばミルクの匂いする) 保夫
娘も年頃になると… 志重
石鹼の香りの似合う娘に育ち てる
清潔ささっと感じる風呂上り 志重
制服の少女シャボンの香りする てる

石鹼の香りさわやか夕涼み 博子
湯上りの香り漂う夕涼み 佐々子
(湯上りの素肌匂う夕涼み)

盆踊りの団扇に漂う香りの輪 明吉
青い目の美人チーズに似た香り 志洋
ジャスミンの香りが混じるゼミの部屋 洋子
長女次女三女で違う茶の香り 正子
下五茶の香りはちとこじつけの気がするが

そして中年から老年期になると… 成明
菊花展女の香りが強すぎて 清
香り嗅ぐ鼻も老いたり立つ秋に 佐々子
老人の部屋に清しい花香る

(老人ホームそれなり清しい花香る) 佐々子
五十年土の香りが身に染みる 三津江
(五十年土の香が沁む手を見つめ)
お土産の香水減らぬ年になり 悦子
嫁の汲む新茶の香りに幸思つ 遊光
また香りはお人柄をあらわすようである… 悦子
ユニークな香りで印象深い人 しず子
品物は自ずと香りよくなってくる 凡太
白檀の扇子の香りまろやかに 富子
(白檀の扇子隣のお人柄)

京の旅匂い袋を選っている 春枝
今は亡き人を偲ぶと色々の香りが… 美子
亡き母の香りが今も残る里 美子
磯の香へ亡母を偲ぶ浜の宿 サワ子
亡き母を椿油の香に思つ 鉄治
亡き人の香りが詰まる小抽斗 茂
浴衣で思つ亡母の指先ナフタリン 治
(盆踊りの浴衣に亡母の香を偲ぶ)

洋タンス香りが残る亡夫の服
今一度父の香に触る形見分け

秀香
みね

(亡父の香にも一度触れる形見分け)

霊前に故人が愛でた花の香を
逝った娘の好きな木犀の香に咽ぶ

みね
富子

(木犀の匂いに逝った娘を偲ぶ)

故人を偲ぶのにこんな句も：
制服に線香の香り忌明けの子

かず子
金子

樟脳の香りが強い遺族席
線香の香り絶えない原爆碑

博子
金子

次は勤行修業の句を少々
線香へ心沈めて朝の経

しず子
明吉

勤行の香炉高野の朝清し
極楽も地獄も知らず香を焚く

明吉
明吉

(極楽へ続く道かも香薫る)

線香の匂いに仏の顔浮ぶ
(香煙の向うに仏の細い眉)

志重
タネ

写経の間静かに香の焚かれおり
写経する墨の香りに心なぐ

金吾
遊光

墨の香に心鎮まる春の宵
する墨の香り芳し文机

繁男
お年寄給食匂い良い顔し

(する墨の香りにしばし心足る)

墨の香りの外に心満たされるものに木の香
と青畳の匂いがありまた。

遊峰
美子

青畳木の香も嬉し旧友の部屋
表替え畳の香りに古女房

下五古女房はいけませんねえ、座つてみ
とか、気が抜ける」とかにしては。

薫風が抜ける座敷の青畳
輝月

午睡誘う蘭草枕に花筵
新築の木の香がくれる老いの幸

勝美
晏

新築の木の香もすがし友の家
(さて坐るとこなし新築木の香り)

はる子
しんじ

さて諸々の香り句であるが、
鯛屋の団扇忙しき人通り

春枝
千鶴子

磯の香に無念無想の釣糸
この三句はちと許り古いかな。

たかし
遊峰

ベランダのニラの香りにある故里
(家庭菜園のニラの香ちよっぴり里しのぶ)

強烈な白檀香の中国展
(中国展白檀の香が強すぎて)

遊峰
凡太

花ごとに香り変っているのは妙
(花ことの違う香りに違う蝶)

凡太
太一郎

鼻利かせ祖母は香りで品定め
(祖母の鼻香りで新鮮さを決める)

一
一郎

香りにも偽物があるハウスもの
(本当の香り忘れたハウスもの)

小
鹿

蜜誘う香り流れて夜の蝶
(蜜誘う香りか夜の蝶のうた)

美恵子
章久

お年寄給食匂い良い顔し
(給食へ年寄り笑う顔を寄せ)

章久
すみれ

剃りあとに男の香りと髭の青
(剃りあとの青さに男の香が匂う)

すみれ
清

梳き髪に香油の艶退院日
(梳き髪に香油の艶退院日)

清
(出湯の香もバックにされて売り出され)

最後は手を入れず戴いた句です。
鮎寿司の香り気にせぬ近江人

正之
三千子

お隣も同じメニユーの換気扇
店内は茶の香りなり紅だすき

しんじ
タネ

香袋ナースに配りて退院す
結納の香り漂う部屋に座し

千鶴子
茂

畳う紙変らぬ香りも嬉しい日
虫でさえ香りを追って花慕う

太一郎
志洋

通ぶってワインの香り誉めている
硫黄の香車にじやれて下山する

路子
章久

コロッケの香りがブンと美人から
船の着く港醬油の香りする

保夫
一郎

嘘一つ混ぜると香り鼻をつく
糸底をさぐり一人の香を愛でる

てる
川柳は人間陶冶の詩だと言われますが、課

題吟を作り選者によって披露された場合、他人の句にああこんな考え方もあったのかと相手の気持を感じとってあげられること、そして世間に対しての視界が広がること、また意外な所に何かを発見するなど、私達は教えられる事が多いのですが、皆さんは如何でしょうか。ではまた来月号を期待致しますよう。

題「掃除」 10月10日締切(12月号発表)

ハガキに5句以内
「良心」 11月10日締切(1月号発表)

宛先 〒598 泉佐野市中庄一〇八一―九九
阿萬 萬的

賭ける

小西雄々選

学歴を持たぬ苦渋を子に賭ける 大柏
 来る来ないあなたに賭ける花時計 米朝
 賭け好きの男しきりに月を射る 三五島
 四コーナーあご出している賭けた馬 新造
 唐津焼人間国宝土に賭けちよ
 能面の中に男の賭ける顔 洛酔
 賭けた日の灯明最後まで見つめ 博友
 念入りに磨いた靴で賭けに行く 美代子
 コーヒー代ぐらいの賭けはたかが知れ 白漢子
 賭けました貴男まかせの土の舟 久
 人が来て賭け御破算にする勝負 代仕男
 医者薬最後に賭ける神仏 章久
 一徹が賭事覚えた日の怖さ 弘久
 プロ野球巨人に賭ける方につき 保夫
 脱サラに賭ける勇気を神に言う 保夫
 賭けること無くても明日はやって来る 保夫
 隙間から覗く賭けごとなら許す 保夫
 埒もない事賭け合うて笑い合う 保夫
 平常心プラス男の賭がある 保夫
 ふたまたを賭けて損せぬ身の構え 保夫
 ジンクスに一あわふかす今日の賭 保夫
 人生を賭けた勝負へ雨が降る 保夫

中立で賭けはきらいなヤシロペー 京子
 人は皆いつか死ぬ身の賭け勝負 新一郎
 賭け事は不得手で酒に飲まれてる 武庫坊
 全快を賭けた鳳仙花がひらく 和友
 子の見込みはずれて孫に夢を賭け 公一
 賭けるにも男の意地が押し通す 秀峰
 明日へ賭ける愚かな父と思うなよ 雀踊子
 どの墓に這入るか女賭けている 規不風
 一発のパンチに賭けると根性 白峰
 窯出しの瞬間に賭け芸の虫 博子
 モナリザの微笑に賭ける愛もある 多賀子
 今日賭ける貌を鏡でととのえる 早苗
 賭け事の好きな先祖の血を怨み 本蔭棒
 子に賭ける夢がだんだん小さくなる 不二
 生真面目な靴が賭けには近寄らぬ 奈美子

佳
 束の間の虹に男は賭けてみる 保
 大穴に賭けた骸の帰り道 どんたく
 折鶴の力も借りて賭けてみる 明水
 男を賭けた仕事だ白い歯は見せぬ たつみ
 賭け好きなママが築いた砂の城 正敏
 人に
 子に賭ける夢七彩でまだ足らぬ 寿恵子
 地
 賭けごとの好きな男は信じない 重人
 天
 賭けてみる相手の磁気が物足りず 木魚
 軸
 賭け事へ負け十字架が重すぎる

手紙

西口いわゑ選

文豪の恋文もある回顧展 みつ子
 君からの返事は手紙そして秋 螢
 過去はみな良い思い出に手紙焼く よし津
 くどくどした手紙は母の慈悲だろう 雀踊子
 神からの手紙と思ひ聖書読む 博子
 母からの便りは土の香も封じテル
 いんぎん無札な手紙に心乱される 年代
 恋捨てた手紙を思うライラック 和友
 单身赴任子の寄せ書きに救われる 宵明
 追伸に本音さらりと書き添える 武庫坊
 ポストにも傘さしかけて雨のふみ 新一郎
 腹にすえかねて夫へ置き手紙 三千子
 達筆な手紙へ出口見つからず 道子
 普段着の父の匂いのする手紙 はるお
 手紙より電話ですます現代っ子 秀峰
 秋祭り手紙を書いてみようかな 保夫
 親展の女文字から請求書 寿美
 出稼ぎの汗が詰っている手紙 正敏
 本文で頼めず追伸に託し 重人
 色あせた手紙が古代の謎を解き 博友
 心待ちしていた手紙濡れて着き 白漢子
 お手紙の返事電話で断わられ しげお

休肝日母への手紙など書こう
流麗にさらり核心よけたふみ
我が心確かめている手紙書く
心とは違う手紙が出来上り
手紙まだ子供頃の右上り
しみじみと手紙書きたいまるい月
戦友の手紙男が甦える
押花を手紙に添える北の旅
絶縁状吞んでポストの無表情
ためらいをふつ切るように封をする
病む人にお国言葉で書く手紙
手紙待つ心ポストにさぐられる
諸行無常手紙の誤字は語るまい
運不運手紙が変えた日を想い
遠花火手紙を燃したにおいする

大柏 高子 遊光
正子 本蔭棒
悟郎 温子 保
てん 雄々 達子
はつ絵 満津子 博子
あき 規不風 洛醉
子 子 子

それからのドラマは知らぬ置き手紙
地 天
ワープロの手紙で無心言うてくる
秋風におろかな手紙ことづける
一通の手紙が夜を長くする

正坊 みつ子

壺

小林妻子選

流さねば溜るばかりの涙壺
残り火は土に埋めた壺の底
成金の背伸びを啜う床の壺
骨壺の遺書が違うた音で鳴る
未練がなくすぶり止まぬ火消壺
老夫婦思ひ出多い火消壺
涙壺減多に見せぬ母の意地
笑わせる壺心得て好好爺
人間の欲を見飽きた飾り壺
ライバルの思う壺だという焦り
壺に金貯めた昔を習おうよ
骨壺の母ちんまりと座す別れ
あわてない強い男の思う壺
善玉を壺にこぼれる程入れる
八方美人で女の壺があふれ出す
過去を消すつもり壺に蓋がない
悲しみの母の背にある涙つば
壺の蓋締めて夫婦の仲直り
ボールペンの人気羨むインク壺
蛸壺で我が墓穴を掘った兵
梅の壺亡母のまことが詰めてある

元江 玉恵 テルミ たけよ 有一郎 山久 ちよ 夢酔 三五島 雄々 武庫坊 保 清芳 洛醉 静子 章久

生きている証し塩壺砂糖壺
骨壺の隙間に一人認知の子
塩壺の底に謀反を溜めている
マジシャンの壺に詰っている自信
思う壺にはまってしまふ欲の皮
肩書が落ちると壺を出たがらぬ
男ひとり住むマンションの飾り壺
金の壺抱いてはてさて客を待ち
壺ひとつ置いてはてさて客を待ち
女体かな白磁の壺の首細し

ひでの 螢 白峰 雀踊子 枯梢
佳雲 裕 虹汀

どっち向いても八方美人らしい壺
壺どころちゃんと呼えて妻の舵
天 地
靴壺の嫁へ総出のお立ち酒
墨壺は涸れても異変知らされぬ

越村枯梢氏(名古屋市)より
金一封ご寄贈いただきました
川柳塔社

柳界展望

集録一敏・武庫坊

作品募集

雑誌3句、一般、児童生徒

の二部あり児童生徒は和歌

山市内小中学校在学に限る。

宛先〒660和歌山市七番丁一

和歌山市文化振興課

「文芸まつり」係

ハガキに作品住所氏名川柳

と明記楷書で記入のこと

〆切まよつり

〈文芸まつり〉

日時11月22日(日)

和歌山市庁舎14階大集会室

(1)児童生徒の部10時より

(2)一般の部13時から合評会

及び当日出詠作品互選

(当日正午より13時まで川

柳2句出詠受付)

当日会費三百円

★第27回和歌山城観月

川柳大会作品募集

題「城」「月」「海」のうちど

れでもよい

応募数一人2句川柳と明記

ハガキで投句は10月9日(金

までに必着のこと

宛先〒660和歌山市七番丁2

和歌山市役所内

和歌山城管理事務所

10月7日(水)和歌山城におい

て投句するものは午後10時

迄受付(投句用紙準備あり)

新聞紙上で発表

表彰式は11月5日(日)

★第16回かもしか誌上全国

川柳大会

題「橋」(3句)

選者〓嶺岸柳舟、松村育子、

猿田寒坊、飯尾麻佐子、古

谷恭一、中谷道子、園田蓬

春、前田美巳代、前田一石

吉田州花

賞〓大賞、準賞、特選に呈

会費〓一組一千円(発表誌

呈)定額小為替、現金また

は五百円以上の切手

締切〓63年1月31日着便

郵便番号、住所、姓、性

別、最近読んだ本、信長・

秀吉・家康のうち好きな人

物、次回課題(漢字一字)

を記入

宛先 〓30青森市松森字佃二

四〇一〇吉田州花方

かもしか川柳社松森編集室

★反戦反核詩歌句集第五集

「平和の樹」核戦争に反対

する関西文学者の会発行〓

発刊。詩五十一名、短歌五

十名、俳句六十八名、川柳

八名のアンソロジー参加。

川柳部門に、同人の奥谷弘

朗・塩満敏・田中隆二らの

作品がある。定価千八百円。

★はびきの市民川柳会は、

九月二日―十二日、陵南の

森公民館で川柳展を開催。

▽同人消息△

☆第五回川柳乙賞・佳作に

中原諷人氏(鳥取県)と、

林瑞枝氏(米子市)が入選

☆「さっぽろ」八月号の現

代川柳の鑑賞欄(齊藤大雄

氏担当)に麻生路郎の「俺

に似よ俺に似るなと子を思

ひ」を取り上げ、路郎の柳

歴を詳しく紹介。「この句

は路郎の代表句というより

も日本的な代表句で、葎乃

夫人の「呑んで欲しやめて

もほしい酒を酌ぎ」と並び

評されている。」

☆「さっぽろ」八月号の、

第11回全日本川柳大会アラ

カルト欄に、橘高薫風副主

幹と高杉鬼遊氏が、取材に

応じ写真入りで紹介。

☆西田柳宏子氏(副理事長)

は、「番傘」誌八月臨時増刊

号に、「川柳は作者の顔」と

題して執筆。

☆奥谷弘朗氏(倉吉市)は

「打吹川柳」誌八月号に、

麻生路郎の「川柳は人間陶

治の詩である」を図式化し

て説明。

☆塩満 敏氏(羽曳野市)

は、八月一日、大阪駅前第

二ビル「ともしび」で、新

婦人北支部川柳会の「第二

回川柳教室」を指導。

☆八木千代氏(米子市)は

「番傘」誌九月号のリレ

放談欄に「愚かばなしい

つの世も」と題して執筆。

☆第39回西日本川柳大会

(9月6日岡山県久米南町)

で江原とみお氏(鳥取県)

は津山朝日新聞社賞を獲得

された。

☆丹波いしぶみ研究会編集

の丹波文庫1「丹波のいし

ぶみ」―六十二年三月発行

に、故小西無鬼氏の句碑、幼

稚園の列とかえった日の和

み」が紹介されている。

★物故者供養松露川柳大会

日時 11月23日(祝)11時開場

会場 米子駅前

米吾ステーションビル4F

兼題

手ごたえ 土橋 螢選

追憶 両川 洋々選

慰め 渡辺 独歩選

身内 但見石花菜選

逢う 八木 千代選

称える 奥谷 弘朗選

ジョーク 恒松 町紅選

合点がってと 澤 車楽選

各題二句締切13時席題なし

欠席投句10月31日必着

投句千円(用紙自由)

投句先

〒689―14鳥取県西伯郡大殿

三六八―二松下たつみ宛

★第29回和歌山文芸まつり

潤いが心に滲みる故郷の味
協田 米朝
兵庫県多紀郡篠山町井串の自宅庭園内
昭和60年11月建立



☆田中隆二氏(羽曳野市)は、家族新聞「かぼちゃばい」第二十二号(B5判八ページ)を発行。氏の川柳四十五句がある。
☆塩満敏氏(羽曳野市)は八月二日〜八日、弘前のねぶた、青森のねぶた、秋田の竿灯祭、山形の花笠まつり、仙台の七夕祭を観光。
☆黒川紫香氏(副理事長)は、「むらくも」誌の秀句は、「鑑賞欄」「八百杉抄」担当。
☆小西雄々氏(鳥取県)は、「むらくも」誌の秀句鑑賞欄「きすき抄」を担当。
☆正本水客氏(大阪市)は、「川柳高知」誌の秀句鑑賞欄を担当。
☆山陽合同銀行発行パンフレットの「文学碑めぐり」に奥谷弘朗氏の「北壁の男らしさを見て飽かず」(大山寺)の句碑が、同氏の略

歴と共に掲載された。
▽お便り△
■石曽根民郎氏(松本市・元不朽洞会会員)
「昭和一ケタ時代、路郎師の来松された折り、浅間温泉に一泊し、お話を聞ききました。川柳雑誌の大会で上阪し薫風さん宅でお世話になったことなど思い出されます」
■山内静水氏(竹原市)
「高野山では大変ご迷惑おかけしました。一時期、目にウィルス菌が入り失明のおそれもあり今日をはじめペンをとりました。少しずつ快くなっていますが当分横着をと思っています。蘭幸氏が居てくれるので安心です」
▽訂正△
■8月号65P中段15行目
監獄を書齋にすれば書けそ
うな 作者は静水
■9月号58P中段15行目
木元文字は木本文子の誤り

山陰観光キャンペーン「見つけてください！あなたの山陰！」、運動協賛

鹿野町みか月川柳会
結成満7周年記念大会

日時 昭和62年11月15日(日)9時開場
会場 鹿野町農業者トレーニングセンター
JR浜村駅下車バス15分
電話0857(84)2131代

お話し
「器」 森中恵美子
「灯」 野村太茂津選
「積る」 貞岡信太郎選
「それから」 小林由多香選
「あっぱれ」 金築 雨々選
「娘」 黒川 洋々選

特別課題
席題 当日発表 各題2句 締切11時
会費 出席投句一、五〇〇円(軽食呈)
欠席投句 八〇〇円(11月2日
消印まで小為替希望)

懇親宴 一、五〇〇円(11月7日迄に投句
先へ予約のこと)

賞 総合8位まで(一句1点方式)
投句宛先 干689-04 鳥取県気高郡鹿野町
鹿野1279 中原諷人方
鹿野町みか月川柳会事務局

主催 鹿野町みか月川柳会

悼 本田溪花坊先生

児島与呂志

昭和三十九年四月四日、溪花坊先生の句碑が除幕された。

大阪に花の里あり通り抜け 溪花坊

造幣局の庭内に官費で建立され、多数の目を見張らせる喜びを先生と共にした。

花の里塚

うらかな春、大阪の春の景物、造幣局の通り抜け、午前九時より中馬大阪市長はじめ造幣局関係者約四十名からのお祝いを受ける

私の記憶の中の溪花坊先生との出会いは、麻生路郎先生も御出席の昭和二十六年一月十四日の二局三社（交通局、大鉄局、阪神、京阪神、南海）新春川柳大会だった。

特別席題「友」 麻生路郎先生選

(天) 友達に同化をされてハイヒール 溪花坊
友だちのことにも涙もろくなり 路郎

昭和三十五年十二月十四日の川柳大阪二百五十号発行記念句会に本田溪花坊先生のご出席を得、記念句会に錦上花を添えていただいた。当日、席上で富岡淡舟氏に編集及び句会のお世話を感謝する記念品贈呈が行われた。

「振り返れば昭和十六年六月、霞町軍人会館に於いて柳界二巨頭、麻生路郎先生と岸本水府先生のご来駕を得て出席者百数十名に達し盛大な創立大会を催してから早や二十数年になり、遂に二百五十号を念行となったのである」と感慨深げにご挨拶された。



溪花坊先生(左)と筆者

れて行われました。句碑は北区新川崎町の造幣局庁舎南側に、刻み石と台座石からなり、刻み石はし字型の珍しいスタイルで高さ七五センチ、幅一メートル三〇、うらには清野局長の命名による「花の里塚」の文字が刻まれている。

川柳指導に先生は大正十四年から四十年間情熱と努力を重ねられた。その足跡がここに花と咲いたものであり、共にお祝い申し上げたいと思う。先生にはますますお元気で今後共御指導賜りたいと存じております。与呂志

それから、それまで同様に川柳大阪の句会でも、毎年の春の通り抜けの時もお会い出来たのに、ここ三年余お会い出来なかった。敏さんと訪ねた折の地藏尊一万句集には驚かされたり、お訪ねの度に遠い遠い川柳談義でした。又大切な先生をお送りした、盆前の夏の暑さに、御冥福をお祈り申し上げます。和歌山に転居して通り抜けにも投句出来なくなりました。先生さよなら。

蠟燭の火がひっそりと消えて逝く

与呂志

本社 九月句会

九月七日(月) 午後六時

メンズフアッシュンセンター

初出席は楠昭子さん(藤井寺市)

月間賞は佐藤藤子さんが獲得。

(進行一天笑)(受付はつ絵・いわゑ)

(記録―射月芳・隆一・山久)

出席者―笛生・萬的・佳秋・章久・三男・春蘭・満津子・道子・杜的・ゞ女・美智子・諷云児・白溪子・武庫坊・年代・紫香・はつ絵・いわゑ・眉水・水客・美幸・芳子・勝美・柳影・悦郎・重人・柳宏子・太茂津・白峰・隆二・狸村・作二郎・小路・池田寿美子・凡九郎・あいき・千代三・正坊・美房・白兔・規不風・笠嶋恵美子・淳一・庸佑・東雲・天笑・月子・おさむ・喜風・和友・ダン吉・鬼遊・一二三・吐来・岳人・文秋・藤子・史好・英子・山久・米朝・冬葉・度・みつ子・敏・昭子・美代子・可住・吸江・楓葉・柴田英壬子・寿子・頂留子・泰子・美緒・寿美・射月芳・雀踊子・柳伸・浩一郎・柳右子

席題「豆腐」

大路美幸選

ひと仕事済んで豆腐屋子を起し
湯豆腐が済むと話題を切り変える
湯豆腐の食へ頃割著心得る
豆腐ゆらゆら一人の心掴めない
冷奴しばし風鈴鳴り止まず
胃カメラで豆腐と心安うなり
豆腐好き少しねばりに欠ける人
風鈴が消えて豆腐の煮える音
湯豆腐の好きな女房で角が無い
煮えきらぬ豆腐男の生返事
冷や奴男の胸がはだけてる
人情も売る豆腐屋の老夫婦
月が冴え嵯峨の湯どうふ人を恋う
お豆腐があればと父も少し飲み
单身へ奴豆腐が真っ白い
湯どうふは脇役だった南禅寺
冷ヤッコあたりさわりのない話
抱くように桶から揚げる冷や奴
お豆腐もあると言うから行くハワイ
子の描いた豆腐の角がまん丸い
单身赴任の掌でお豆腐が崩れない
豆腐屋の手におトーフの行儀よし
屋台で会い晩酌で会う冷奴
南禅寺豆腐目当てに手を合わせ
手はじめが豆腐屋という立志伝
父は無口長男豆腐屋をつがず
スーパリーの豆腐は少う朝寝坊

重人 悦郎 杜的 みつ子 紫香 小路 楓葉 章久 白峰 月子 萬的 正坊 美緒 可住 おさむ 重人 正坊 重人 諷云児 泰子 規不風 可住 みつ子 吐来 吸江 吐来 英壬子 度

学僧の静かに運ぶ胡麻豆腐
味噌汁の豆腐へ話ありすぎる
モンマルトルで豆腐料理を作らせる
こだわれば豆腐にだって芯がある
豆腐屋のラッパが置いてある屋敷
豆腐屋と逢うて落柿舎まで歩く
豆腐屋の手がまっ先に知る季の巡り
味加減豆腐は嘘をよう言わん
自己主張しない豆腐の滑らかさ
湯豆腐をつついて訣れつらくなり
脇役の自負に豆腐の角がある
ごまどうふ明日は掃る旅にいる
生きたためお豆腐ほどの角は持つ
豆腐切る掌に幸せが乗っている
豆腐屋と新聞少年だけの朝

席題「アンテナ」

志水浩一郎選

台風がそれてアンテナはととする
マスクコミがアンテナを張る楽屋裏
いい事を聞くアンテナは光ってる
アンテナに夫婦の秘密を覗かれる
アンテナが回る宇宙のメッセージ
聞きたくない話アンテナ低くする
アンテナの感度が変わる月が出る
アンテナを星の降る夜は星に向け
アンテナに眠れぬネタが引っかかり
生臭い話アンテナ高くする
アンテナに気付いていない火取り虫
アンテナが邪魔だと嘆く風見鶏

みつ子 凡九郎 和友 楓葉 重人 作二郎 楓葉 凡九郎 満津子 芳子 美緒 水客 美房 淳一 美幸 天笑 正坊 いわゑ 白峰 重人 道子 武庫坊 はつ絵 吐来 重人 年代 千代三

アンテナの死角に住んでいる女
アンテナは無口でいつも聞き上手
アンテナにすぐひっかかるスケイタール
アンテナが地球の裏の声を聴く
アンテナがあるのでゆるめな歩幅
パラボラアンテナ流れ雲など気にしない
故郷の母へアンテナ高くする
アンテナがどんだん伸びる闇の中
アンテナの向きを変えねば狙われる
アンテナの向きをとくとき変えている
アンテナの死角楽しいことがある
楽隠居してもアンテナだけは張る
精巧な妻のアンテナには負ける
パラボラアンテナが動く世界が動く
アンテナは昨日と違う風を待つ
アンテナを変えて頭が冴えて来る
アンテナが錆びてる秋の無人駅
ひとり居のアンテナ雑音ばかり聴く
アンテナに野鳥が飛んでくる平和
人事課へアンテナ向けたがる男
騙されに行くアンテナを外しとく
アンテナが異性の方を向きたがる
アンテナに心の迷い見抜かれる
アンテナを張りめぐらせている孤独
アンテナを高く枕は低くする
青い林檎の噂が村のアンテナに
アンテナを上げても届かぬ声がある
アンテナを張り巡らせて飢えている
吉報を待つアンテナを高く張る

武庫坊 岳人 正坊 白峰 悦郎 水客 惠美子 柳伸 美代子 三男 美緒 諷云児 小路 紫香 悦郎 寿美子 作二郎 楓 楽 美智子 白漢子 太茂津 鬼遊 寿子 芳子 はつ絵 作二郎 隆二 佳秋 浩一郎

兼題「シャツ」 春城年代選

シャツぐらい派手にしたらと娘に言われ
詩すこし鬻って赤いシャツが好き
シャツ干して昼にしている船世帯
生き抜くために玉虫色のシャツを着る
職安へ少うし若いシャツを着て
同志です連帯を着るカラーシャツ
べアルック若さがシャツからこぼれる
破れシャツマストの上で絶叫す
戦友と温泉に片腕のシャツ着せてやる
何時着よう娘がくれたアロハシャツ
Tシャツの胸に希望が書いてある
モンブラン登頂のシャツは大切に
背信の咎シャツだけに押しつける
赤いシャツ着て枝雀の顔になっている
洗っても汗が落ちない父のシャツ
ワイシャツが減反など軽くいう
妻の留守シャツの着替えが出してある
坊さんもTシャツの運動会
L寸の体で汗もすこいシャツ
頼母しい男を繋ぐ白いシャツ
税務署の汗を縞柄シャツで拭く
愛薄いシャツのボタンがよく落ちる
テイオールのシャツが似合ってまだ独り
悔いのない一戦だったシャツ洗う
ワイシャツを着ると働く顔になる
厨房に入るワイシャツの腕まくり
洗ろてえなとシャツが言うてはりませ

三男 柳影 紫香 楓 楽 惠美子 美緒 柳宏子 規不風 淳一 鬼遊 寿美子 吐来 水客 耕花 ダン吉 水客 惠美子 笛生 柳伸 作二郎 重信 みつ子 正坊 風児 史好 凡九郎

第10回

寝屋川市民川柳大会

日時 昭和62年11月3日(祝)

開場12時30分 入切13時30分

会場 寝屋川市立総合センター4階

寝屋川市駅西口より京阪バス②
総合センター前下車すぐ

おはなし 兼題 息抜き 橘高 薰風氏
足跡 里 小路選
斜め 門谷たす子選
裸婦 安田 吉甫選
光る 辻 一弘選
天 阿萬 萬的選
平和 森中惠美子選
黒川 紫香選

席題 なし 各題2句
会費 七〇〇円
賞 各題秀吟賞と選者色紙
入選句集

主催 寝屋川市川柳協会
後援 寝屋川市文化連盟

汗くさいシャツに未練のないヤモメ
 私が笑われますと着替えシャツ
 脇役の夫に似合うシャツがない
 焼鳥の匂いと汗のシャツ戻り
 真っ白いシャツへ本心伏せておく
 いつも決った右場で乾く海女のシャツ
 七人の敵が着ているシャツの色
 監督のシャツは冷汗知っている
 夏が終ってシャツのひとりがかめになる
 まっ白に干して油断をさせぬシャツ
 白いシャツ白く着ているひとり者
 脱ぎ捨てた子のシャツ亡夫の匂いする
 ペアのシャツささり気なく着るお年寄

兼題「舌」 田中正坊選

味付もあなた好みになった舌
 一日中舌がうずいた軽い嘘
 利き酒の舌に酔いたい味が沁む
 毒舌ものんで社長の太っ腹
 母の味妻としっくりいかぬ舌
 まだ惜しい命を貰う舌下錠
 飲まされた舌からもれる社の秘密
 土地の味舌に包んで旅終る
 猫舌へお熱い内にと急かされる
 屋根の鴉時々舌を出して秋
 猫舌の立喰いそばへ発車ベル
 毒舌の割には腹がすわってず
 饒舌と無口が絡む夫妻独楽
 余裕とも言えず毒舌聞き流す
 舌切つてやりたい社宅の雀たち
 秋冷の木偶が舌出すひかえめに
 舌出して喰あすを信じきる
 舌を噛むから大阪弁で通してる
 やさしさがあるので毒舌生きてくる
 飽食の舌にいくさは遠い過去
 釜ヶ崎で真直ぐ生きる舌足らず
 舌出していいひとですと言っ隣
 板さんに世辞はつかわぬ通の舌
 饒舌と無口が添っている平和
 舌の肥えたお方だからと覚えられ
 言い勝った舌の先から冬になる
 饒舌がスペースをとる会議録

冬 葉 三 男 諷云児 女 可 住 作 二郎 章 久 度 柳 伸 鬼 遊 あい き 年 代 妻 子 狸 村 美 代 子 お さ む 紫 香 文 秋 雀 踊 子 重 人 美 房 柳 宏 子 度 ち 子 久

一番チビで先頭に居た記憶
 先頭の手抜が響く総仕上げ
 別居中と聞く先頭のハイヒール
 先頭を譲るとまわり見えてくる
 怖いもの知らずが先頭切りたがる
 先頭に立つとラッパを吹きたがり
 先頭の麦藁帽がサインする
 素晴らしい補佐をみつけたトップの座
 暑気当りしたらしい先頭から消える
 先頭で方向音痴旗を振る
 先頭のランナーひしひしと孤独
 先頭の迷いは見せぬ父の背

62年本社句会全出席者（9月迄）

宮園射月芳・西口いわゑ・柴田英千子・
 上田佳秋・北勝美・桑原喜風・山本規不
 風・高杉鬼遊・笠原吸江・玉置重人・寺
 井東雲・岩本雀踊子・川原章久・田中正
 坊・池田寿美子・野村太茂津・板尾岳人
 河内月子・宮口笛生・藤田頂留子・稲葉
 冬葉・春城年代・松川杜的・榎本吐来・
 井上白峰・辻白溪子・松原寿子・川島諷
 云児・佐藤藤子・吉岡美房・西出楓葉・
 金井文秋・神谷凡九郎・阿萬萬的・堀端
 三男・奥田みつ子・高田美代子・春城武
 庫坊・芳地狸村・上田柳影・西田柳宏子
 （41名）

文 秋 章 久 可 住 楓 楽 諷云児 隆 二 はつ絵 柳 伸 英 子 浩 一 郎 白 兔 美 緒

兼題「先頭」 里 小路選

先頭の方向オンチを見守ろう

小心でいつも先頭ゆずらない

寝袋を脱ぎ先頭の切符買う

先頭は他人に委せている保身

先頭も決りあす発つ渡り鳥

先頭の背はいつも狙われる

先頭はお祭り好きなお人です

先頭を信じきってる曲り角

弾丸よけにされる先頭とは知らず

先頭を走る孤独な影法師

先頭を歩いて蜘蛛の巣にかかり

先頭の椅子で血圧測ってる

先頭が踏絵を踏めば秋になる

せつがちが先頭切つていてはぐれ

私利私欲ない先頭の向疵

先頭が視野にはいつている安緒

先頭に立つからいつも叩かれる

先頭が歌うと歌う山の唄

先頭で疑い深くたってゆく

先頭を扁平足が闊歩する

追い越せる位置で二番についている

先頭を視野にとらえてるゆとり

先頭の背なのふるえを見てしまふ

先頭を守り続けている歩幅

潮時とみて先頭は譲ります

先頭で旗を振るから風邪をひき

先頭で旗振らされてるお人好し

先頭を走り孤独と仲がいい

先頭は誰であろうとマイペース

太茂津

月子

一三三

柳宏子

白兎

雀踊子

敏

山久

史好

雀踊子

萬的

重人

作二郎

年代

太茂津

武庫坊

勝美

杜的

楓楽

美智子

笛生

美房

美幸

吐来

白兎

芳子

規不風

月子

小路

兼題「輝く」

野村太茂津選

遣句集の輝き情けを語り出す

貧しくて輝くものに気が惹かれ

輝きを誇り孤独になるダイヤ

てのひらに一つ輝く物がある

輝かぬ男に進む道がある

輝く目ポケットに石持っている

輝いた日から続いている戦さ

溜息で消えた女の輝きよ

輝いた日もある肌を終い風呂

身を落とすには輝いた過去が邪魔

輝いて一円玉の自己主張

精いっぱい生きて輝くものがない

輝いているのはあなたに反射して

眼を閉じる日まで輝く夢を追う

輝いた過去は語らぬほうがよい

輝かしい言葉もらっている身銭

輝きが静から動へ深くなる

束の間の輝きと知る月見草

輝きすぎてメッキが剥けました

輝いた過去が重たい肩になる

輝いておられます恋をしてるから

それなりに磨けば輝きキツト出る

三食昼寝それで輝くはずがない

イミテーション輝く嘘を身に備え

ポイントのは瞳の輝きで審査する

離婚成立急に輝き出した妻

輝きを女いつしか外へ向け

近畿文字放送作品募集

題「時計」 森中恵美子選

3句 締切 10月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

風雪に堪えた輝きそれは母

焦点をずらし輝くものを撮る

いぶし銀スポットライトを嫌いぬく

信頼の眼が輝いている炎えている

初孫が輝く老いた掌の中で

いい人が出来て輝く声になる

大都会星は輝くこと忘れ

貫禄の一つに輝く禿頭

仏師の目の輝きにある命

露玉がキラリトマトが熟れている

双方の眸が輝いていた出会い

輝きを保って平の父帰る

不器用で無口の父の輝く日

輝いているのは秋の果物屋

輝き通してストーンと消える夢ばかり

(清記) 楓楽

昭子

規不風

鬼遊

柳伸

道子

規不風

文秋

米朝



締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・玉置重人

城北川柳会

神夏磯道子報

ジョッキの中で孤独なコココーラ
関白宣言いつか女房にしてやられ
一足毎ゆれて女の髪ゆたか
飛鳥仏ほんの少し笑み給う
肩書を外せば効かぬにらみ鯛
雨宿り虹のしずくをいとおしむ
お隣の風鈴の音にふと目覚め
娘に逢える嬉しきハンドル軽くなり
充電のつもりで無理に食べておく
勝つよりもせめてバースのホームラン
総入歯分身なのに嫌われる
佛を残す妻籠の松橋
泰吉のカメラは古都を撮りつつげ
小さな窓から世間が広く見え
野天風呂まだ恥じらしいの彩を持ち
幸は妻が隣にいつも居る
花道に領袖の影が消えて居る
人生の坂道にある休憩所
栗色の髪道がえす大ジョッキ
JRになつてからまだ旅はせず

白峰 新一郎 節子 ふみ だだし 達子 トキワ 公一 正之 秀夫 道子 晃世 静子 満津子 佐津乃 ふさ子 悟郎 倫子 テルミ 綾珠

虎負けてトラキチ虎になつて居る
簡単な言葉で判る老い二人
幽霊と間違えられる深夜族
父の日は晩酌一本ふえて居り
又の日は指切り外孫送て出す
さだめ故生えて抜かれて親知らず
残雪の穂高をしかと露天風呂
幸せは許す心に恵まれる
寝過ぎたか背筋が痛い父の日に
息切れへ妻が充電してくれる
俄万智よくぞ昭和を歌いける
川柳泉尾
西行も僕も河内風土が好きやねん
海棠の咲く頃いきたし弘川寺
カルガモもマドンナも好きああ平和
異動時期あおりを受けたこまねずみ
桜咲く頃西行様に逢いに行く
燃え残る夢の多さを捨て切れず
飲み過ぎて終着駅へ来た肝臓
どん底の阪神だけどやはり好き
大空へ昇る朝日に明日がある
海面へ十人十色納得す
春一番南の国より黄砂来る
七宝の虜になつた両の腕
晩酌のほろ酔い機嫌高いびき
歓喜仏世界の秘像に息をのむ
靴音たしかマルクス捨てず定退す
百葉の長とはよくぞ申したり
この葉ほんまに若返るやろか
菜漬けになつてはならじ竹を踏む
乱開発地球にはしい塗葉

市郎 温子 としえ 敏子 右近 静子 寿美礼 正行 登志代 静歩 美子 昭子 文子 はつ子 三子 清子 途子 キヌ子 統子 敏子 満州子 弘子

目薬は口にささぬが口をあけ
満たされた鏡に向う朝化粧
汗と雨に泣いたビエロの厚化粧
メーキヤップしてから切り切る三枚目
この癖に惚れた昔がなつかしい
姑をうんとくじ何時しか姑の癖に似る
サークル樟櫛
岩盤を削る男のロマン掘る
西瓜切るジャンケンボンで取ってゆく
夏みかん酸っぱい顔と甘い顔
沈む日に紅いりんごが灯をくれる
電動で削ったえんぴつ同じかお
平凡な夫婦炬燵でみかんむく
気が弱く好きと言えずに悩んでる
荒削りそろそろ仕上げするつもり
魚好き骨美しく皿にあり
好きなこと好きただけした人の顔
西宮北口川柳会
熱帯夜善い奴らしくねつかれぬ
てるてる坊主を信用してるにぎりめし
数千億神秘を探る科学の眼
儲かばな話に並ぶ中ジョッキ
さざ波をみくびびっていた男下駄
輪ゴム一つ欲しい時に見当らず
夏帽子平和なひさし広がる
絵がきはどこも平和な国である
すれ違ふ会釈が残すよい香り
口下手の意地反対へ手を挙げる
億のつくニュースをマスコミ追いまわす
天衣無縫縫って大きい菓子をとる
億の金積んでも売らぬ故郷の森

義一 敦子 美代子 シメ子 素美 美緒 雅子 今日子 智恵子 美子 三四子 千代子 登美子 泰子 薫風 紀雄 米朝 青珠 武庫坊 丸芳子 杜的 杜的 求芽 園歩 白漢子 陽露子 かつみ 諷云児

地底の唄消え炭坑に虫の声
円空仏へ池の反射の影が揺れ
寝そべって戦記を読んでいる平和

一億の涙八月十五日
成長を喜ぶ孫と距離が出来
三億も風化五億に馴れてくる

善人で貧乏くじをいつも引く
億万長者に成り損った話聞くと
吊橋を揺らして愛が始まりぬ

朝顔のつるの主張をいとおしむ
父さんの小言が増える盆休み
右ひだり揺れる心には月が澄み

万燈会帰らぬひとの灯が揺れる
せかないが待つと腹たつレストラン
喝采のない善人のちびた靴

善根が捻ってたのしい今日の句会
憎しみと未練が揺れる水中花
いつもの駅をいつもの音で貨車がゆく

帰省して母には善い事だけを言う
うつくしい飢えが襲って樹が揺れる
歯が抜けた不吉へ女揺れている

三猿に徹し吾家に平和の灯
何億ですわねアハハと松下幸之助
善人の偏屈ぶりが憎まれず

善人の顔がまともに見えぬ悔い
二億円夜空に花と咲いて消え
八月が平和で戦記売残り

こわい程度億の数字に慣らされる
好きさだけ飲ましてあげたいうら盆会
億という単位で賑わう夜の街

光代 萬坊 正坊 柳影 一郎 英子 よし津 いわゑ 年代 春子 笑女 志子 恵美子 保蔵 千世子 佳秋 美智子 江美 是つ絵 芳子 てる 白宗 三笑子 香子 作二郎 定人 清太 伊升 みつ子

億方の星のしずくか草の露
現送車腹のいたまぬ保険事故
虚言癖のしつぽが見えてきたとばり

億シオンに女一人で騒がれる
化粧する男に軽い点をやる
底辺で善人きれいな金を持つ

五十億中の一人として生きる
しんがりを走る人の背ばかり見て
億方の金でも買えぬ親友を持ち

億年を眠りつけていた化石
億単位和解の溝が深くなる
北方領土へ一億人の悲願の瞳

善人の瞳に席を譲られる
少女病み億も万もの星を追う
善人ですぐにかごめの輪にとける

独眼の空に囁く若い竜
禁煙席一本でも減らす積りなり
一億の心が泣いた終戦日

だまされたことも気づかぬお人好し
翠洋会 中西兼治郎報

残暑の候流しそつめんの旅如何
閃々の心指から漏れる砂
夏だより砂絵はがきの帆かけ船

ひとり旅牧場に秋が透き通る
砂浜に大きく咲いた月見草
アルバムでしばし旅路をくりかえし

流れには逆らひ切れぬ戎橋
テカンショのひびく太鼓の旅の宿
滑り込み砂にまみれた黒い顔

ノブ 文夫 良征 博子 幽香 俊子 千秀 高子 芳仙 静子 曲手 紫春 伊三郎 荒介 御前 森生 六郎太 善太郎 保

岸和田市文化祭参加 第37回市民川柳大会

日時 昭和62年10月11日(日)正午開場
会場 自泉会館(市民会館東50m)
今年には会場が変更しました

おはなし 西田 柳宏子
兼題 残る 板尾 岳人選
笑う 河内 天笑選

肩 阿萬 萬的選
書く 中田たつお選
自慢 野村太茂津選

吹く 橘高 薫風選
席題 (二題) 久保田元紀選
各題2句 締切2時

出句は出席者に限る
会費 五〇〇円(大会誌呈)

賞 市長賞・市会議長賞・教育委員
会賞・文化協会賞・操子賞・き
しせん賞

◇連絡先 岸和田市土生町一九八九一八
高橋 操子
電話〇七二四二二〇〇四九

主催 岸和田川柳会

美津枝 宏子 東雲 文子 春子 綾子 満子 登志実 照子 眉水

嫁ぐ娘と最後になつた秋の旅
句の味四季は流れて花の色
うまいもの組み込む旅は老いかかり
たるんでる息子に赤い唐辛子
旅に出て朝から酒を飲んでる
核弾頭積んで平和を模索する
俄雨森の向こうは降ってはず

川柳栗尾

吉川

寿美報

錯覚の愛で喜劇の幕があく
哀愁を残して散るや沙羅双樹
二日目は家に電話の主婦の顔
黄泉路への紅一さしが物哀し
この道も甘くないと星月夜
望郷の運河は暗く多喜二像
人待ちに時計は遅々と進まない
魚心水心あり酒を酌む
ああしんど両手に一杯特価品
雨に洗われ緑したたる高野杉
パンカラの話題飛び出すクラス会
年月も洗い流せぬ罪一つ
洗い髪を洗そ女でない娘
一服の野点に心洗われる
団らんの後に待ってる皿洗い
洗っても洗っても落ちない心のしみ
みそ汁の煮干の味は祖母の味
あまりにも釣った魚が大きすぎ
魚でも澄んだ瞳で勝負する
魚さえあれば機嫌の良い夫
愛の巢が妻のリズムで弾みだし
餌も巢も人間まかせの籠の鳥

光子 為子 さと美 鬼遊 枯梢 紫香 美子 文子 はつ子 三子 淑子 弘子 途子 シメ子 伴子 三千代 美南子 トミ子 白水 敦子 悦子 光子 和子 義一 清子 二子 昭子 シマ子

悪の巢に嵌まらぬように豆剣士
愛の巢を捨てると月が欠けてゆく
空襲で古巢も焼かれ負けました
尼崎いくしま句会 上田 佳秋報
ペン習字ならただだけの年賀状
ペンでなら一人二人は殺せます
才たけて女はペンを捨てきれず
口裏の合わぬ未定の途中下車
これからも妻を愛すか未定です
未定だがいくらか策は溜めている
キューボラのある街で未定の原稿紙
撮影は未定で雨が降っている
未定だが先約として書いておく
脱ぎ捨てた靴は疲れた顔してる
マドンナは着ても脱いでもつけている
産卵の海亀夜を脱いでいる
新しい病院隅へ浅く掛け
バス旅行降りるたんびに荷物殖え
妻は騎手亭主あくせく走る馬
わたくしの小さな恋人さくらんぼ
うちにない金が日本に余ってる
逃げてゆく方が善人かも知れぬ
大方の灯りも消えた団地の夜
使いみち気になる他人の退職金
瓢箪ぶらぶら夫は返事しないまま
待つ事に慣れると矢尻錆びてくる
気がつけば妻の手にあり俺の鍵
鏡舌を悔いております爪切り草
癖のあるポーズで孫が駆けてくる
母と娘と昔を偲ぶ赤蜻蛉
画家の目が脱がしてみたい隣の娘

キヌ子 美代子 寿美 水声 暢子 秋報 曲手 佳秋 幸次郎 伊升 静夢 山久 良征 貞子 保蔵 文夫 すすゑ 牧郎 英子 みち子 タカ子 園歩 伊三郎 年代 ときお 春子

佳句地10選 (前月号から)

神平狂虎選

ははを乗せちが手を引く茄子の馬
カメレオンいつか自分の色で死ぬ
ゆるく結んで情けの溜まる母の帯
思い余って女神は米をとぎはじめ
角砂糖で怒りを溶かす向こう岸
人真似が上手で森に還れない
神様がときどき石を投げてくる
茄子紫にぶらさがる自己嫌悪
夕焼けよ涙は流すほうがいい
うすらいだ痛みにはバラの香が匂う

脱いでから女無口な貝となる
宿浴衣妻は若々しく笑い
古都嬉し苦の夜景を写し出し
どん底の苔を偲ぶ欠け茶碗
耳かきの太さに乗せている噂
酒足らぬ文句が幹事へ届かない
夜の絵を画いて女に選ばせる
うす紙の中白桃の息づかい
風鈴の音にも夜は夜の音
手を添えて女と舟の板渡る
天国に旅立つ母に杖を入れ
天国の湯舟でうたうわらべ唄
誘われて邪魔と知りつつ行って行き

尼崎をばま句会

上田

佳秋報

和友 萬的 松芳 風云児 嘉矩 白溪子 正一 芳子 杜的 紫香 江美 弘治 たか

あんまりの暑さ電気も駄々をこね
 なに拌むもぬけのカラの忠魂碑
 アタムイウ五〇億人夢の夢
 新任者心炎え過ぎいさみ足
 燃えた日の日記は梓を越えて書き
 炎えながら俺の誇りだ勲章だ
 わが道に命を炎やす目がきれい
 炎えている男は過去をふり向かぬ
 夫婦生活男と女のかくれんぼ
 新米が鬼にされたるかくれんぼ
 かくれんぼを鬼にしたがる仕掛人
 宇宙から茶の間へ運ぶ新ニュース
 夢ひとつありそう宇宙のひとりごと
 宇宙から天気予報のネタ仕入れ
 手術台宇宙遊泳でもするか
 宇宙まで話が続く涼み台

静岡市川柳塔同好会 永倉

秋月 佐加恵 金吾 紫峰 博友 拓治 進 桃風 玉水 草風 吟平 文平 照路 美智子 浄美 僕川報 弧秀 金吾 紀代志 定次 孝平 庚子郎 喜平 やす たま たき つね きぬ き代

手術するお医者神の如く見え
 口髭の蝶ネクタイがよく喋る
 塩加減丁度良かった芋が煮え
 肩書がとれて身軽なノータイ日
 三幸教室 桜井 千秀報
 不覚にも本音をもらした代理人
 見合いの場代って母はよく喋り
 二日酔い代理が欲しい今朝の靴
 胸のうち涙に代弁してもらい
 未熟児で生まれたなんて嘘のよう
 育ちざかりぐんぐん伸びる音がする
 水の娘とつきに迷う目のやり場
 いづからか背伸びして聞くの会話
 食べ盛り減食なんか通じない
 反抗期これも過程と耐えてやる
 口答えすじみち通す子に育ち
 帰省する毎に貫禄つけてくる
 奔放に育てすぎると徒長する
 親針に追われ成長する企業
 秒の睨見限った子が翔んでゆく
 他人の飯食うてきた子のたくましき
 赤裸々に問うて私情を持って余す
 ドレスアップして裸の心さらけ出す
 裸麦貧しき風の音も聞き
 裸から築いた過去が背なに出る
 子と別れ裸電球暗く揺れ
 点滅の裸灯別離は人の常
 笑わせて裸のピエロ夢を見る
 アイドルの心機一転脱いだけ
 身の程を知って裸に甘んじる
 干し物の取込み急げケロケロ

まつゑ みつ代 僕川 静 高夫 育子 昇 美智子 かなめ 純子 孝代 孝子 千枝子 三千子 保 桂香 文子 正子 敬子 寛子 靖子 正好 周三 晏 隆行 智水庵 忠昭

落ちこぼれ内気な蛙で跳べまへん
 闘病の私語を蛙が聞きに来る
 湯の郷や河鹿の声を膳に載せ
 雨蛙流されもせず瀬を渡る
 緑高は殿様蛙の知らぬこと
 減反は知らぬ蛙の大合唱
 川柳化粧櫓 植村客遊子報
 お馴染みへ向ける笑顔は別に持ち
 鯨のひげ貰って泥鰌泳げるか
 旅行費用出来て打切るアルバイト
 お気軽にお越しやすとは買わせる気
 職安が混みパチンコ屋が混み街不況
 型どおり仲人二人の席にすする
 母子手帳持つと女が強くなる
 ほころびを縫うて女をかみしめる
 紫の好きな理由を聞くコーヒー
 グループでお茶飲みに行く老いざかり
 海渡る老犬ツアーの花盛り
 親馬鹿の足許見やる五年生
 お舅の十七回忌よくはずすみ
 カルチャーへ弾む心の服を着る
 ハトバスの二時間コースで時かせぐ
 山里の新茶に親友の弾む声
 街に人出ている割に店静か
 万葉のロマンを偲ぶニゴリ酒
 正直が一人話がまともらず
 川柳ささやま 脇 監田 米朝報

当代 和一 金一 千秀 正秋 岳詩 大鷹 秋月 越山 紅葉 白李 礎石 悲子 みつこ サワ子 遊光 輝月 和子 永楽 客遊子 米朝報 とみ子 ゆう也 可住 房子

中毒にならない母のにぎりめし
 中毒の季節梅干入れておこ
 アル中の患者を避けているベッド
 食中を防ぐ茶がゆに喉が鳴る
 方田に溶けて流れに丸く生き
 その先の流れ見たくて拭く眼鏡
 初恋の人なつかしい流れ星
 三世代の裏を流れる知恵袋
 一人住む母を案じる定期便
 遠く住み電話料金高くつき
 老人がおとなしくして丸く住み
 にた川柳会 西村 早苗報

千代子
 ひか平
 百合子
 ヒサ子
 テル
 法 齋
 米 朝
 靖 子
 金之助
 やよい
 雅 二
 雪 子
 晴 月
 千 草
 カ ツ
 幸 一
 宗 光
 重 一
 裕
 紫 泉
 肇
 由 郎
 弘 幸
 舞 吉
 雄 々
 弘 朗
 雀 踊 子

いい人にめぐり逢えそう今日の風
 ドヤ街の溜息億の披露宴
 ある弾み女が身辺整理する
 生いたちにとつてもくわしいノート持ち
 おつとりと美しい嘘考える
 新しい風人情を吹きとばす
 蟬ほどに泣かれて男意志ひるむ
 裕次郎が死んでナイフが錆びてきた
 高槻川柳サークル卯の花 河瀬芳子報
 街の紳士の目と目が合つて絡まれる
 小羊に罌を仕掛ける繁華街
 しあわせが来そうな街で動けない
 ビル街の古木が歴史を知っている
 地図にない街でおとこは暮をひく
 逢いにゆく逢つてはならぬひとの街
 ドアチェーン街の人情消してゆく
 椅子取りゲームに弱くて街に住んでいる
 ふるさとが行方不明になつた街
 三つ目に十三階段見えますか
 物干しに家族三人ゆれている
 雑魚たちは三度きつちり食べている
 三階の女が文句ばかり言う
 三面三様阿修羅の像の影にぶく
 日に三度茶碗の音は狂えない
 三角洲で少年のドラマ始まりぬ
 葱坊主お前も三枚目だと思つ
 三日なら籠城出来る預金帳
 天地人に日本は長い雨期となる
 華麗なる嘘が美人画からこぼれ
 美しい悪女は鬼とたわむれる

きみえ
 鉄花人
 多賀子
 花 子
 景 子
 哲 三
 夢 醉
 早 苗
 俊 作
 八重野
 志 津
 如 水
 洋 子
 杏 花
 年 代
 作 二 郎
 天 樹
 真 笑
 スミ子
 はつ絵
 藻 介
 萬 的
 (卍) 信 子
 麗 友
 晴 生
 俊 平
 正 坊
 梨 枝

美人だと言われる数の傷を持つ
 美人の眼の高さで欠伸をしてやろう
 嘘の下手な美人よ君は退屈だ
 美人には弱いおまわりさんの笛
 すこし淋しい美人と思つ古い師
 少し美人で少しお酒もいける口
 北風をまとも洗札とも思つ
 里風を吹かさぬ嫁でありがたい
 紙かぶと風をみどりにしてしまつ
 じやんげんぼ石が嗤つた軽い風
 風の子も風でなくなる塾かよい
 住みなれて風の言葉が解りかけ
 風防ぐ困いの中も風が立ち
 順風満帆仏壇を買ひ替える
 トレードの噂早月の風に乗る
 風はみどり五月の人よ恋やせん
 毎日の鞆の中に傘がある
 日傘くるくる女が軽い嘘をつく
 子沢山ひとり痛んだ傘で出る
 日傘さす老母の歩幅で午下り
 お迎えは傘一本で足りる仲
 借りた傘開くと骨が折れていた
 力にもなれず駅まで送る傘
 破れてはいても大きい父の傘
 借り傘を返した春の回り道
 一本の傘を返しにぬかるみを
 久世川柳クラブ 二宗 吟平報

佳 秋
 礫
 (鳥) 信 子
 (鳥) 惠美子
 みえ子
 (鳥) 惠美子
 いわゑ
 光 代
 正 一
 英 子
 勝治郎
 笑 女
 春 子
 景 子
 諷云児
 幸 子
 鬼 遊
 彰 一
 高 子
 白溪子
 伊 三 郎
 (鳥) 芳 子
 榮
 井 寒
 みつ子
 水 客
 紫 香
 吟 平
 贊 平
 ふさえ

課長より新入社員の高級車
割勘でゆけば無難でいい仲間
三猿に草ぼうぼうに気がもめる
あの辺に君が住んでる灯がともる
孫からの電話次々呼び出され
愛の橋架けて嬉しいゴールイン
幸せな心にかけて鍵一つ
納得へ別な心が又揺らぐ
見事かな人と花との愛で咲き
意見する母の気持ちもよく解り
子の事になると女房の強意見
食い違ふ意見寂しい帰り道
子の意見素直に聞いて楽隠居
一口を言えば三口の意見きく
手についた職が私の宝かも
子宝が老いに力をつけに来る
子宝に囲まれ今宵米寿宴
又誰か遠く近くに救急車
足音をしのばせのぞく子の寝顔
自販機のビールも町の更けた音
雑音が多くて迷うさじ加減
心地よく空に響いて球をうち
トタン屋根根忙しそうな雨の音
鉛筆を削って思い出せない字
夢に出て父が深酒意見する
葉指宝のリング見せびらかし

川柳たけはら

森井 菁居報

竹やぶの竹のはっぱがさらさらと
土曜市金魚すくいはずくやぶれ
おとくさんビールばかりのんでる

小二昌 之
小四晶 美
幼千 枝

学校のひまわり大きくなつたかな
お母さんいつもきまつて長電話
マンガ大好き毎日マンガ読みたいな
友達のすみれば母さんのおき手がみ
友達の数席気にし本閉じる
土曜市小づかまだいっつももらいたい
喜寿白寿まだまだ挑む道がある
禁酒禁煙いのちの保障してくれず
父母の霊やすかれよ高野山
坐禅など組みたし霧の高野山
たかぶりのままにセールス昼を抜く
長生きが出来そう任せたその日から
健康のご恩つくづく教えられ
ポケットにまだ捨て切れぬ石を持ち
家庭菜園幸せ色に熟れてくる
紫陽花を活けて部屋まで梅雨の彩
庭の花朝な夕なに見て飽きぬ
雑念が幻想の邪魔をして困る
買う前にまずなでて見る夏みかん
赤べんで書置きしてる秘密箱
今日を無事終えて明日に夢を描く
日々の中でかわりて鬼に仏に
雑談の中心で気付いた明日の事
視界ゼロお墓参りに矢張り行く
ポーナスに縁無くなつて鎖を振る
のど白慢母に重なるなつかしさ
花畑心なごます四季の色
ポーナスへ次々増える欲しい物
お大師に抱かれ高野の坂のぼる
一人寝の今日一日をふり返る
失敗を野次馬さんよ責めないで

江 水
通 博
伊 久 菜
美 惠 子
虞 人
旭 泉
保 恒
山 人
つ ゆ 草
秀 香
種 子
半 仙
さ わ ゑ
あ き 子
志 重
つ た 子
千 代 女
雅 紅
江 山
知 代 子
禪 心
甫 正
あ や 子
藤 江
静 香
邦 人
英 子

古老の死泣く人もなく黄昏る
物さしを当てると間違ひばかりなり
長生きをしまししょうやつと二人きり
雲の峰キラリ男の汗を吸う
生かされていることを知る水不足
有頂天になつてにわか雨に合つ
男と女喜劇の台詞言えぬまま
死んでも地獄生きても地獄原爆症
引き止めるように読経とセミシぐれ
ヒロシマの声枯らせど地球広すぎる
難民の方にすまないグイエット
散歩道昇る朝日に手を合わせ
幼い日徳んで買ったウリ一つ
お守りに有効期間が書いてない

倉吉川柳会

渡辺

善句報

清 水
貞 子
淑 子
一 路
比 呂 子
太 虚
博 子
の ば ら
笑 子
シ ゲ ヨ
年 子
千 里
こ う じ
天 石 庵
と め 子
寿 満 湖
小 生
坐 牛
秋 人
車 楽
瑞 枝
と み お
雄 々
荒 介
は る お
石 花 菜
御 前
十 六 夜
満 春

肩書を書く程安くなる名刺

役職を喋りたがっている名刺

雨傘に慈善と書いて駅にある

夢ひとつ食らって生きるかげろうよ

名刺には白アリの課長と書いてある

出世欲ぎんぎらぎんの名刺刷る

一口で固有財産吞んだ夢

ホステスの名刺に火薬が塗ってある

夢買いに花の店から花の店

川柳塔唐津支部

何べんも読んで私の本にする

駅に行くポストに恋を捨ててに行く

水茎の跡麗しく彷彿と

お隣の新婚さんに刺激され

来年もきつと来てねと揚花火

敬称の微妙な綾でくんとさん

新設のビルが日照権奪い

速成就仏身煩惱去らぬ灯が揺らぐ

花火よ花火長い話をしたいのに

ねむい子を起すラジオの夏休み

膚の色拒めぬ時が来る賜杯

わかあゆ川柳会

棘もなく新茶たしなむ老夫婦

まだやれる七十過ぎたバンドルよ

現役的首相のあとを追いまわす

泣き笑い終着駅のベルが鳴る

棘のある花を承知で好きになり

棘捨ててあなたにつくす花言葉

舌ざわりよくてついつい迷わされ

こんな時うっかり舌を出しました

この舌があなたの味を覚えてる

寿朗

柳風

かつみ

幸苑

みなと

ゆり子

次男

独歩

苦句

正敏報

虹汀

四郎

旭恒

高明

あき

掬水

朴竜

久仁於

花代

香代子

正敏

白汀報

紫朗

悦良

ヒデ子

蒼流

世似

聖子

鈴江

智重子

歳栄

現役がちよつと迷ったほうせん花

飽食の舌は昔に戻らない

現役のクラリネットが鳴り止まぬ

棘のない薔薇の花なら捨てに行く

舌の根の乾かぬうちに喋らねば

岸和田川流会

ギャル神輿黄色い声で跳んでいる

水墨画かけて涼風夏座敷

老齡ですわ医者は悲しいことを言う

異性の名を記号に直す予定表

予定なき客へともかく伍ビール

予定過ぎて着かぬ不安な空の便

予定にはまだ程遠い貯金帳

損得が絡み無口がよく喋り

生きざまをまねたい魅力の星が消え

巨星墜つ極に涙するも居間

医者よりも人のうわさで飲む薬

さあという間に合う靴をとっておく

生きる権利を精一杯行使する

家でなら婦唱夫随でいてくれる

バラ色の予定をたてるおさげ髪

家政婦にこんな優しいお茶の味

あつまると話の種に四季の味

味のある父の言葉を抱きしめる

予定日あるは途な百度石

チャンネルはみな裕ちやんで悲しい日

京都塔の会

落日がヒルの谷間に燃え尽きる

禁煙を言わぬが妻と居て吸わぬ

風船の夢を許した白い雲

趣味多形疲れを知らぬベレー帽

かつ子

清泉

民子

はるみ

白汀

武助報

タン吉

圭一

通彦

みのる

一舎

ゆづる

こう

希久志

加代子

浪速子

富士子

寿美子

武助

さよ子

一弥

ひで

狸村

白光子

甘平

操子

杜的報

達子

白李

英子

諷云児

夏至快晴太陽は満足して落ちる

灯を消して女の言葉待つてみる

症状を聞けばどれもがあてはまる

火花火にいくつ約束事がある

働いて遊んで駄馬に悔いはない

親の手をすするりと抜けて子が育ち

たかぶりへ一日延ばす産毛剃り

明日からの留守番頼まざるおすそ分け

ふくらみ面心で詫びて母と居る

祭から西瓜の冷えた頃帰る

夾竹桃去年別れた女思っ

我儘な翁水郷の生字引

我儘を許してくれた亡妻を恋っ

短大へ行く我儘を聞いてやる

肩書がとれて我儘だけ残り

皮靴中味は漫画とスポーツ紙

ビックリ箱中味に嘘がつめてある

昂りを白いブラウス隠せるか

勸忍袋の中味を開けてみたくなる

母を哭かせた父も一緒に眠る墓

愚痴聞いてどこも一緒に慰める

来世も一緒にと言える仲でいる

シェバードも一緒に受ける感謝状

一緒では写したくないのない夫婦

今日からは一緒ネクタイ送ってあげ

川柳塔きやらばく

腹帯に伝う命と対話する

帯たたむ迄の女の物語り

帯どめのヒスイが愛をもとらせる

しめすぎないで遊びも欲しい名白屋帯

帯になりたすきになって世を終る

求芽

武庫坊

年代

幸

はつ絵

英王子

花代子

美穂

白溪子

杜的

和友

栄

陽露子

ただし

佳秋

紅葉

水客

喪の帯が女のドラマ繰り返す
帯芯のあたりに川の音を秘す
離れても祈りの帯で子をつなぐ
美人画の少しくずして帯をしめ
旅なかば帯をゆるめて深呼吸
眼帯に命あずけて祈りの日
帯どめが姑への痛み消している
流れ星集めて母の帯を織る
旅の最中めて時々帯もゆるくなり
儂き身へまたしめあげる帯の痕
丸帯がすたれ勝ちとる女の自由
母の忌へ形身の帯をしめて行く
帯をどく想い違いを解くように
愛憎を綴じて喪明けの帯の芯
不器用で帯一本をもてあます

川柳塔まつえ八月例会 恒松 叮紅報

蛙にも緊急用という泳ぎ
泳ぐのは別で水着を選ぶギャル
クロールに疲れては浮く井の蛙
犬かきを敵に見られた日の不覚
泳法もひとつおぼえたい寝息
定年という岸まで泳ぎ切る
新人類泳ぐ社会の波荒い
泳がせて確証探す刑事の眼
まっとうに人生泳ぐ自由型
清流を泳ぐ魚が透けて見え
超音波胎児遊泳写し出す
失敗が怖くて橋が渡れない
失敗へ直す強さ妻がもつ
失敗もあるさ明日に掛けてみる
くず箆に失敗談が溢れるでる

純子 千代子 花子 夕子 千春 富美子 登栄 千春 瑞枝 とも子 荒介 玲子 雄々 文子 代仕男 妻子 きみえ 貢範 小生 笑円 多賀子 静恵 育子 昭二 芳子 山久 美治

失敗した目玉焼きを食わされる
成功者失敗談は派手にする
どうしても消せぬ失敗つきまとい
失敗も成功もない夫です
失敗を許した母の丸い背な
朝昼晩失敗続き老いの坂
取り換えのきかぬ失敗した夫婦
我が姿写す気力も失せて病み
泥んこの姿夢編む壺の彩
立ち姿やっぱり猫背になっている
姿見て自分に惚れる八等身
姿見も機嫌がわるい今日の顔
夕もやの美女が新剪る立ち姿
アルバムの還らぬ勇姿が風化する
君が代へ父は姿勢を整える
姿なき影におののけ夜の底
美しい姿湖水へ陽が沈む
お別れの後姿に涙雨
負け犬が帰るストレス溜めたまま
ストレスが溜った果てのいじめつ子
ストレスがほしがれるもくの麦焼酎
ストレスを土産に入れる里帰り
人妻の微笑につられ勘違い
勘違いの一方に喋られて
電話に勘違いして乗りおくれ
手が先に出てから気付く勘違い
叱られた訳がわからぬ勘違い
川柳わかやま 神平 狂虎報
一日の枷をはずしている浴衣
浴衣がけの父は仕事の鬼でない

静翁 愚童 秀子 市雄 房星 翠子 風子 三男 ノブ 蒼流 みえ 友子 寿美子 瑞枝 鳳人 由郎 登美也 正朗 雪美 舞吉 長三 芳枝 鶴丸 日出子 巡歩 静江 与根一 叮紅 緑良 武雄

浴衣縫う母に女を垣間みる
パリパリの浴衣で歩く祭笛
糊固し十字のようにゆかた干す
ゆかたにも着慣れ気軽な回復期
ゆかたを着せた夫が男臭くなる
約束のときめきがあがるゆかた帯
盆踊りだけの浴衣とすぐ判る
司会者のゆかたが会を和ませる
洗いざらしの浴衣素足が美しい
宿ゆかた羽目を外してみたい日も
毛を染めていてもゆかたに年を見せ
東京染と競って地場の紺ゆかた
ひと夏のドラマで終る娘のゆかた
祇園祭り外人さんの浴衣がけ
潮騒が一つのドラマ消えてゆく
潮騒が二人の序曲になってくれ
潮騒が不調和音でくる文化
明日島を去る潮騒と酌み交す
末期の奇跡しおさい無言の時刻む
潮騒に男と女の唄がある
防人の碑と潮騒を聞いている
潮騒が突となった旅の宿
故郷の実感潮騒聞く枕
潮騒と仲よく暮らす浜の町
潮騒が語り続けてきたテーマ
妻の持つひもの長さで飛んでいる
ランク付けの中で飛ぶ日の切符買っ
痛烈な野次を飛ばそう暑気払い
足を地に付けずにそれで飛べますか
断髪力士の涙見た録

正子 紫香 信秋 美智子 雀踊子 裕美 凡九郎 三男 太茂津 紀久子 豊太 雄次郎 萬的 照代 稚代 登志代 克子 光代 石子 与呂志 たつお 恭子 柳宏子 瑞穂 幸 山久 寿子 忠 正博 白光子

紙切りの鉄見事に夢を切り
決断を迫られている裁ち鉄
仏前へ花の傷みを知る鉄
八朔園鉄もたげて摘果する

もくせい川柳会

田中

正坊報

守

孫の数増えて夫の七回忌
姿なくコオロギが鳴くビルの隅
山梔子や泣きたい時は泣くがいい
夾竹桃四十二年の夏めぐる

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

雄々

出不精に喝入れに来る孫の声
なまつばを飲み込む浜に居る人魚
おふくろの味夏ごとに里の味
左むけ左で未だに平でいる
逆論も筋通っている左寄り
冷酒に雑魚四五匹でよし左党
休耕田モグラも荒す物が語
ほとばしる汗が意欲を物語る
意欲だせ窓際族にも申す
墨を摺る六十路の意欲すてきれず
競い合う生きる意欲か蟬の声
包丁の危なげに見ゆ左きき
情欲の世界へおりた仏の子
世界一はめてせしめるポーナス日
月世界初めて踏んだくつの型
エイズ菌世界の人をびびらせる
円高でみつめる世界商社マン
何をする意欲もなくて蟬しぐれ
極楽の高野でかいた大いびき

よし子
登志美
寿美子
正坊
雀踊子
紫映
たつみ
早苗
規仔
巡歩
宗光
道子
花子
杏水
節子
白峰
倫子
三和
孝美
弘朗

言葉なき円空仏の眼が細く
風鈴と五山の送り火の点火待つ
ひと言ですうつと解けたわだかまり
甲子園最頂以外は強くみえ
終い迄聞けばのろけの愚痴話
色づいてトマトひよりに突つかれる
くれかかかる空に七色昼花火
猫が啼く猫に言葉がある様に
よい花火あしたに残す子の予算
ある時はお墓に見えるツインビル
口あけて花火見物みな同じ
花火持つ少女が消える火が消える
裏切りも見抜けず妻の座に甘え
はなむけの言葉に嘘を少し盛り
朴訥な言葉は妙にリアリティー
五山の火燃えて闇夜に秋の声
やんわりと後でこれえる京言葉
ポロクソに言われた筋はバラに無い
気象庁軌道修正に忙しい
戦争展重い言葉が並んでいる
父親は言葉すくない原爆忌
あの木何この花何と子にきかれ
ポロクソに言われて泡立草伸びる
人柄がにじみ出ている地味好み
一夜漬け石の重さに母が生き
ポロクソの会話補聴器オフにする

萬の報
杜的
慶子
喜代子
容子
隆
春子
英子
明子
きく子
典子
つえ子
風云児
白漢子
富子
登代子
房子
美祿子
小森洋子
本多洋子

意志打けぬ恋の雫 夢つづる
明日のある命きにいに手を洗う
地獄極楽が両端にある虹の橋
七転びやはり裸でころがった
梅雨探し伝え哀しい女人堂
どうしても逢わないわが胸にある
三猿になって聖書はとじたまま
古里の山河にいつも愛がある
蛇を見るまでは安心できぬ道
暑いのは向日葵のせいそうだろう
大仏に会えて心の整理つき
主流派に逆って見る天の邪鬼
女傑ゆえ眉もふとめにかいておく
傷舐めてなめて黄昏丸くなる
妻の吹くラップに白旗振っておく
価値感の違いが友を遠くする
目に見えぬ神よりこわい放射能
甲子園涙をのんで握る土
損のない足並だけがよく揃い

重人
比呂志
喜醉
洛醉
雅巢
与呂志

天皇のポケットに無い小ゼニ
まあまあの話押さえて筋曲げず
握手して別れて定年それっきり
愚痴一つ軽かわわせる歳と成り
マイナスとプラスでテンポ良い夫婦
待ちこがれ思いこがれた手の温み

滋雀報
藤子
覺然坊
曲ん手
新造
ハル子
三重子
公一
章久
勝美
善信

川柳大阪
山下みつる報

度

雪する小枝に透けている命
来る人が有って一と枝差して待ち
枝打ちか里の家紋は染め替えぬ
枝打ちをして雪国が冬を待つ
おみくじを結び枝振り選っている
たんざくにゆれた乙女の夢遠く
厳格に言えば夫婦でない夫婦
厳格な父が育てたチャランポラン
厳格な父には父の自負がある
厳格に折目を正す繫糸
厳格な父カタカナに見えるくる

我勝
司
虎醉吟
天平
笑風
本蔭棒
鉄心
柳弘
もとみ
しげお
一歩
醉舟
鈍泉
義雄
哲流
遊子
三千雄
金太
みつる

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

くちなしが古いの七月慰める

めずらしや明い見出しのトップ記事

昼のバス敬老会の客ばかり

断ち切れぬ過去が銀河を往き来する

大花火眠る羅漢も目をさまし

明日まで待てぬ思いの電話する

男七十厨房に入る明日が有る

素晴しき今日が明日につづいてる

無理をせず明日へと繋ぐこのリズム

てのひらの虹がだんだん瘦せてくる

城北川柳会

美しい花火に時間忘れさせ

汗流すダンスに化粧して出掛け

寝るだけが楽しみ働きも老い

J R格安切符で客を呼び

奥嵯峨は螢も見もの鮎の宿

宝物拾いはしゃいで夢がさめ

どたばたと孫が帰って来た安堵

出る杭になれず静かに住む余生

福耳にまだ幸せは巡り来す

一杯の牛乳飲んで足る我が家

故郷のたまりに乗せて来た香り

二日間盆の踊りに買って浴衣

暑くとも着物揃える喪の知らせ

熱帯夜蚊とたわむれて寝ずの番

すだれ越し和服の似合う京銘菓

姑は所詮ドラマの端役です

思う様に行かぬを生涯追いつづけ

カナ文字の母の手紙に芯がある

蟬時雨朝顔市の客が混み

雅美

彩

ふゆ

正枝

美佐

秀伸

三郎

彩女

秋園

和子

綾珠

寿美礼

正行

敏子

ふみ

晃世

トキワ

秀夫

道子

倫子

静歩

八重子

市郎

佐津乃

文子

温子

新一郎

悟郎

公一

達子

天ぶら油に生活の音を聞く

移り香へ妻の想像たたくましい

娘と共に汐の香うれしい宿の下駄

プロレスが好きなら老妻たのもし

見えすいた嘘はとほけて聞いてやる

病むまいと日夜努力の老夫婦

別れ道手の鳴る方に落し穴

ひとすじに働く背ながら処世説く

堺川柳会

着飾って人間ウソをいに行

人間が出来ると腹で芸をする

言葉持つ人間同士もめている

ゴキブリが鳴いてくれれば捕りやすい

ハンデいの重さに負けぬ車椅子

声だけを二階へ上げる台所

人間も蟻も歩いてる真昼

逝つた児を知らず虫かご風に揺れ

人間は勘定ばかりして暮し

道端で朝取りぶどうの荷をひろげ

マンションで気弱になったかぶと虫

虫すだく父の羅漢に逢える里

人間失格ひまわりばかり描いている

虫けらのようにされても耐える職

天井の低い二階に住む詩人

届かない思いがにがいに酒にする

良薬も毒もおんなじよう苦い

良薬と判つていても出る吐息

老夫婦二階に思い出積んである

荷崩れもなく晩成の父の貨車

サーピスが良くて荷物が先に着き

テルミ

満津子

純子

右近

静子

正枝

白峰

登志代

千万里

千子

楓

東雲

小雪

かりん

あかり

月子

天笑

頂留子

紀美女

幸子

真二郎

素柳

美房

鬼遊

信博

均

曲ん手

道女

人間の性善説を信じ切る

苦いにがに経験ばかり戦中派

ひと風呂を浴びて人間らしくなり

爽竹桃苦い記憶が甦える

川柳後楽

竹踏みをして一日を締めくくり

ひよたんのような様なお人で憎まれず

千成のひよたんならすが老母の夢

トボトボと歩く靴音明日がない

今日もまた矢面に立つ靴をはく

母子家庭靴の白さを干してある

貧しさを生きぬいてきたちび靴

浪曲が五右衛門風呂によく似合い

終い風呂祖母の小唄が洩れてくる

もう風呂と一緒に入らぬ声変り

くすり湯の味かみしめてる孤独

盆休み過疎地へ都会持つて来る

雷が臍を狙って海に落ち

借りて来た猫になつてる組合旗

宇宙から機雷落ちたかベルシャ湾

借りた金減らず利子だけ払わされ

土壇場で迷わず借れる友があり

借用証の一枚が背に重い

金借りる女の顔にある色気

長靴に鉢巻市場の朝が明け

川柳塔まつえ七月例会

定年の帽子誰待つ雨の音

軍帽の似合った僕の古写真

馬鹿になる帽子をやつと脱ぎました

夏帽子去年の恋が入れてある

博子

妻子

新造

克子

井上柳五郎報

吟平

たけ志

美智子

拓治

玉水

草風

健一

佐加恵

照路

秋月

文平

紫峰

金吾

中建

鮫虎狼

柳五郎

博友

桃風

番茶

哲郎

町紅報

房子

美治

三男

壽美子

満江

たわむれの風が飛ばした夏帽子
 球団の順位で孫ら帽子掛け
 お揃いの帽子張り切る応援団
 人格を語る帽子が板につく
 寿命伸びえんえん続く古帽子
 趣味をもつ人だと思っペレー帽
 遺産分けてきばきできぬ訳があり
 てきばきと出来ぬ給理の予定表
 アイデアがてきばきCM売り出させ
 てきばきと物言う癖は親譲り
 てきばきと出来る姑に仕込まれる
 てきばきと嫁が台詞を書きかえる
 てきばきとしたいが体ついてこそ
 てきばきと古い家風を破る嫁
 てきばきとされてドジ踏む年になり
 弟妹に姉てきばきと母がわり
 謎を解く鍵は母御のふところに
 出土品昔の謎が解けてくる
 謎めいた話が本音かも知れぬ
 妻の謎針山だけは知っている
 老人の謎に少年寄りこかず
 警察犬が止まりこつから謎となる
 空港で謎の女のサングラス
 謎かけて秘密を手繰る占い師
 庭灯籠先祖の謎を秘めている
 人間の一生謎と思っ日も
 なぞなぞの上手い女に引つ掛かり
 パソコンの枠から出ない新人類
 新人類が無茶な答案書いている
 遊ぶ金惜しまず使う新人類

きみえ 友子 笑円 翠星 蒼流 静恵 雄々 芳枝 鳳人 小生 玄艸 育子 多賀子 みえ 昭二 正朗 代仕男 妻子 愚童 山久 静翁 貢雄 重範 登美也 ノブ みつこ 芳子 与根一 荒介 瑞枝 舞吉

ワープロもパソコンもある新人類
 新人類骨董品には目も向けず
 無茶なことうているのは私か
 追い越しの無茶で哀れやボンコツ車
 言論の自由のなかにある無謀
 無茶するなするなと無茶を言う上司
 もつ無茶は出来ぬと足の骨が鳴る

風子 静江 日出子 巡歩 長三 鶴丸 叮紅

8月11日、故岩田美代の初盆会まいりに、
 夫正男氏や御家族の出迎えを受け、ご自宅
 の奥座敷に美しく祭られた新棚(あらだな)
 へ橘高薫風氏をはじめサークル檸檬・堺川柳
 会・富柳会の有志一同が彼女のご冥福を祈り
 献句をした。

献句

そこに残り香惚ぶ供養花
 新盆会いつもの顔が来てくれる
 初盆や柳友の声聞きはれる
 浄土からいまだに下手な句を笑つ
 浄土から帰る美代さんと話す胸
 富美ヶ丘まだ美代さんがいてくれる
 そもそのものなれそめを聞く初盆会
 さんげする供養のひとつ亡妻忌
 馴れ染めを写真の美代さん苦笑い
 新棚のなかでのろけを聞いてはる
 新盆に洋蘭似合う仏さま
 逢いたくて来たのに美代さん仏さま
 初盆へ話しかけたや蟬の声

今日子 智恵子 千房子 美房 維久子 花梢 泰子 美緒 千代女 柳太 薫風 さよ子 岳人

昭和62年度大阪文化祭
 第39回川柳大会

日時 昭和62年11月14日(土)
 午前11時開場

会場 大阪市中央公会堂(中集會室)
 地下鉄・京阪「淀屋橋」下車

宿題 「切符」 阿萬 萬の選
 「時事雑詠」 柏原幻四郎選
 「黒」 高橋 古啓選
 「専科」 米澤 俊夫選
 「横」 龜山 恭太選
 「門」 永田 帆船選

席題 当日2題 各題2句 締切1時
 出句は出席者に限る

賞 宿題・席題とも秀句に大阪府知
 事・大阪市長、大阪府・市教育
 委員長から「川柳賞」を贈呈

会費 五〇〇円(作品集代を含む)

主催 大阪府 大阪府教育委員会
 大阪府教育委員会
 大阪市教育委員会

10月各地句会案内

	日/時及び題	会場と投句先
尼崎 いくしま	2日(金)午後1時半より 釜・広告・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水字稲荷247-21 田測定人 句会費 300円 投句料 60円切手 3枚
川柳 わかやま	4日(日)午後1時より 近い・色気・首	和歌山県民文化会館4F 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手 3枚
川柳塔 まつえ	10日(土)午後1時半より ワープロ・とことん・切符	慈雲寺 松江市和田見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
八尾市民 川柳会	11日(日)夕6時より 墨・新・和・やさしい	八尾市立労働会館 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
西宮北口	12日(月)午後1時より 靴・素顔・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手 4枚
南海電鉄 川柳会	15日(木)夕6時より シートベルト・チャンス・ヤング	南海会館ビル内南海電鉄本社ビル地下食堂 南海・近鉄・地下鉄各難波駅下車高島屋東南角 〒545 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 廣井季柳子 句会費 無料 投句料 60円切手 1枚
高槻川柳 サークル 卵の花	15日(木)午後1時より 上品・裏切る・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電鉄高槻下車歩5分 〒569 高槻市明野町15-27 上原 逸 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
富柳会	15日(木)午後1時より 気兼ね・菊・金利	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
川柳 ねやがわ	18日(日)午後12時より 波紋・放浪・主婦・自由吟	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚
南大阪 川柳会	19日(月)夕6時より 発足・目算・欲張り・老骨	寺田町高松会館 JR環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
もくせい 川柳会	19日(月)午後1時より 空・蹴る・怪しい・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曾根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1-3,5-801 田中正坊
駒つなぎ 川柳会	26日(月)夕6時より 先決・手軽・捨て鉢・雑踏	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸
堺川柳会・川柳東大阪は市民川柳大会のため例会はお休みです。		

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内
原稿送り先(メ切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)
〒596 岸和田市荒木町1-29-1 宮園射月芳

本社10月句会

日時 10月4日(日) 午後5時30分
 会場 大阪市立労働会館

JR環状線又は地下鉄中央線
 「森ノ宮」下車すぐ(日生球場東側)
 62年度路郎賞・川柳塔賞表彰

兼題 「沈黙」 阿萬 幸萬
 「沈黙」 江山 幸萬
 「摩擦」 玉置 重選
 「占う」 西尾 栗選
 席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守
 会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
 各葉毎に裏面に必ず氏名明記。
 投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

11月の兼題 「座りだこ」「九官鳥」
 「うらおもて」「絵皿」

11月の本社句会は7日(土)

『夜市川柳』募集

第5回 「塩」 奥田 みつ子 選

3句・締切 10月末日

第6回 「帽子」 神平 狂虎 選

締切 11月末日

投句先 〒593 堺市堀上緑町一丁目九二

河内天笑方

堺川柳会

● 募 集 ●

十二月号発表表(10月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栗選
 水煙抄(10句) 黒川 紫選
 愛染帖(3句) 橘高 薫風選
 課題吟(各題5句以内)
 「思い出」 藤田 泰子選
 「音」 寺田 裕美選
 「結論」 渡辺 独歩選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
 ★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

一月号発表表(11月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栗選
 水煙抄(10句) 黒川 紫選
 愛染帖(3句) 橘高 薫風選
 課題吟(各題5句以内)
 「松」 石田 清泉選
 「驚く」 吉原 紅月選
 「妥協」 神夏磯 道子選

★愛染帖課題吟へは同人誌友を限らず。
 ★用紙は川柳塔社柳箋を、使用ください。

10月の常任理事会は1日(木)

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

昭和六十二年九月二十五日印刷

昭和六十二年十月一日発行

編集兼 西尾 栗

印刷所 藤原 童心社

〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(三六九)一六九一四番

振替口座大阪8-133336八番

編集後記

☆傘寿を越えた阿達義雄先生が原稿を寄せられて、尚一年二年、柄井川柳出現前の大坂堺の前句附と江戸の前句附との関係について、ご執筆を続けて下さることになった。「俳諧あづまからげ」「川柳点の先達となった上方句と特殊の慣用前句題」など、大坂会所本に現れてくる佳句と選者の、総合的考察を、平易に分かり易く書いて下さるのである。深謝申し上げる。

☆路郎賞と川柳塔賞は、超ベテランと超新進の受賞するところとなる。京都高槻の地元が揃うのも珍らしい☆九月六日の秋田の大会ではユイモアについて話された。女性の進出が薄れがちのユイモアを極力盛り込みたい。若い世代が食指を動かすのは、川柳では、このユイモアのような気がしてならない。新しいユイモアを模索したい。

☆秋田五城目町から出て川柳誌「すずむし」は当人が鈴虫の北限地であることに由来するのを知った。☆男鹿半島一周の観光で、寒風山の彼方は蕙風山とて激しい風に向って飛翔した大会終了後、栞主幹と合流するため青森へ直行、民謡酒場の津軽ジョンガラの三味に早速と溶け込んだ。

☆翌日は栞主幹ご夫妻と、甲吉・五葉庵・叶氏らの案内で太宰治の生家、斜陽館十三湖、十三の砂山へ。大きな生がきに舌鼓をうち、渚で錦石を拾った。その夜は私一人岩木山麓の嶽温泉で泊った。往路、黒石市の後藤柳允の墓に詣で煙草を供えた。白濁する硫黄泉は素朴な木枠の湯槽に溢れ、いのちを思わしめた。舞茸をたらふく食べ地酒を樂しんだ。路郎の「川柳は人間陶冶の詩」のいわれを反芻して容易に寝つけなかった。

☆八日、嶽温泉まで迎えて来て下さったのは川柳家の村上志朗さんで、半日懇切な弘前案内をして下さった☆沢山の初対面の人、再会の人達の厚意で、四日間の旅は疲れも知らず、早朝、大阪駅に着きそのままカルチャーの教室に出た(薫)▼蜂が巣を作った。二階の物干場に置いてある炭袋に、直径七センチほどの小さいものである。取りのぞくつもりで近づいて見ると、真黒になるほど蜂がうごめいている。営々と動いているが何をしているのかわからない。時々、一、二匹が翔び立つ、別なのがやってくる。そして先住者(♀)に混じって、同じようにうごめいている。家族構成がどうなっているのかわからない。

▼サラリーマンが生涯かけて自分の家も持つことが不可能になった現在だが、同じ自然の一員である蜂たちは一と月そこでそこで住居を作ってしまうのである。霊長類ヒト科でありながら、わが住む家も持てないのに、企業に奉仕する産業戦士たちは、豊かな国とやらやまねながら、わが身に關係のない戦車や軍用機を持って仮想敵国と兵器の数を競争している国を支えているのである。

▼四十数年も経つと忘れっぽくなるが、詩人、峠三吉の「原爆詩集」の序。ちちをかえせ／はほをかえせ／としよりをかえせ／こどもをかえせ／わたしをかえせ／わたしにつながる／にげんをかえせ／にげんの／にげんのないあるかぎり／くすれぬいわを／へいわをかえせ。を私は忘れることはできないだろう。何ごともなくうごめく蜂を見ていると、果をとることを断念した。(き)☆、いのちいきいき一人・いきもの共存をめざしてのテーマが八月一日から百日間の会期で「天王寺博覧会」が始まった。PRのパンフレットを見ていると、翼龍ケツアルコアトルスが空を飛ぶ様子を二分の一の模型を使って再現した映画が「テーマ館」の大スクリーンで上映されているという。これは、ぜひ見たものだ☆翼龍といのは、一億年前、恐龍時代に生存した、いわば空飛ぶ恐龍と言うべき動物で、幾つかの種類があり、中でもケツアルコアトルスは翼龍十一mという巨大な翼龍である。優秀なグライダーのように、時速わずかに二十四キロ位で、ゆつくり滑空するという。

☆恐龍時代は気候が穏やかで、現代のように風速にバラツキがなく、絶えず微風が吹いていた。滑空には理想的な気象条件だったのであろう。

☆その翼龍も、恐龍の絶滅と時を同じくして滅びてしまった。絶滅の原因については、種族老化説、伝染病説、気温・水温低下説、食糧不足説など諸説紛々、主なものだけでも十四もの仮説が発表されているが、何れも決め手に欠け、謎は残されたままである。

☆その中の一つに、超新星爆発により生じた放射線が気候に及ぼした影響が原因だとする説がある。核戦争による人類の滅亡は決して絵空事ではない(史)

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマンと
フォーマルと。

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 **オースケ**

〒540 大阪市東区南新町 1-13
☎ 06(941) 8015

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ



ほうらい



TEL641-0551